

『うつせみのあなたに 第5巻』の内容

09.05.13～09.06.01

＊「こんなことを書きました（その7）」2009-05-13：2009-05-04 から 2009-05-12 に書いた記事のダイジェスト版です。

＊「かく・かける（1）」2009-05-14：「賭け・賭ける」と「占い・占う」に伴う「後ろめたさ」の根底には、「圧倒的なパワーに対する全面降伏」＝「負ける」＝「任せる」の心理があるのではないかと問いかけています。そのパワーの代理人としての占い師＝シャーマン＝まつりごとの主宰者と、その代理人の委託された＝でっち上げたパワーの機能を、紙芝居的に描いた過去の記事を引用しています。歴史的視点からヒトの成長のレベルへと、話を移し、赤ちゃんが「賭ける」および「占う」存在であることにも、読者の注意を喚起しています。このブログでよく使う「表象」「トリトメのない記号＝まぼろし」「ニュートラルな信号」を新しい切り口で、説明しています。キーワードは、「超越者」「代理＝代行」「表象作用」「シャーマニズム」「ネオテニー（＝幼形成熟）」「欲求」「生存率」「確率」「ノイズ」「熱」「偶然」「マラルメ」「ゲイ・サイエンス」です。

＊「かく・かける（2）」2009-05-15：自分がギャンブルに縁遠いことを告白しています。そのため、個別の賭け事ではなく、「人生は賭けだ」「人生はゲームだ」という立場から話を進める、との見通しを語っています。「かく・かける」を「漢字＋ひらがな」に置換え、その意味の多重性＝多層性を紹介しています。また、その際に用いられている漢字の「解字」を調べた結果を報告しています。そうした過程から得た「かく・かける」のイメージを、「宙ぶらりん」と総括しています。「かく」と深い関係がある言葉として、「しるし・しるす・しるべ」について考察しています。このブログでよく使う「表象」「トリトメのない記号＝まぼろし」「ニュートラルな信号」を具体例を示して説明しています。キーワードは、「文字変換」「芥川龍之介』『蜘蛛の糸』『web』『net』『text』『印鑑』『スタンプ』『採点』『成績』『通知表』『落書き』『文字』です。

＊「かく・かける（3）」2009-05-16：この日の前編。国際関係・国際政治という分野が、文字通り「際＝あいだ」という空間で多種多様＝雑多な「信号」をやりとりする、ある

いは、やりすごす、きわめて混沌とした場であることを指摘しています。そこから、「間（＝あいだ・あわい）」という考え方に話を移し、それが「さい・際」であることから、マラルメの「さい・さいころ」へと言葉遊びによって飛躍し、その言葉の身ぶり＝運動によって、「信号」同士が出合う「偶然性」を読者に体感してもらおうという実験をしています。読者にそれが通じたかは不明です。混乱させるだけに終わったという感じがします。必然と偶然とを対立したものとする見方に懐疑的になっている点が、その後のシリーズの展開の萌芽ともみなせます。キーワードは、「ボル・ポト」「カンボジア」「植民地」「仏印」「留学」「ホメイニ」「亡命」「シアヌーク」「中国共産党」「フランス共和国憲法」「基本的人権」「アルゼンチン」「サルゴジ大統領」「ハンガリー」「インテリジェンス＝intelligence」「情報＝information」「符号（※ふごう）」「符合（※ふごう）」「割符（※わりふ）」です。

＊「かく・かける（4）」2009-05-16：この日の後編。「書く」という行為の歴史的変遷を観察しています。このブログにおいてのスタンスが「ブリコラージュ」であることを確認し、読者に理解を求めています。「しるす・しるし」へと話を進め、「しる・知る・領る」という言葉との関係を指摘し、「しる」が生物の「マーキング行動」にほかならないことに、読者の注意を喚起しています。ここで、ヒトの身勝手な行動を風刺しています。話は、再び「間（＝あいだ・あわい）」「際」に移り、この記事を書いている行為自体が、「あいだ」で「宙ぶらりん」の状態に身をさらす「賭ける」＝「書ける」ことであるということ、言葉の身ぶりによる、読者への「ほのめかし」として提示しようという、言葉の遊びによる実験をしています。本人としては私家版マラルメのパロディのつもりでしたが、今、再読すると、この試みも、読者に全然「受けず」＝「受信されず」に終わっていると思います。キーワードは、「クロード・レヴィ＝ストロース」「ブランド＝商標＝焼印＝烙印」「リーバイ・ストラウス」「リーバイス」「テリトリー」「おしっこ」「mark」「『ゴドーを待ちながら』」「サミュエル・ベケット」「I i / Y y」「inter-」「国語辞典」「イ・ビョンホン」「オールイン」です。直接書かなかったキーワードは、「ジャック・デリダ」「モーリス・ブランショ」「蓮實重彦」「渡部直己」です。

＊「かく・かける（5）」2009-05-17：マラルメをゴドーのように待ち続けながら、訪れている気配が感じられないので、ややへこみ気味です。本人は本気なのですが、それを「オカルト的」と取られるのを懸念しています。日本という土壌＝風土において、「マラルメする」試みとして、日本語の韻文である俳句を取り上げています。俳句が、偶然性と即興性にいかに依存しているかを訴え、その源である連歌と俳諧に、読者の注意を喚起しています。連歌について、お勉強をしていたさいに「付合（※つけあい）」という「符号（※ふごう）・符合（※ふごう）」に似た語に遭遇した「符合（※ふごう）」に驚くと同時に喜んでしまいます。その「符合」に、マラルメの気配を感じたと自己満足しています。キーワードは、「表記」「思索＝詩作＝試作」「定型詩」「音節」「拍」「モーラ」「でまかせ」「アドリブ」「ジャズ」です。

＊「かく・かける (6)」2009-05-18：偶然性の根っこにある、「丁（＝偶数）か半（＝奇数）か」という「単純な賭け」である２項対立の「うさん臭さ」をやんわりと指弾しています。ここで、これまでの調べものの結果を一覧するために、コピーペーストを利用し、長々としたリスト＝図表を作成しています。その最初と最後の部分だけを利用し、文学理論の１つである「読んだから書ける」という原則を紹介しています。また、俳句の不条理性についても、ノンセンスという言葉を使って考察しています。ここでも、読者に、言葉の内容で「説く」のではなく、言葉の身ぶりで「ほのめかす」という実験をしています。キーワードは、「いないいないばあ」「fort / da」「フロイト」「ジャック・ラカン」「読む／詠む」「定型詩」「吉田戦車」「不条理演劇」「ウジェーヌ・イヨネスコ」「ハロルド・ピンター」「サミュエル・ベケット」「松鶴家千とせ」「シュール」「高山宏」「高橋康也」「『エクスタシーの系譜』」「種村季弘」「『ナンセンス詩人の肖像』」「グスタフ・ルネ・ホッケ」「『文学におけるマニエリスム』」「sense」「nonsense」「古池や蛙飛びこむ水の音」「松尾芭蕉」「爆笑問題」「松尾伴内」です。

＊「かく・かける (7)」2009-05-19：この日の前編。異形とも言える文字の表記の具体例を挙げて、ヒトがテリトリーにこだわり、異質なものを、よそのものを排除する習性があることを論じています。また、異質なものを思考停止により、排除する傾向に対して批判しています。幼いころに聞いて現在も覚えているある歌の歌詞が掛詞（※かけことば）だったらしいことに、今になって気づいた時の戸惑いを自己分析しています。自分を含め、ヒトがいかにか忘れやすく、鈍感であるかを反省しています。また、当たり前だと思いついて入っていることが、いかに多いかについて警戒すべきだと訴えています。また、ある読者の方からメールをいただき、このブログの読みにくさを指摘されたことへの、返答を書いています。このシリーズでも、実験的に試みている、「言葉の内容ではなく、その身ぶりによって、テーマを示す」という方法、「意味の方向付けを故意に乱してずらす」という戦略について、直接的にいわば「種明かし」をしています。この部分は、再読すると、ギャグの説明のようで恥ずかしいです。実際、そうなのでしょうけど……。キーワードは、「ブルガリ」「BVLGARI」「トイザらス」「TOYSЯUS」「アンフィニ」「『あ』に濁点」「人権」「思いやる」「偶然性」「有楽町で逢いましょう」「フランク永井」「こぬか雨」「雨の御堂筋」「欧陽菲菲（※オウヤン・フェイフェイ）」「アルファベット」です。直接書かなかったキーワードは、「渡部直己」です。

＊「かく・かける (8)」2009-05-19：この日の後編。自分が知っている限りでのヨーロッパの言語のアルファベットについて触れ、その中で「I i / Y y」「U u / V v」「W w」の関係を説明し、「BVLGARI」が「BULGARI」でなくても、「変」ではないと指摘しています。実は「異質なもの」なのに、普段は「当たり前のもの」だと思いついて入っている自分を反省する過程で、アルファベットと「あいいうえお

表」を例に挙げています。個人的には非常に愛着のある「カジノ人間主義」2009-01-30 から、重要だと思われる部分を引用しています。連日、マラルメや偶然性について考え続けていたために、悪夢にうなされ、よく眠れなかったことを告白しています。キーワードは、「ブリコラージュ」「NHK」「外国語講座」「ロシア文字＝キリル文字」「歴史的仮名遣い」「丸谷オー」「ポル・ポト」「猛毒」です。直接書かなかったキーワードは、「比較言語学」です。

＊「占い・占う」2009-05-20：「かく・かける」シリーズ（1）～（8）の補遺としての記事、第1弾です。「占い・占う」の歴史的経緯のお勉強をしています。また、英語で「占い・占う」に相当する語についても、触れています。「予言」と「預言」の違いにこだわり、「予」「預」の中心となるイメージを漢和辞典で調べた結果を報告しています。真面目＝本気で、こじつけもしています。「かく・かける（1）」で引用した「紙芝居」を、再度、引用しています。宗教や占いにからむ問題なので、関係方面への気遣いを示しています。かつてテレビで見た、靈感占いについての思い出を語っています。次に、「予言・預言」の「言」にこだわって、かなり詳細な分析をしています。キーワードは、「幻想」「錯覚」「うらかた・占形・占象・卜兆」「fortune teller」「diviner」「予・余」「代理」「シャーマニズム」「まつりごと」「リチャード・ニクソン」「クリントン」「ブッシュ父子」「カーター」「レーガン」「フォード」「しるし・きざし・あらわれ」です。直接書かなかったキーワードは、「藤田小女姫」「言霊」「聖書」です。

＊「賭け・賭ける」2009-05-21：「かく・かける」シリーズ（1）～（8）の補遺としての記事、第2弾です。「賭け・賭ける」に必須の「確率・統計」が苦手で、扱えないことを恥じています。照れ隠しに、ケータイのダイヤルボタンを使ったオヤジギャグでお茶を濁しています。また、賭けやゲームが苦手であるという言い訳をしながら、旅行と音楽に縁遠いことも告白しています。ここでもまた、「人生は賭けだ」「人生はゲームだ」と居直っています。英語で「賭け・賭ける」を意味する語を挙げて、体裁をつくろうとしています。急にシリアスになり、金融危機と大不況についての個人的な見解を述べています。そこから出発して、偶然性について、突っ込んだ考察をしています。その考察の下敷きは、去年、ノーベル物理学賞を受賞した人たちの発見した、摩訶不思議な理論および現象です。その理論・現象についての解説を、新聞や雑誌で読んだ時に、理解はできないながらも、かなり大きな衝撃と影響を受けました。シリアスな話になったので、最後は軽めの調子で記事を終えています。キーワードは、「gamble」「game」「bet」「venture」「chance」「金融工学」「証券化」「信用危機」「陰謀」「2進法」「2項対立」「機械・器械」「対称性の破れ」「クオーク世代の予言」「自発的対称性の破れ」「小林誠」「益川敏英」「南部陽一郎」「吉田戦車」「ビジネス書」「処世術」です。

＊「書く・書ける（1）」2009-05-22：「かく・かける」シリーズ（1）～（8）の補遺とし

ての記事、第3弾です。この日の前編。新しいもの、よそのもの、異形のことを、「思いやる」ことなく、ただ排除しようとするために、罵倒や悪態をつく一部の人たちに対する憤りの表明の1つとして、ケータイ小説への批判とも言えない言葉を発する人たちを、風刺しています。結果的に、ケータイ小説擁護論になっています。「ろくに本を読んでもいないのに」といった決まり文句の悪態のはらんでいる矛盾点を、文学理論を用いて批判しています。キーワードは、特にありません。

＊「書く・書ける(2)」2009-05-22：この日の後編。「今、ここにあるものやことや現象と、手持の知識と記憶を総動員する」という、このブログのスタンスを説明しています。したがって、マラルメという固有名詞を使っても、それは歴史上存在したマラルメとは関係なく、単なる「記号」＝「信号」＝「言葉」＝「書くことを促す触媒」＝言霊であると主張しています。そのマラルメという言葉に、「おそらく」促されて、「偶然・必然」という言葉の「遇」と「然」と「必」を複数の漢和辞典で調べる気に「何げなく」なったことを述べ、その調べものの結果を報告しています。個人的には、大きな発見でした。「偶然性」と「熱」と「動き」とが、自分の中で「つながった」のです。ただし、ノイズについては、依然として不明です。その発見に促されて、「書く・書ける・賭ける」のつながりについても、自分なりに「とりあえず」意見＝感想を述べることができました。キーワードは、「オリジナリティ」「クリエイティビティ」「パッチワーク」「であう・であい」「間・ま・あいだ・あわい」「しるし・しるす」「わかる・わかる」「表象作用」「代理＝代行」「言葉・言語」「理・必然性・法・業・因果・意味・条理・有意味・有・在」です。

＊「こんなことを書きました(その8)」2009-05-23：2009-05-13 から 2009-05-22 に書いた記事のダイジェスト版です。

＊「と、いうわけです(1)」2009-05-24：この日の前編。トンデモ本と呼ばれている書物を紹介した本を立ち読みして、感動したことをきっかけに、若き日に頻繁に覚えた「わくわくぞくぞく感」を回想しています。「トンデモ」本の「ト＝と」に促されてか、ジル・ドゥルーズにおける「と」の話に移ります。接続詞の「と」を扱うことは、「間(＝ま・あいだ・あわい)」＝「際(＝さい・きわ)」＝「関係・関係性」を対象にした思考・考察に関わる＝係わる行為である、と指摘しています。キーワードは、「トンデモブログ」「皮膚感覚」「衝動」「欲求」「発情」「ピエール＝フェリックス・ガタリ」「ミシェル・フーコー」「ジャック・デリダ」「マイナー」「ネガティブ」「変」「ゲイ・サイエンス」「フランス語の表記と発音」「and」「et」「つなぐ・つながり」です。直接書かなかったキーワードは、『ブルーストとシーニュ』『差異と反復』『千のプラトーン——資本主義と分裂症』『蓮實重彦』『批評あるいは仮死の祭典』『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』『マゾッホとサド』『豊崎光一』『リゾーム』です。

＊「と、いうわけです (2)」2009-05-24：この日の後編。「トンデモ本」と接続詞「と」について、考えているうちに、「かく・かける (1) ～ (8)」とその補遺にあたる記事で保留扱いにしておいた「ノイズ」が、思いがけない形でテーマに割り込んできました。そこで、「と」という「接続詞」ではなく、「と」という「言葉＝文字・文字の形・音声」に、闖入したテーマである「ノイズ」を演じさせるという、このブログ恒例の儀式を実行しています。言葉に「ノイズ」を演じさせるために、文章が読みにくくなっています。これは、実際に文章を読んでいただく以外に、体感するのは無理かと思います。結論として、ノイズを「不幸で不遇な符号」と名づけようとしています。キーワードは、「とちくるう」「偶然性」「必然性」「2項対立」「現代物理学」「と学会」「罫線」「ハングル」「ほぼ日刊イトイ新聞」「老人と子供のポルカ」「左ト全」「ひまわりキティーズ」「ノーベル物理学賞」「対称性の破れ」「自発性対称性の破れ」「クオーク世代の予言」「小林誠」「益川敏英」「南部陽一郎」「言霊」です。直接書かなかったキーワードは、「糸井重里」です。

＊「あらわれる・あらわす (1)」2009-05-25：「あらわれる」という言葉に「あらわれる」を演じさせています。その言葉による「演技＝仕草＝運動＝めくばせ」が、「あらわれる」というテーマを体感する形で、読者が受けとめてくれることを願っています。ふざけているように思われそうですが、書いている本人は、いたって本気なのです。シリーズの第1回目なので、このブログでよく用いる「表象」「記号」「信号」について、具体的に説明しています。また、発達心理学の用語に対する疑問を表明しています。「見える」と「あらわれる」の違いを、読者に問いかけています。キーワードは、「人面○○」「であう」「idol」「相貌的知覚」「発達心理学」「未分化」「原始的」「body」「体」「天体」「スタンド・バイ・ミー」「スティーヴン・キング」「The Body」「錬金術」「宇宙」「ミクロコスモス」「マクロコスモス」「たとえ・たとえる」です。

＊「あらわれる・あらわす (2)」2009-05-26：「あらわれる」について考えるにあたり、ヒトの誕生と、生後間もない赤ちゃんに焦点を当てようと決意しています。育児と子育ての経験がないので、大変な作業になるだろうと予感しています。調べ物をしているさいに、発達心理学関連のサイトを覗き、やはり、この分野の用語は変だ、と意見を述べています。うんちに対する赤ちゃんの親近感と愛着に注目し、「であう⇒見る＝知覚する⇒出た≡あらわれた」というプロセスを想定しています。「(発達) 段階」という考え方に、かみ付いています。キーワードは、「目線」「未分化」「未成熟」「未発達」「未熟」「発達途上」「原始的」「言葉の綾」「発達段階」「階段」「連続的变化」「自／他」「自我」です。直接書かなかったキーワードは、「ジャン・ピアジェ」「レフ・ヴィゴツキー」「フロイト」です。

＊「あらわれる・あらわす (3)」2009-05-27：「あらわれる」「でる」とその兄弟姉妹の言

葉たちのイメージを、複数の国語辞典、漢和辞典、用語用字集、表記の手引きを参照して、整理し、まとめています。赤ちゃんを対象とした「いないいないばあ」という遊びに「フィクション」の芽ばえを見えています。赤ちゃんを論じる場合に、「意識」や「認識」という言葉を使っているのか、迷っています。苦しまぎれに「体感」「知覚」という言葉で、お茶を濁しています。赤ちゃんやコドモについて考えたり、述べる場合に、自分を含めたオトナが上からの目線で眺めがちである点を反省しています。キーワードは、「偶然性」「必然性」「整合性」「本当」「装う」「fort / da」「・・・ごっこ」「戯れ」「中上健次」「蓮實重彦」「事件の現場」「広義の言葉」「表象（作用）」「発達心理学」「現実／仮想現実」「ゲイ・サイエンス」「フロイト」「肛門」「うんち」です。

＊「あらわれる・あらわす（4）」2009-05-28：広辞苑に、「うんこ」という言葉の語源が記載されていたことに驚いています。それに触発されて、「あらわれる」と「でる」のイメージの違いを、詳細に分析しています。そこから、『出る』の中心的イメージは、「うんちである」という結論に至っています。なぜ、うんちを特権化するのかについて、熱弁を振るっています。結果的に、うんち擁護論となっています。めちゃくちゃなこじつけで、うんちを擁護しています。個人的には、愛着のある記事です。キーワードは、「息む」「コア・イメージ」「自他未分化」「自他分離」「自我」「他者」「コドモ／オトナ」「浮遊感」「ぶかぶか」「不安定」「フロイト」「口唇期」「肛門期」「クレヨンしんちゃん」「お尻」です。

＊「あらわれる・あらわす（5）」2009-05-29：このシリーズを書き始めて以来、赤ちゃんウォッチングが身についたことに触れ、赤ちゃん、その付き添いの人とが「似ている」か、どうかに注目するようになった、と報告しています。「あらわれる・あらわす・あらわ・でる・だす」を「漢字＋ひらがな」に表記した場合のバリエーションを、比較しています。また、そのさいに用いられる漢字の使用例と、「解字」と、イメージを調べた結果を、報告しています。また、毎日、どのようにして、ブログを書いているかも、話題にしています。このブログで一貫して行っている、「記事のテーマを、記事で使用する言葉に演じさせる」という「言葉の遊び」について、読者に理解してほしいために、その説明に悪戦苦闘しています。アホの坂田さんに登場してもらい、手伝ってもらっています。キーワードは、『記者ハンドブック新聞用字用語集』『朝日新聞の用語の手引き』『読みやすい／読みにくい』です。

＊「あらわれる・あらわす（6）」2009-05-30：坂田利夫さん、高倉健さん、忌野清志郎さんを例に取り、他人やファンがいだいている自分についてのイメージに、有名人が、どのように対処しているかを論じています。そのメカニズムを説明することで、このブログで一貫して行っている「テーマを言葉に演じさせる」という方法＝戦略を説明しようと努めています。ややこしい話なので、軟らかめの例を用いて論じようと工夫していま

すが、話が読者に通じたかは自信がありません。こうした方法＝戦略を用いる理由についても、触れています。そのなかで、自分を啓発＝触発した、4人の人による8冊の書物のタイトルを紹介しています。ブログ記事で使用方法＝戦略が、自分の一方的な誤解と思い込みの産物である可能性が高いと、断っています。キーワードは、「トリトメのない記号＝まぼろし」「差別化」「特化」「アイドル」「自分自身を演じる」「表象」「蓮實重彦』『批評あるいは仮死の祭典』『フーコー・ドゥルーズ・デリダ』『渡部直己』『泉鏡花論－幻影の杼機』『谷崎潤一郎－擬態の誘惑』『豊崎光一』『余白とその余白または幹のない接木』『砂の顔』『宮川淳』『引用の織物』『紙片と眼差のあいだに』です。

＊「あらわれる・あらわす(7)」2009-05-31：イメージに備わっている「テキトーさ」を、読者に体感してもらおうと努めています。前日から書き溜めていた、この日の記事用の走り書きメモの量が、いつもの数倍になり、しかも内容的にまとまらず、收拾がつかない状態であると告白しています。そこで、「断片集」＝「つぶやき集」の形式で、テーマごとにメモを継ぎはぎし加筆するという方法を取っています。サブテーマのタイトルは「イメージ」、「意識」、「脳と意識」、「意識と整合性」、「イメージの力および効用」、「謎＝疑問」、「まとめ」です。よく読んでいただくと分かりますが、ヒトという種(しゅ)への批判となっています。このままで、いいのだろうか？ という危機感をいんでいます。キーワードは、絞りきれません。

＊「あらわれる・あらわす(8)」2009-06-01：「いかがわしくテキトーであるイメージ」というテーマを、記事で使用する言葉に演じさせようとしています。そのため、文章が「とちくろう」という結果になっています。前日の、ややこしかった「断片集」を図式化して、読者の理解に役立つようにと工夫をしています。イメージのいかがわしさとテキトーさの原因を、「イメージはヒトが『勝手にいただくもの』」という点に見ています。imageという言葉の兄弟姉妹を使って、めちゃくちゃなこじつけとオヤジギャグの連発を、箇条書きにしています。あとで読み返すと、恥ずかしいです。そうとう、あやういです。イメージの奥深さに触れ、イメージを思考の対象とするさいには、「似ている」と「フィクション」が重要な鍵になると訴えています。「似ている」の説明に、かなり字数を費やしています。この記事を書き終えた時点で、そろそろ次のシリーズに移るべきだと感じています。記事の最後で、「人気ブログランキング」における、このブログの「週間IN」と「週間OUT」が、「とちくろったように」アンバランスな点が気になっている、と告白しています。その仕組みが分かっていないので、動揺しています。仕組みを理解したいので、読者に助けを求めています。キーワードは、「真似たもの・似せたもの・にせもの」「imagine」「imagination」「imitate」「imitation」「imago」「イマーゴ」「appear」「show」「show up」「represent」「representation」「presentation」「present」「ルプレゼンタシオン」「プレゼンス」「イマージュ」「再演＝複製＝コピー」「そっくり」「同一(である)」「トリトメのない記号＝まぼろし」「フィクション／ノンフィクション」「演出」「YouTube」です。直接書かなかったキーワードは、「青土社」です。

『うつせみのあなたに 第6巻』の内容

09.06.02～09.06.25

＊「こんなことを書きました（その９）」2009-06-02：2009-05-23 から 2009-06-01 に書いた記事のダイジェスト版です。

＊「つくる（１）」2009-06-03：「冷蔵庫はお母さんに似ている」という私的な「イメージ」＝印象を持ち出すことにより、「イメージ」というものが、ヒトが個人的レベルで「勝手に」「いただく」という行為の対象となるために、きわめて不安定でいかがわしくテキトーなものになりがちであると指摘しています。その認識から出発し、「ヒトがつくるものは、ヒトに似ている」という、このシリーズの「テーマ」＝「イメージ」へと話を移しています。「イメージ」の根底にある「似ている」と似ている「同じ＝同一である」という言葉＝現象についても、考察しています。また、「つくる」という言葉が、「嘘をつく・偽る・でっちあげる」という意味でもつかわれるという点を重視しています。シリーズの初回なので、このブログの「癖＝変なところ＝偏愛＝こだわり」を、読者に分かってもらおうと努めています。キーワードは、「道具」「衣食住」「身体」「ラスコー」「アルタミラ」「石器」「土器」「真似る」「知覚する」「意識する」「認識する」「ゲイ・サイエンス」「フェティシスト」「表象」「記号」「信号」です。

＊「つくる（２）」2009-06-04：数年前に撮った自分の写真を例に挙げ、「似ている」とはどういうことなのかに、徹底的にこだわって論じています。便宜上、「時間的なズレ」「他者とのズレ」「場面のズレ」という分類をして、その３つのケースを考察しながら、ズレ＝イメージを言葉で論じることが、テキトーな結果しか生まないという「テーマ」を、言葉に演じさせて記事を終えています。このシリーズが、きな臭い話を扱わざるを得ないことを、予感してもいます。キーワードは、「運転免許証」「恥ずかしさ」「流行の変化」「タレント」「芸能人」「トリトメのない記号」「自己差別化」「若さ／老い」「ほんもの／にせもの」「状況・コンテキスト」「近親憎悪」「ライバル意識」「ファシズム・全体主義」「仮想敵国」です。

＊「つくる（３）」2009-06-05：ヒトが生きていくうえで、絶対に避けることができないも

のとして、医療・法律・天変地異を挙げ、そのうちで、法律に焦点を絞って、話を進めています。法律がいかに形骸化しつつあるかを、過去の記事を引用しながら、訴えています。法律および掟の形骸化が、権力を後ろ盾にした官僚支配社会を実現させている現実と、その現実の恐ろしさに、読者の注意を向けようと努めています。最後に、このシリーズでもっとも重要な、「物語＝フィクション」という言葉を登場させています。キーワードは、「世捨て人」「戸籍」「在日外国人」「外国人登録」「不法滞在・不法滞在者」「孤独死・孤立死」「野垂れ死に・行き倒れ」「書類作成」「嘘」「罪」「罪悪感」「窃盗」「タブー」「司法」「ハンコ」「権限委譲」「玩具」「キャラクター」「アニメ」「絵本」「ゲーム」です。

＊「つくる（4）」2009-06-06：「共有化されたイメージ」の代表として、ヒトに似せてつくってある玩具やキャラクターを取り上げています。コドモが、玩具を手にて取り動かすという動作に、「……ごっこ」、つまり、物語＝フィクションづくりの萌芽を見えています。フィクションが表象の働きを前提にしていることを確認したうえで、それが「学習する以前に体得されている」のではないか、という問題を提起しています。旧約聖書の創世記にあるように、「つくる」が、「似せる＝真似る＝学習する」と同時発生的に起きるだけではなく、「学習する以前に体得している」部分があるとする考え方に、うさんくささと魅力という、「両義的な感情＝迷い」を覚えている様子がうかがわれます。「つくる」前には「ルール・手本」を学ぶという考え方を支持しつつ、ヒトには「ルール・手本」の「骨組み・回路と素子」が生得されているという考え方にも、理解を示しています。この2つの考え方が検証不能であることを残念に思いながら、シリーズを打ち止めにしています。キーワードは、「自動車ウォッチング」「人面」「性差」「人形」「創作」「模倣」「模作」「検察官面前調書」「バレーボール」「ゲーム」「俳句」「小説」「話し言葉の習得」「チョムスキー」「言語能力＝linguistic competence」「言語運用＝linguistic performance」「読み聞かせ」です。

＊「テリトリー（1）」2009-06-07：本名、ペンネーム、ハンドルネームを含む名前、および、固有名詞について考察しています。さらに、ブランド＝商標、商品名、作品名にまで話を広げ、「名前を付ける＝名付ける」という行為と、「しる・知る・領る」行為、つまり、マーキング行動＝縄張り行動との関係を論じています。ここで「テリトリー」という、このシリーズのタイトルを登場させ、本能が壊れた種（しゅ）としてのヒトの縄張り行動と、他の生き物の本能的な縄張り行動とを比較しています。前者が逸脱して過剰な行動となり、地球規模でとてつもないルール違反をしていると批判しています。シリーズの初回なので、このブログ特有の方法＝戦略についても、自己注解をしています。キーワードは、「村上春樹」「村上龍」「ヴィム・ヴェンダース」「Paris, Texas」「パリ、テキサス」「What's in a name?」「シェークスピア」「ロミオとジュリエット」「レヴィ＝ストロース」「リーバイ・ストラウス」「リーバイス」「mark」「地球温暖化」「大不況」「人口増加」「文明の衝突」「貧富の格差」「資本主義経済・市場経済」「ミツバチ」「doomsayer」「オジンバ心」「ネーミング」です。キーフレーズは、「ヒトは、狂わないために必死に

狂っている」です。直接書かなかったキーワードは、「噂の真相」「三田誠広」です。

＊「テリトリー (2)」2009-06-08：この日の記事の前編。「知る・知っている」「名付ける」と、マーキング行動＝縄張り行動との関係を論じています。その関係を、アレゴリー調の「な、いいだろう？」というタイトルのおとぎ話によって、「ほのめかす」試みをしています。キーワードは、「村上春樹」「know」「ape」「monkey」「言葉」「わたしのもの」です。

＊「テリトリー (3)」2009-06-08：この日の記事の後編。前編のおとぎ話に関連して、人名を例に取り、このブログでよくつかう「表象」「記号」「信号」「イメージ」というツールを紹介しています。ツールのなかで「イメージ」が、固有名詞と親和性があることを指摘しています。テリトリーというテーマを扱う以上、このシリーズがきな臭く、また、生臭くなるだろうとの予感を述べています。以前、きな臭いテーマを論じた直後に、深刻な抑うつ症状に見舞われた体験についても語っています。「名付けの応用編」＝「強烈なイメージを喚起するもの」としての「プレゼンテーション」に触れ、プレゼンの指南書そのものがプレゼンとなる仕組みを指摘し、耳に快い言葉や、元気の出る言葉に、注意を向ける必要があると訴えています。このように、一貫してイメージ批判を展開しています。キーワードは、「共有化されたイメージ」「名前の持つパワー」「思考停止」です。

＊「テリトリー (4)」2009-06-09：第2次世界大戦後の約10年間にヒットした洋画の邦題を例に取り、「名前に祈り・願いを込める」というヒトの行動を考察しています。次に、名前の延長上にある流行語・標語・キャッチフレーズ・歌詞など、「共有化されたイメージ」を喚起するコンパクトな言葉が、縄張り行動の拡大を意図する国家や組織によって利用されるという、いわゆるイメージ操作＝情報操作について論じ、警戒しようと読者に呼びかけています。前日の「な、いいだろう？」の続編である「テラ取り物語」というおとぎ話を掲載しています。長めの物語になったために、PCのモニターでは読みづらいものとなったと反省しています。「テラ取り物語」の内容は、シリアスで風刺的なものですが、いつか日をあらためて、再読していただければ幸いです。けっこう、マジで書きました。おとぎ話のあとには、「言葉によってヒトを動かす」ことの恐ろしい面について触れています。キーワードは、「縁起をかつぐ」「濁点」「内容ではなく、イメージだ!」「テラ」「掟」「支配者」「シャーマン」「占い師」「予言・予言者)」「預言・預言者」「演説」「マニフェスト」「公約」「キャンペーン」「マーケティング」「プロパガンダ」「教義」「教え」「法律」「判決」です。

＊「テリトリー (5)」2009-06-10：まず、幼い頃に自分が自分を一人称で呼べなかったこと、また、おそらくその名残として、このブログではあからさまな一人称の使用を意識

的に避けていることに触れています。そこから、言葉に対する個人レベルでのこだわりへと話を移し、ネットを利用したメール、ブログ、掲示板などを通し、「書くこと」を実践している人口が、以前に比べ近年飛躍的に増えたのではないかとの感想を述べています。また、ネット上での文章表現がかなり自由である点に、共感を示しています。ケータイやネットという、比較的新しい、発展途上にある媒体に対する、国家、および、社会による規制には反対だと述べています。数ある「〇〇恐怖症」のなかで、xenophobia（外国人に対する恐怖・憎しみ・嫌悪）と homophobia（同性愛者に対する恐怖・憎しみ・嫌悪）の2つを取り上げ、その特徴的な面を指摘しています。その考察をもとに、ヒトラーの心理を単純に図式化し、それを少しずつ変形させながら、ヒトの他の行動にある背後の心理をさぐっています。きな臭い話です。キーワードは、「検閲」「戒厳令」「夜間外出禁止令」「田中小実昌」「翻訳」「小鷹信光」「TIME誌」「ユダヤ人」「変人」「以心伝心」「出るくいは打たれる」「長い物には巻かれろ」「近親憎悪」「仮想敵国」「世襲制王朝」です。

＊「テリトリー (6)」2009-06-11：心理学、精神医学、精神分析がたがいに重なり合う部分をもった学問＝研究領域＝テリトリーであることを指摘しています。ヒトが自分の得意とする分野＝テリトリーを侵された時に示す、敵対的な行動が、学問だけでなく、官僚、政治家、職業集団、宗教組織などでも広くみとめられることを指摘しています。「しる・知る・知識」＝「知(ち)」と、「土地・地面・大地」＝「地」(ち)とをめぐって、これまで長きにわたってヒトが血(ち)を流してきたことを指摘しています。テリトリーの構造を分析し、周辺部で、名付け争い＝言葉の争いが起こるという、ヒトのテリトリー特有の現象について、意見を述べています。スポーツや政治の場で、「名前同士が愛を交わす」という現象について、例を挙げて論じています。論調は次第に悲観的でネガティブになっていき、最後のほうは、へこんでしまい、ほとんど泣きそうになって書いています。大の苦手な、きな臭い話になり落ち込む＝自業自得という、予想通りの展開になりましたが、書くべきことを書いたという意味では悔いはありません。キーワードは、「文学部心理学科」「医学部」「実験心理学」「臨床心理学」「カウンセリング」「統計」「数値化」「理系／文系」「岸田秀」「フロイト」「ユング」「改名」「姓名判断」「印鑑」「変身願望」「自己啓発・自己改善」「社名」「ブランド」「製品名・商品名」「ロゴ」「スポーツ」「スポーツ選手」「政党」「有名人」「選挙」「イメージ」「コロシウム・闘技場」「ち」です。

＊「テリトリー (7)」2009-06-12：澁澤龍彦、種村季弘、由良君美の3人が活躍していた頃の回想から始まり、extraterritorial（＝学問の領域を超えて）、extra-terrestrial（＝地球の外の）、deconstruction（＝脱構築）という3つの言葉について、思うところを述べています。きな臭く生臭い話に終始した前日の余波を受けてか、抑うつ症状が悪化していたので、早く記事を終えています。シリーズも終わりました。このシリーズを終えたことで、言葉について、自分が書くべきことはすべて書いてしまったという思いが強く出ています。キーワードは、『脱領域の知性』『ジョージ・スタイナー』『スティープン・

スピルバーグ」「E.T. the Extra-Terrestrial」「E.T.」「ハイデガー」「ジャック・デリダ」「déconstruction」「地（ち）」「知（ち）」「血（ち）」です。直接書かなかったキーワードは、「高山宏」です。

＊「こんなことを書きました（その10）」2009-06-13：2009-06-02 から 2009-06-12 に書いた記事のダイジェスト版です。

＊「なわ＝わな」2009-06-18：「テリトリー（1）～（7）」で扱ったテーマの1つである、「名付ける」行為について、まだこだわっています。小学生の時に、校長先生が話してくれた、「禍福はあざなえる縄のごとし」という、ことわざをふと思い出したことをきっかけに、先の展開を考えずに、記事を書き出しています。いつもは用意した走り書きメモを見ながら、記事を書くのですが、それも役に立ちそうもないので、お先真っ暗な状態で見切り発車しています。「な」と「わ」の多重的＝多層的な意味（＝辞書に記載されている語義）と、それを読んで喚起されるイメージと戯れることで、ひたすら偶然性に身をまかせ、アドリブ＝即興で記事を書いています。結果的に、偶然性＝アドリブだけで記事を書くという実験になりました。読み返してみると、この記事で、「なわ＝縄」、プラスチック製のロープ、「わな＝罟＝輪状の縄」が出てきたのは、上述の事情があったからだと思われます。いつも変な記事を書いているのですが、この記事を読むと、とりわけ変な印象をいただきます。キーワードは、「縄をなう」「縄をよる」「言葉の物質性」「言葉の抽象性」「一人称」「二人称」「符合」「符号」「付合（つけあい）」「鳴く」「泣く」です。直接書かなかったキーワードは、マラルメ、ジャック・デリダです。

＊「台風と卵巣」2009-06-19：「普遍性」がテーマです。概念に走らないで、あくまでも言葉の身ぶりや運動に身をゆだねるスタンスをとろうと、自分に言い聞かせています。とはいえ、それしか、できないだけなのです。それすらできないと「何もなくなってしまう」のを恐れているさまが、よく表れています。今回のテーマは、抽象度が高いため、具体的なイメージとして、言葉を引き寄せるのに相当苦勞しています。右往左往しています。ようやく「つかえる」という、つかえる言葉にめぐりあってほっとしたところ、「普遍性」が結局「言葉」に収斂（しゅうれん）＝収束＝集束していくさまに行き当たり、呆気にとられています。あらためて読むと、いかにもアホがやりそうなことをしています。恥ずかしいです。キーワードは、「柳父章」「山岡洋一」「universality」「universe」「generality」「general」「genus」「generate」「ゲイ・サイエンス」「台風」「曼荼羅」「マクロコスモス／ミクロコスモス」「卵巣」「卵細胞・生殖細胞」「可能性」「表象」「比喩」「イメージ」「表象の入れ子構造」「でまかせ」「偶然性」「宙ぶらりん」「現代詩」「オーサー・ビジット」「コピーライター」「一般性」「汎用性」「万能」「国際標準」「共通性」「有効性」です。直接書かなかったキーワードは、「谷川俊太郎」です。

＊「出る」2009-06-20：言葉＝言語というトリトメのないものを、「普遍性」という切り口をツールにして思考する方法を模索しています。言葉＝言語という日本語が、多義的なために3つのレベルに分類するという工夫をしています。その事務的な作業をしながら、ソーシャルという固有名詞を思い出し、アカデミックなギョーカイの「正しい」「正しくない」ごっこに巻き込まれたくないため、「ソーシャルとは関係ない」と予防線を張っています。これは、明らかに自意識過剰な被害妄想です。言葉＝言語の3つのレベルを、読者に分かりやすいように、具体的に説明しようと努めています。学生時代にフランス語の授業で暗唱させられたフレーズ（※後述します）を、思い出して説明の素材としてつかっています。最後に、肝心な個所にさしかかったものの、時間がなくなり、残念がっています。キーワードは、「真理」「法則」「掟」「word(s)」「language」「言語という仕組み＝体系」「アイロニー＝反語」「英国人」「ステレオタイプ」「一般化」「アントワーヌ・リヴァロール」「明晰でないものはフランス語ででない」「フランス語の普遍性についての論考」「中華思想」「中国」「台風」「宇宙」「台風の目」「隠喩的な構造をもつダジャレ＝オヤジギャグ」「宙ぶらりん」「マラルメ」「分かる＝分ける」「錯覚」「出る」「ぐちゃぐちゃ」「ごちゃごちゃ」です。直接書かなかったキーフレーズとキーワードは、「Ce qui n'est pas clair n'est pas français; Ce qui n'est pas clair est encore anglais, italien, grec ou latin.」「Discours sur l'Universalité de la Langue Française (1784)」「構造的隠喩」「渡部直己」「ジャン・リカルドゥー」です。

＊「うんちと言葉」2009-06-21：依然として「普遍性」がテーマです。ちなみに、これまでのように「普遍性（1）」「普遍性（2）」……というタイトルの付け方もあたまにありましたが、マンネリを避けるために自粛しました。当初は、真理・法則・掟という言葉に素材に「普遍性」を論じるつもりだったのが、言葉＝言語自体が素材になってしまったため、再度、あたまの整理をしています。また、この日になって、ようやく、2009-06-14から2009-06-17に記事が書けなかったことの弁解＝言い訳をする心の余裕がもてたようです。前日、最後で保留してしまったややこしいテーマについて、まず、自分の文章の「音読不可能性」を例にとり、読者に説明しようと努めています。自分がブログの記事を書くさいに、自分が慣れ親しんできた固有名詞を挙げることが一種の個人崇拜になることに、神経質なくらい気をつけています。「テリトリー」シリーズを書いた後遺症だと思われます。言葉にしにくい、ややこしいテーマを、必死で言葉で説明しようとしています。言葉で、読者の生理的な部分に訴えるという戦略をとっています。具体的には、以前にも試みたことのある、読者に動作や動きを促すように呼びかけるという方法です。さらに、「うんち」を「出す」という日常的な生理現象と、「うんち」が「出る」、そして、その「うんち」が「運動」に回帰する、という日常的に目にする現象を例に取ることで、ややこしいテーマを体感してもらおうと、読者に働きかけています。誤解を招きやすい方法＝戦略だと反省しています。キーワードは、「アドリブ＝即興」「でたらめ」「被虐的史観」「ぐちゃぐちゃ」「ごちゃごちゃ」「ジャック・デリダ」「読みにくい」「ジル・ドゥルーズ」「何か」「口」「肛門」「universality」「universe」「generality」「general」「genus」

「generate」「隠喩的な構造をもつダジャレ＝オヤジギャグ」です。直接書かなかったキーワードは、「構造的隠喩」「渡部直己」「ジャン・リカルドゥー」です。

＊「地と知と血（1）」2009-06-22：この日の記事の前編。「普遍性」「普遍的」という言葉の使用法をネット検索することで、その実相を観察するという方法を実践してみた結果を報告しています。「普遍性」「普遍的」が自然科学や数学の「内側」ではあまりつかわれていなくて、「外側」で「読み物」や「説明として」頻出している語であることを指摘し、いわゆる「いかがわしさ」のニュアンスをとまなう点に読者の注意を向けようとしています。また、実験心理学を例に取り、数値化や統計を用いることで、科学性という属性をまとおうとしている傾向に対し、批判的な意見を述べています。統計用語の意味を検討し、その胡散臭さを指摘しています。批判的な目は、数字と、数字を用いるヒトの思わく＝意図にも向かっています。最後に、村上陽一郎氏と、同氏の専門分野である科学史と科学哲学に触れています。キーワードは、「記述文法」「規範文法」「コーパス言語学」「言語能力（competence）」「コーパスへのアクセスとしてのネット検索」「数学・自然科学」「大衆科学」「科学ジャーナリズム」「疑似科学」「トンデモブログ」「トンデモ本」「一般性」「一般的」「ノーベル経済学賞」「有意性」「有意差」「有意水準」「学術論文の翻訳」「必然・必然性」「偶然・偶然性」「確率」「ギャンブル」「complex」「inferiority complex」「全米ライフル協会」「比喩・レトリック」です。直接書かなかったキーワードは、「チョムスキー」です。

＊「地と知と血（2）」2009-06-22：この日の記事の後編。2人の主要人物が劣等感および信仰という心のわだかまりと、自然科学とのあいだで、揺れる様子を描いたアレゴリー的作り話を、読者に提供しています。その話を通して、心理的なわだかまりが、ヒトの精神活動に大きく影響をおよぼす点を、読者に訴えようとしています。土地を名付けるというヒト特有の縄張り行動が、知識を蓄える活動、つまり、文化・文明という形で進展していく過程で、多くの争いが起こりたくさんの血が流れるという現実を「地・知・血」という同音異義の漢字でイメージ化しています。普遍性・世界標準・グローバル化という言葉が、さらに多くの血を流すことと同義である点に、読者の注意を向けようと努めています。そうした過程を打開する方法のとして、あえて「分けない」、「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」でいい、「わけ分かんない」でかまわない、という選択肢もあるのではないかと訴えるというより、反語的に負け犬の遠吠え状態で、小声で叫んでいます。キーワードは、「攻撃的行動」「科学史」「科学哲学」「出版・出版社」「論理」「熱い」「テリトリー」「ホモ・サピエンス」「無知」「無恥」「鞭」「サイエンス」「知る」「選別」「排除」です。

＊「「あつい」と「わからない」」2009-06-23：テーマは、依然として「普遍性・普遍的」です。「訳が分からない」を「分けが分からない」と記述する「わけ」を語っています。

「通じない」「分からない」「通じ合えない」「分かり合えない」を解消するのではなく、その状態をあえて「みとめる」「ゆるす」方法＝選択肢があるのではないかと、読者に問いかけています。メタな立場に立ちたい、つまり、他者や世界を俯瞰（ふかん）する行為を通じて、自己を正当化したいというヒトの欲望は切りがなく、決して満足させることはできないことを指摘しています。そこで、「わかる＝わかる」ではなく、「さとり＝さようにうけとる＝あるがままにうけとる」という態度＝生き方を提案しています。とかくきな臭い「熱い」をこれ以上エスカレートさせないためには、「わからなくていい」のではないかと問いかけています。キーワードは、「ネット検索」「コーパス」「宗教」「自然科学」「物理学」「自と他」「お釈迦様」「シャーマニズム」「科学史」「科学哲学」「劣等感」「嫌悪感」「恐怖感」「攻撃」「唯〇論」「宗教による科学の弾圧」「ガリレオ」「ぼーっとする」「暑い」です。

＊「ぼーっとする、ゆえに我あり」2009-06-24：デカルトの「我思う、ゆえに我あり」というフレーズをきっかけにして、その意味と、そのバリエーションを列挙しています。話はTIME誌の文体の特徴にいたり、その他の例を挙げ、「一言語」がいかに普遍的であり得ないかを確認しています。そこから、言語という表象の仕組みの普遍性へと話を移しています。デカルトとチョムスキーに共通するといわれる、「言語という表象の仕組みの生得」というテーマに触れ、胡散（うさん）臭そうだけど、魅力的だという両義的な感想を述べています。また、「わかる」よりも、「わからない」＝「ぼーっとする」をあえて選びたいとする立場から、「我思う、ゆえに我あり」ではなく、「ぼーっとする、ゆえに我あり」と言いたいと述べています。英語の歌詞や日本語の歌詞を「聞き間違える」という「正しくない」「ぼけーっとした」スタンスを取り上げ、「ぼーっとする」ことのポジティブな面を、読者に体感してほしいと願っているようすがうかがわれます。キーワードは、『方法序説』『iPhone』『Howards End』『sarcastic』『irony』『ピーター・バラカン』『ロックの英詞を読む』『CBSドキュメント』『引喩＝allusion』『いろいろな英語』『知覚』『意識』『カーペンターズ』『Don't they know it's the end of the world』『タモリ』『ボキャブラ天国』『absent-minded』『アホ』『坂田利夫』です。

＊「時の神＝あわいわあい（1）」2009-06-25：この日の記事の前編。テーマが、「普遍性」から「分からない」「通じない」「伝わらない」に移ってきていることに自覚的になっています。みんなが分かり合える、通じ合える、同じである、という現象がまれであり、むしろ、分かり合えない、通じ合えない、異なっているをポジティブにみとめ合う姿勢が求められるのではないかと、問いかけています。みんなが同じである国や社会の不気味さを指摘し、批判的な意見を述べています。1970年の米国の空気を色濃く反映していた「セサミ・ストリート」という番組について触れ、異なる人たちが共存する共同体の可能性を模索しています。米国のファンダメンタリストたちの不寛容的な言動を非難してもあります。そうした敵対的で暴力的な傾向は、あらゆる宗教にみられると指摘しています。次に、文学、音楽、スポーツにおける普遍性と、世界における複数の文化圏につい

て論じています。言語と親和性のあるジャンルに触れ、権力＝国家の支配体制にとって、言論と情報の統制が最大のカギとなっている点に、読者の注意を向けようと努めています。キーワードは、「ファシズム」「全体主義」「コンサート」「スポーツ観戦」「公民権運動」「マイノリティ」「ヒスパニック」「アーニーとバート」「同性愛」「近親憎悪」「人工妊娠中絶」「進化論教育」「ES細胞＝胚性幹細胞研究」「同性婚」「根本主義者」「原理主義者」「邪教」「異端」「無神論」「水掛け論」「クラシック」「ロック」「ポップス」「西洋音楽」「機会均等」「スペイン語」「ラテンポップス」「中国語」「エマージング市場」「中国政府」「ネット規制」「ケータイ規制」「旧ソ連の崩壊」「情報技術＝IT」「イラン」です。

＊「時の神＝あわいわあい（2）」2009-06-25：この日の記事の後編。言語との親和性が顕著ではないスポーツの普遍性について、論じています。スポーツだけでなく、宗教、芸術、学問、政治が、普遍性をそなえた、表象という仕組み＝メカニズムに基づくために、普遍的な広がり浸透を見せている点と、最強の表象とも言える貨幣によってかんじがらめになっている現状に、読者の注意を促そうとしています。異なる者同士が付き合うためには、結論にいたるのを急ぐのではなく、ぎりぎりの線までぼーっとしている、共通する点としない点の両方を確認し合うことも、選択肢としてあり得るのではないかと述べています。突然、ビョーキとも言える言葉の遊びに走り、普遍性の大和言葉系の言葉として「わ」を取り上げ、だじゃれと、めちゃくちゃなこじつけを展開しています。めちゃくちゃに見えるものの、本人はいたって本気です。最後に、ヒトが逃れることができない「表象という仕組み＝メカニズム」に対処するための方法として、森羅万象は変化のさなかにあるのだから、「時」と「間＝際」を引き延ばし、ずらすことにより、メカニズムおよび表象そのものの変質を待つという考え方を提案しています。この考え方については、今後さらに掘り下げたいと思っています。時間という言葉が気になってなりません。キーワードは、「国家間のガス抜き」「グローバルな経済活動」「共通性」「agree to disagree」「agree to differ」「ケース・バイ・ケース」「間（＝ま・あいだ・あわい・）」「際（＝さい・きわ）」「時間」「運動＝過程」「時の神クロノス」「鎌」です。直接書かなかったキーワードは、「ハイデガー」「存在と時間」「存在論的差異＝Ontologische Differenz」「ジャック・デリダ」「différance」「déconstruction」「大森正蔵」「時間と存在」です。

『うつせみのあなたに 第7巻』の内容

09.06.26～09.08.08

＊「こんなことを書きました（その 11）」2009-06-26：2009-06-13 から 2009-06-25 に書いた記事のダイジェスト版です。

＊「空前の「純文学」ブーム」2009-06-27：複数の「日記」ブログを定期的に読んでいるうちに、かつて「純文学の規範」と呼ばれた、いわゆる「私小説」と「心境小説」を彷彿させるだけでなく、過去の作品群と並べても遜色がないものが散見される状況となっているのに気づいたと述べています。その一方で出版物として、「私小説」が販売されるのがほぼ不可能になっている事態を指摘しています。最後に、ブログで日記を書いている人たちにエールを送っています。キーワードは、「身辺雑記」「写生」「物語性」「ケータイ小説」「ネット小説」「出版界」「柳美里」「モデル小説」「プライバシーの侵害」「最高裁判決」「出版差し止め」「車谷長吉」「提訴」「名誉毀損」「人権」「匿名」「ハンドルネーム」「フィクション」「ノンフィクション」「プロ／アマ」「モノブログ」「コラブログ」「作為」「演技」です。

＊「「時間」と「とき」」2009-06-28：「時の神＝あわいわあい（2）」2009-06-25 の最後の部分がきっかけとなり、この日の記事から、物理的「時間」とヒトが意識する「とき」をテーマに論じています。ヒトが、もろに「時間」「とき」を意識する「待つ」という行為を分析しています。物理的「時間」とヒトが意識する「とき」とのあいだに、ヒトが感じる「ずれ」について、こだわっています。時間を扱うさいには、物理学を無視できないことは承知しつつも、自分には、その学問の素養も適性もないことを自覚し、あくまでも自己流で時間について考え、書いていくとの決心を述べています。時刻が「聞くもの」から「見るもの」へと変わっていた、という歴史的経緯についても触れています。また、ヒトにとっての最大の関心事である食べ物が「腐敗していく」のを見つめるという行為に、時間の知覚を重ねています。キーワードは、「学問」「フィクション」「錯覚」「アナログ時計」「デジタル時計」「clock」「watch」「鐘」「montre」「horloge」「Uhr」「hour」「変化」「移り変わる」「流れ」「動き」「夢野久作』『ドグラ・マグラ』『としをとる』です。直接書かなかったキーワードは、「ハイデガー」「ジャック・デリダ」「大森正蔵」です。

＊「揺らぎ」と「変質」2009-06-29：「時間」「とき」について書くようになったきっかけを述べています。誰もが、日常的に体感できるレベルでの、具体的な「時間」の知覚と意識を対象に、思考しようと努めています。どうあがいても、そうした努力が抽象的にならざるを得ない限界を指摘しています。例として、自然言語と人工言語という2項対立を取り上げています。「前」と「後」という言葉に触れて、ヒトが時間的イメージを空間的イメージに「たとえる」習性があることを指摘し、ヒトは時間的経過の処理に比べ、空間的広がり処理のほうが得意なのではないかと推測しています。それは、ヒトが一度に一枚の「テレビ画面」しか意識できない＝集中できないからではないか、と論を進めています。キーワードとキーフレーズは、「表象の仕組み」「間（＝ま・あいだ・あわい）」「森羅万象は変化しつつある」「主観・主観的／客観・客観的」「イメージ」「偶然性」「手話」「歴史」「年表」「スケジュール」「手帳」「カレンダー」「表象」「言語」「貨幣」「時間の経過とともに揺らぎ変質する」です。

＊「不自由さ（1）」2009-06-30：この日の記事の前編。時間の経過を再現することの、不可能性＝不自由さがテーマです。「不自由さ」を「障害」と比較しながら、両者が「相対的」なものであり、「程度」の問題であると述べています。「とき」の再現の不可能性を、警察での「取り調べ」を例にとって考察しています。キーワードは、「知覚」「意識」「想起」「表現」「聴覚障害」「障害・障害者／健常・健常者」「聴力」「内部障害・内臓障害」「司法」「検察・検察官」「ビデオ撮影」「自白の強要」「冤罪」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」です。

＊「不自由さ（2）」2009-06-30：この日の記事の後編。デカルトの「我思う、ゆえに我あり」は「ぼーっとする、ゆえに我あり」と同義ではないかと述べています。「考える・思う・思考する」という行為が、ヒトがふだん意識しているよりも、情報処理能力としてはレベルが低いのではないかという疑問を提起しています。特に、ヒトが時間の経過の処理を、空間のひろがりの処理で代用している事実、に、こだわっています。欠陥ではないかと述べています。回転という動作を例にとって、読者に、この疑問を共有してもらおうと努めています。キーワードとキーフレーズは、「けん玉」「物理的現象の記述＝フィクション＝物語」「ヒト以外の生き物に学ぶ」です。

＊「ぐるぐるゆらゆら（1）」2009-07-01：この日の記事の前編。ヒトが「時間」「とき」を、円・円環・回転・ぐるぐる・輪として、知覚・意識・イメージ・表現すること、がテーマです。こうした現象が語られ、情報として伝達されるとき、それがフィクション＝物語にならざるを得ない点を確認しています。例として、天動説と地動説を挙げています。フィクションである限り検証は不可能である点にも、こだわっています。フィクションに対抗するものとして、「体感」を挙げ、時には、それが有効な手段となり得ることを

指摘しています。テレビと映画が目の錯覚を利用したものである点にも触れています。キーワードは、「静止映像」「連続映像」「夢の視点・主語・作者・登場人物」「夢の想起」「正しい」「正しくない」「説得力」「プレゼン」「澁澤龍彦」「マルキ・ド・サド」「『悪徳の栄え』」「太陽の動き」「幻灯・幻燈」「コマ」です。

＊「ぐるぐるゆらゆら（2）」2009-07-01：この日の記事の後編。依然として、ヒトが時間の経過の処理を、空間のひろがりの処理で代用している事実にとだわっています。時間的前後を空間的前後として錯覚・混同・混乱するのではないかと懸念を示しています。揺らぐ・宙ぶらりん・まわるが、ヒトにとって基本的な動作・運動であるだけでなく、行動の指針・支え・無意識のメカニズムとなっているのではないかと述べています。それに、表象の仕組みがかかわっているのではないかとさらに妄想がエスカレートしていきます。言語・貨幣という、ヒトにとって特権的な意味を持つ表象を持ち出し、それが「まわる」「暴走する」というイメージを、さらに妄想しています。表象の暴走を、暴走した言葉に演じさせています。この戦略＝方法が、読者に伝わったかは不明です。ボケと突っ込みをひとりで演じ、記事の内容があやうくなっていくさまを相対化させようと努めていますが、この努力も、読者に伝わったかどうかは、はなはだ疑問です。また、一連の説明が、一種のオカルトめいたものとして、読者に解釈されることに対し、予防線を張ろうとしています。それが成功したのかも怪しいです。非常に誤解を招きやすいテーマに、逆に振りまわされています。学生時代にスラング語の授業で、「名文」をたくさん「暗唱する」ように指導された思い出についても語っています。これがきっかけとなり、次に、「口承」という「繰り返し」⇒「暗記」⇒「伝承」のメカニズムを思い出させています。キーワードとキーフレーズは、「偶然性」「必然性」「ヒトという種は、変わらなければならない」「重なる・共振する・交感する・シンクロする」「ボードレール」「『悪の華』」「交感（Correspondances）」「フランス語教育」「口伝」です。直接書かなかったキーワードは、「アテネ・フランセ」「日仏学院」「蓮實重彦」「マリー＝シャンタル蓮實」「『フランス語の余白に』」「鈴木力衛」「白水社シートブックスフランス名文選」「前田陽一」「丸山熊雄」「新フランス語入門」「モーリス・パンゲ」「ミヒャエル・ミュンツァー」です。

＊「うたう」2009-07-02：ヒトにとって常態である「動き」と、それを知覚・意識することについて考察しています。ヒトにとって、基本的な「動き」である「まわる」を論じ、「めまい」という個人的な体験を語っています。そこから、ヒトが「目がまわる」ことを好む習性に触れたあと、ふいにベルクソンの書いた哲学書の一節にあった、「durée（＝持続・持続性）」という言葉があたまに浮かびました。これも、学生時代に暗唱させられた文章の断片です。それまで、あたまにあった円状、線状の時間というイメージを一掃するほどの強い喚起力をもつ語でした。以後は、流れ・方向・経路というイメージで時間をとらえることに夢中になっています。音楽・旋律へと連想が進み、記事は「うたう」というテーマに引きつけられていきます。このように、記事を書いている過程が、1つ

の出来事＝事件＝accident＝偶然となっていく展開が理想です。まさに、ジャズのアドリブです。個人的にとっても愛着のある記事になりました。自己満足でしかありませんけど。キーワードは、「座禅」「無の境地」「ダイ・イン (die-in)」「フランス語教育」「カラオケ」「鼻歌」「ハミング」「うなる」「待つ」「期待する」「再現」「再演」「模倣」「重なる」「変奏」「ずれる」です。

＊「まつはいつまでも、まつ」2009-07-03：歌手のマルシアが、デビュー前に「待つわ」という歌の歌詞にある「待つわ」を「松は」だと思ってうたっていたらしいというエピソードから、「正しくない」のポジティブな面を指摘しています。同時に、「まつ」の多義性と戯れながら、「うたう」「持続性」「待つ」「間を打つ」「ま・間」「俟つ・期待する」と話を運んでいきます。記事のテーマである「旋律・持続」を、つづる言葉たちに演じさせています。言葉の増殖が増殖を生むのにまかせています。その過程で漏れ出た「つなが」という言葉から、「大いなる存在の連鎖」へとつながり、高山宏という恩師の回想となります。高山氏の片方の目が失明したという話をウェブ検索のさいに読んだことに触れ、感傷的になって記事を終えています。キーワードとキーフレーズは、「岡村孝子」「聞き間違い」「誤解」「話をでっちあげる」「意味が分からないことをとなえる」「意味が分からない行為をする」「「durée」「during」「expect」「hope」「anticipate」「wait」「言葉のフェティシスト」「わくわくどきどきじりじり」「サスペンス」「推理小説」「筋」「ストーリー」「なぞる」「ならう」「まねる」「アーサー・O・ラヴジョイ」「由良君美」です。

＊「あわいあわい・経路・表層 (1)」2009-07-04：この日の記事の前編。手元にある時計を題材に、「とき」「まつ」について考えをめぐらせています。テーマは、「経路」です。さらに1)「経路」に沿った再現・再演・反復・変奏・持続という体験について、2) 生得的な「経路」について、3)「経路」にはどのようなものがあるか、について。以上の3のサブタイトルを「経路」にして、論を進めています。キーワードとキーフレーズは、「クォーツ時計」「揺れ」「機械」「脳のなかで、何度も何度も、やり直す＝繰り返す」「「経路」が、既に敷かれている＝引かれている」「歌や演奏が、毎回、「異なる＝ずれる」」「うつす・移す・写す・映す」「口承」「口伝」「筆写」「印刷」「複製」「翻訳」「郵便配達はいつもベルを二度鳴らす』『ナイン・ストーリーズ』『異本／別本』『正統／異端』です。直接書かなかったキーワードは、「宮川淳」「豊崎光一」「蓮實重彦」「渡部直己」です。

＊「あわいあわい・経路・表層 (2)」2009-07-04：この日の記事の後編。3本の「経路」を敷いたのに、相変わらず、「経路」に沿おうとしつつも、脱線する自らの「運転ぶり」にあきれています。最後のほうで、この日の記事が、前日の記事の「注釈」になっていることを読者に「申明かし」し、記事に書かれた言葉たちに、記事のテーマを演じさせるという、このブログのワンパターン＝「経路」について、「説明＝自己注釈」しています。自己解説をして、お恥ずかしい限りですが、言葉を言葉として読んでほしいという、言

葉のフェティストの叫び＝祈り＝訴えでもあります。かなり本気になって書いた記事です。キーワードとキーフレーズは、「デカルト」「チョムスキー」「ヒトにみられる「フィクションへの偏愛＝異常な愛着＝依存症」「ヒトは、つなげる仕組み＝つなげるフィクション＝つなげるダイナミズムという特性＝属性を、生後に学習する前に既に生得している」「経路」とは、方向＝進行、順序＝前後、型＝形という3要素をめぐる、規則性と不規則性のからみ合いである」です。

＊「マンネリズム・マニエリスム」2009-07-05：軽い調子のエッセイとして書いた記事です。歌、小説、芝居、ダンス、スポーツなどのうち、多くのヒトに長く愛されている作品・ヒト・妙技には、「パターン・文体・文法・流儀・刻印」がある、がテーマです。ヒトのもつ特殊な才能や天才についても、考えをめぐらしています。ここでも、「生得的な「経路」という言葉＝イメージをつかっています。「経路」が「動き」となって立ち現れ、他のヒトにつたわるというメカニズムに注目しています。「マンネリズム」を意味する英語 mannerism に「マニエリスム」という美術および文学用語があることに触れ、両者が、「経路」の仲間であると主張しています。大和言葉形の「まがる」「くせ」という言葉に、「経路」と同種の表情・仕草・運動を見えています。キーワードとキーフレーズは、「ジョージ・スタイナー」「ボビー・フィッシャー」「音楽・数学・チェス・囲碁」「ランダムブログ」「イワシの翻訳 LOVE」「グスタフ・ルネ・ホッケ」「高山宏」「ワンパターンも、マンネリズムも、マニエリスムも、最高の褒め言葉である」です。直接書かなかったキーワードは、「実務翻訳・出版翻訳」「児島修」です。

＊「こんなことを書きました（その12）」2009-07-06：2009-06-26 から 2009-07-05 にブログタイトル「うつせみのあなたに」に掲載した記事のダイジェスト版です。

＊「いみのいみ」2009-07-07：言葉の意味が、いわば「入れ子構造」になっていることがテーマです。引用という言葉を使って、その構造を読者に体感してもらおうと努めています。辞典・辞書が採用している形式の限界性への苛立ちが、一種の風刺になっています。「経路」という言葉で、「意味」と「無意味」と呼ばれているものの関係を説明しようとしています。「経路」の「意味」をあえて確定しないという、書く上での戦略が、うまく機能しているかは不明です。「意味」を「無意味という意味」にも固定しないように企む。ややこしいですが、そんな感じです。キーワードは、「引用」「注釈」「変奏」「国語辞典」「アンブローズ・ビアス」「悪魔の辞典」「ギュスターヴ・フローベール」「紋切型事典」「ウィキペディア」「新明解国語辞典」です。直接書かなかったキーワードは、「ジル・ドゥルーズ」「意味の論理学」「ミシェル・フーコー」「言葉と物」「狂気の歴史」です。

＊「何となく」2009-07-08：「経路」という考え方を、日替わりで「何となく」に転じて、

「意味」の「無意味性」とでもいうべき仕組みについて、「考える」というより、「イメージ化する」ことを試みています。論理という手続きを使えば、矛盾とみなされる言葉のありようについて、現代物理学における新しい考え方・イメージを借りて、読者にイメージ化あるいは体感してもらおうと努めています。「何となく」という言葉の意味ではなく、「何となく」という言葉が演じている運動・仕草や、表情・めくばせに目を配っていただければと思っています。最後に、自然言語と人工言語という、自分にとっては非常に苦手でありながら、非常に気になる分野について、「お勉強する」との決意を述べています。今読むと、恥ずかしくて仕方ありません。キーワードは、「一般論」「＝（という記号）」「意味の固定化」「すっきり」「排除・選別」「イメージ」「メッセージ」「矛盾」「論理的」「禅問答」「不条理劇」「ギュスターヴ・フローベール」「ブヴァールとペキュシェ」です。直接書かなかったキーワードは、「量子」「量子力学」「素粒子」「南部陽一郎」です。

＊「記述＝奇術＝既述」2009-07-14：5日ぶりに記事を書いています。その間に、苦手な自然科学の本を20冊図書館から借りてきて、拾い読みしていたからです。小学生時代から現在にいたるまで続いている、自分のいい加減な読書法について白状しています。大学生になって、初めてきちんとした文献の読み方を学んだ経緯にも触れています。翻訳の仕事をしていた頃の思い出も語っています。自己弁護と弁解をしています。メインは、20冊を「読んだ」というより、「見て」得たことについての報告です。今読むと、馬鹿話です。情けないです。キーワードは、「物理学」「化学」「生物学」「数学」「論理学」「遺伝子工学」「プログラム言語」「機械語」「読書感想文」「作文」「レポート」「学術論文」「文学部外国文学科」「卒業論文」「大学院」「引用」「ブリコラージュ」「でまかせ」「翻訳」「意識」「超訳」「自と他」「他者」「アホ」「人工言語」「自然言語」「バイオテクノロジー」です。キーフレーズは、「記述」は、「奇術」であり「既述」である」です。

＊「3人のゲンちゃん」2009-07-15：おふざけをしながら軽い調子で書いていますが、個人的には愛着のある記事です。後に連載する「げん・〇」シリーズのきっかけになった記事だと言えそうです。要約不可能な感じのする書き方をしています。キーワードは、「学問」「なわばり行動」「唯幻論」「唯言論」「唯現論」「メタな立場」「フィクション」「説」「物語」「げん・幻・言・現」「トンデモ本」「トンデモブログ」です。直接書かなかったキーワードは、「岸田秀」「丸山圭三郎」「吉本隆明」「宮川淳」「豊崎光一」「蓮實重彦」「渡部直己」です。

＊「あつきのせい？」2009-07-16：これも、かなりおふざけをして書いています。確かにこの記事を書いていた頃は、暑かったです。ある川柳もどきのフレーズを何通りかに解釈して、日本語のひらがな表記の意味の多重性について述べています。そのいわば狂言回しとして「げん・幻・言・現」という言葉とそのイメージを利用して話を展開するという方法をとっています。おふざけをしながらも、かなり本気で書いた記事です。今読

み返すと、あまり笑う気にはなりません。おふざけをしている記事は、たいてい、抑うつ状態が激しい時に書いているからです。キーワードは、「あつい・暑い・厚い・熱い・篤い」「意味の多義性」「解釈の複数性」「解釈の不可能性」「幻想」「現実」「言語」「知覚」「暗号解読」です。直接書かなかったキーワードは、「坂部恵」『仮面の解釈学』「ウィリアム・エンブソン」『曖昧の七つの型』です。

＊「システムと有効性と比喻」2009-07-17：息切れを感じます。言語に対してぶち当たるといういつもの姿勢が、心身の疲れのために、勢いを欠いています。「神経症的」という言葉で弱音を吐いています。記事の最後では、dead end と The end. という end がつく2つの言葉を出して、力尽きたことをほのめかしています。直接書かなかったキーワードは、「マラルメ」です。

＊「気になるというか」2009-08-01：ドクターに内緒で、性懲りもなく「でまかせしゅぎじっこうちゅう」というブログタイトルで記事を書き始めました。その第1弾です。自分との対話みたいな感じで、手探りで書いています。病み上がり半ばのせいか、書いていると言うよりも、「つぶやいている」ようです。まさに「でまかせ」です。自分の「でまかせ主義」の確認みたいです。

＊「もう1つ気になることが」2009-08-02：少し元気が出てきた様子がうかがわれます。日記をつけていないので、この日にどんな心身の状態にあったかを確かめることはできないのですが、数学の微分について、気になっていることを、自分なりに言葉にしようと努めています。テレビやパソコンの画面における動画の仕組みと、微分をからめて、「まぼろし・幻・幻想」について考察しています。キーワードは、「直線」「曲線」「錯覚」「錯視」「無限」「まぼろし・幻・幻想」「現実・うつつ」「言葉・言語・言の葉」です。

＊「さらに気になることが」2009-08-03：今度は、苦手な数学の「確率・統計」にかみついています。この日のことも、あまり覚えていないのですが、かみつくだけの元気が出てきたもようです。記事をよく読んでみると、7月の半ばに図書館で20冊の自然科学系の本を借りてきて「見た」ときに取った、走り書きメモをもとにして書いているように思えます。「死の間際の心境でいたい」や「夢のなかでは、(中略)すべてが肯定されます」という文句がありますが、これは今もいだいている感情です。キーワードとキーフレーズは、「確率・統計・行列」「物理学」「神様がサイコロを振っているわけがない」「偶然性を数量化する」「げん・幻・現・言・限」です。直接書かなかったキーワードは、「アインシュタイン」「マラルメ」です。

＊「できないのにできる」2009-08-04：道具という言葉を手掛かりに、ヒトが「代理」を使うという習性、および仕組みを説明しようとしています。「道具」を「手段」、そして「システム」へと拡大していき、そうした「道具」がヒトに「使われるもの」としての役割を超えた存在として機能しているさまに、読者の注意を向けようとしています。ヒトが「道具」として使用している対象に逆に依存している状況を、「主従の関係は決定できない」というフレーズで表現しています。キーワードは、「代理」「道具」「使用・使用する」「器具」「手段」「器」「指」「手」「腕」「システム」「機械」「武器」「装置」「月面着陸」「ヒトという種の脆弱さ」「匿名的・非人称的・ニュートラル」「主従関係」「げん・幻・現・言・限・原」です。直接書かなかったキーワードは、「エルンスト・カッシーラー」「クロード・レヴィ＝ストロース」「ブリコラージュ」です。

＊「何もないところから」2009-08-05：「ない」「無」がテーマなので、できるだけ概念化や意味の固定化を避け、おふざけで言葉を遊ばせ、その言葉の演じる表情や動きによって、読者にテーマをほのめかそうという、以前からの方法・戦略を実践しようと努めています。以前のように過激には実践していませんので、軽く読み流し、言葉の身ぶりを体感していただきたい記事です。キーワードは、「でまかせ」「賭け」「げん・幻・現・言・限・原・Gen」です。直接書かなかったキーワードは、「creatio ex nihilo」「マラルメ」です。

＊「めちゃくちゃこじつけて」2009-08-06：前回から連続している言葉の「祭典」です。ヒトの存在の原点とも言える「こじつけ」を、記事に書かれている言葉に演じさせて、読者に「こじつけ」というテーマを「観客として見てもらう」という出し物だと思って読んでもらおうと努めています。そのため、かなりふざけた書き方になっています。でも、真剣に書いています。好き嫌いがはっきり分かれる書き方です。波長が合わない読者には、一蹴されるでしょう。反省しています。でも、身についたスタイルなので、致し方ない部分があることは確かです。キーワードは、「サイコロ」「アドリブ・即興演奏」「道具」「関係性」「する／される」「げん・幻・現・言・限・原・Gen・眼」です。直接書かなかったキーワードは、「creatio ex nihilo」「マラルメ」「ジャック・デリダ」「ジャック・ラカン」「蓮實重彦」「高山宏」です。

＊「銃が悪いのではなく」2009-08-07：広義の道具とヒトの関係性がテーマです。さまざまな具体例を挙げて、感覚的にテーマを伝えようと努めています。図や記号も利用しています。概念ではなく、感覚やイメージでほのめかすという方法に、徹底してこだわっています。ただ、この記事を書いた時には、再び抑うつが悪化し始めてきたことは覚えています。今、思い出すとちょっと悲しいです。おふざけをしながらも無理をしているのが感じられます。キーワードおよびキーフレーズは、「銃が悪いのではなく、悪用するヒトが悪いのだ」「武器を所持し、および携帯する権利」「Not guns, who kill」「依存関係」「主従関係」「万物は、圧倒的な偶然性に身を任せて、静止したり、ぶらぶら揺れて

いる」「けん玉」「自由／不自由」「げん・幻・現・言・限・原・Gen・眼・弦」です。直接書かなかったキーワードは、「アメリカ合衆国憲法修正条項第2条」「全米ライフル協会」「依存症」です。

＊「どうにもならないときには」2009-08-08：心身ともに相当参っている状態で書いた記事です。翌日かこの日に、ブログを削除・閉鎖しています。記事のタイトルは、その日の自分の状態に重なっているのかもしれませんが。自己啓発書の果たしている役割について書いています。言葉を信じたい。でも、言葉を素直に信じることをためらわせるものが、自分のなかにある。そうした揺らぎが感じられます。それをヒトという種の問題として、一般化することで現実から逃避しようとしているとも言えます。自分の弱さを感じます。病んでいるから、逃げていいとは言えないというふうにも、この文を書いている時点では思います。今だから言えることなのかもしれません。テーマは、知覚機能や言語を含めた広義の道具・代理の自立性と、道具を使う側のヒトの思惑との隔たりです。このテーマの下には、「(自己の) 認識」と「他者」に対する深い疑問があります。ただ、そこまで掘り下げて書くことはできませんでした。いつか、書いてみたいです。キーワードとキーフレーズは、「自己啓発書」「不景気」「知覚」「知覚器官」「認識」「天動説／地動説」「分かる／分からない」「(世界を) 感じる／(世界は) 存在する」「(森羅万象を) 観測する」「糸」「伝染るんです≠ 伝染らないんです」「it・It・Es・Etwas」「有り難い」「げん・幻・現・言・限・原・Gen・眼・弦・滅・絃」です。直接書かなかったキーワードは、「フロイト」「無意識」「自我」「超自我」「フリードリヒ・ニーチェ」「エス」「ジャック・ラカン」「大文字の他者」です。

『うつせみのあなたに 第8巻』の内容

09.08.11～09.09.XX

＊「たわむれる」2009-08-11：「げん」シリーズのウォーミングアップのつもりで書きました。記事を書くうえで日本語の多義性・多層性を生かしたいという願いがあるため、その確認の意味でちょっと解説じみたことを書き、言葉たちにテーマを演じてもらったつもりです。最後に幾通りかに読める言葉のつらなりを書いてみましたが、独りよがりとは言いえないものになっています。でも、せっかく書いた、自分にとってはかわいい言葉たちなので、そのまま残しておきました。直接書いたり書かなかったキーワードは、「多義性」「多層性」「大和言葉」「漢語」「ひらがな」「漢字」「感字」「転じる」「言い間違い」「誤用」「勘違い」「連想」「でまかせ」「偶然性」「たくらむ」「しくむ」「マラルメ」「坂部恵」「仮面の解釈学」です。

＊「なつかれる」2009-08-12：うっかりして、この日に病院の診察予約が入っていたのを忘れていたために、あわてて川柳もどきの句を詠んでみました。いくつかの解釈ができるように「たくみ」「しくんだ」つもりですが、これもまた、独りよがりの句で終わっています。これまででいちばん短い記事になってしまいました。

＊「げん・幻 -1-」2009-08-13：以前の乱暴な文体を反省し、読者の方々に読みやすいようにと心がけて書いたつもりですが、どうでしょうか。自分をせっぱ詰まった気分追い込んだところで一気に、ばあーっと書く従来の方法を改めて、断章を重ねる形式を採用しています。テーマは、「正しい」対「正しくない」という対立から離れて、自分の思いとイメージを頼りに、「まぼろし」という言葉と遊び、戯れることの実践とその可能性です。キーワードは、「幻影」「かげ」「幻影城」「幻灯」「光」「ま・ma・間・魔・真」「ほろぼす」「広辞苑」です。

＊「げん・幻 -2-」2009-08-14：個人的に好きな「言葉」、つまり、「音」であり、「字」でもある「ま・ma」とのたわむれがテーマです。「こじつけ」や「比喩」や「たとえ」と呼ばれている、言葉の仕組みについて、思うところを書いています。「げん」シリーズは、これまでつづってきた記事の「書き直し」、または「集成」にしようというつもりで書

いています。いつ誰が飛び入りで読んでも、入っていけるような記事を心がけていますが、つい読者への配慮を忘れた独りよがりな言葉遣いをしてしまいます。自戒したいと思っています。キーワードは、「つなげる・つながる」「ひとり歩き」「妄想」「ちかく・知覚・近く」「圧倒的な偶然性」「宙ぶらりん」「でまかせ」「まかせる・まく・まける」「イメージ」「掛詞」「かける・かく」「転じる」「約」「訛る」「間違い」「言葉の乱れ」「当て字」「テリトリー」「縄張り」です。直接書かなかったキーワードは、「自動書記・自動筆記」「シュールレアリズム」「夏目漱石」です。

＊「げん・幻 -3-」2009-08-15：このあたりで、シリーズの文体が定まってきた感じがします。「ま」のうち「間」という漢字が喚起するイメージを言葉に演じてもらうことがテーマです。日本語における大和言葉系と漢語系という2つの大きな流れについて、読者に体感してもらおうと努めています。「関係性」という、自分にとって大きな問題についても、少し触れています。キーワードは、「間の取り方」という言い回しで使われる「間」「音読み」「訓読み」「間・あいだ・あい・あわい・かん・けん・げん」「表意文字」「表音文字」「字面」「活字」「書体」「フォント」「写植」「タイポグラフィー」「幻界」「限界」です。直接書かなかったキーワードは、「杉浦康平」「佐藤敬之輔」「石井茂吉」「森澤信夫」です。

＊「げん・幻 -4-」2009-08-16：「まぼろし」を「真を滅ぼす」と読むことで、話を展開しています。ヒトが「真」だと信じがちな「現実」という「物語」・「神話」に矛先を向け、批判的な意見を述べています。そうした物語が、知覚という仕組みを基本にしているヒトという種にとって、免れないことは致し方ないとしても、少なくとも、その仕組みに敏感であるべきではないかと主張しています。「いかがわしい」「うさんくさい」という語弊のある言葉を、戦略上、あえて使っています。キーワードとキーフレーズは、「真実」「現実」「実体」「事実」「論証」「実証」「知覚」「知覚器官」「現・うつつ」「夢はすべてを肯定してくれます」です。直接書かなかったキーワードは、「フロイト」「ジャック・ラカン」「エルンスト・カッシーラー」です。

＊「げん・幻 -5-」2009-08-17：「ま・ma」という言葉の物質性を体感することがテーマです。実際に、「ま」を声に出すようと、読者を誘っています。まるで宗教の勧誘みたいです。言葉の物質性に触れることが、いかに容易であるか、同時に、いかに難しいかという二面性についても論じています。ヒトにおいて知と感が同時に生じる状況に二面性がある、という意味です。一方に傾けば、もう一方が消える。それでいて、両者が同居する状況も可能だとも説明できます。これは、言葉を実際に発して体感してもらうのがいちばんだと思います。いささかオカルトめいたイメージを伴う体験ですが、個人的にはオカルトは苦手だと思っています。その点について、ちょっと自意識過剰になっています。今読み返すと、そんなに気にしなくてもいいのに、と思います。キーワードは、

「言語学」「音声学」「意味素」「形態素」「音素」「あはっ」「わかる」「ひらめく」「きづく」「double」「すり替わる」「英和辞典」「語源」「母親」「乳母」「ご飯」「乳」「乳房」「ma」「m」「a」「阿」「無」「无」「aum」「om」「あくび」「赤ちゃんの泣き声」「あーむ」「むあー」「近親憎悪」「宗教」「カルト」「スポリチュアリティ」「オカルト」「組織」「個人崇拜」です。

＊「げん・幻 -6-」2009-08-18：「似ている」がテーマです。「比喻」と「擬人化」という言葉・イメージを手掛かりにして、かなり詳細に考察しています。身の程をわきまえない、自分を含めたヒトという種への批判にもなっています。以前から気になって仕方がない、「夢」と「夢の主語」というテーマについて触れていますが、中途半端に終わっています。いつか時間をかけて考えてみたいテーマです。キーワードとキーフレーズは、「つなげる」「こじつける」「représentation」「人面○○」「顔」「表情」「人形」「ヒトにとって、森羅万象は「ヒトのようなもの」なのかもしれません」「夢」「非人称的で匿名的でニュートラルな」「幻界は言界であり現界でもあり限界だと言えそうです」です。直接書かなかったキーワードは、「宮川淳」です。

＊「げん・幻 -7-」2009-08-19：「似ている」と似ている「そっくり」という言葉・イメージがテーマです。「似ている」が「別のものに似ている」状態であるのに対し、「そっくり」を「そのもの自体に似ている」状態として、話を展開しています。以前は、「記号」や「まぼろし」という言葉を用いてイメージしていたテーマなのですが、現在は違ったとらえ方をしています。「血の濃さ」や「血縁関係」という比喻で、「似ている」を説明している一方で、「有効性」や「声の大きさによる説得力」という言葉を使って、「似ている」のいかがわしさを指摘しています。現在の学問を成立させている前提のうさんくささにも矛先を向けています。批判の根拠としているのは「比喻」という、ヒトが免れない仕組みと、その仕組みへのヒトの無自覚です。かなり長い記事になってしまいました。キーワードとキーフレーズは、「似ている」「そっくり」「同じ」「同一」「対象生産」「大量栽培」「大量消費」「大量流通」「大量販売」「関係性」「共通性」「科学」「ノーベル賞」「物理学」「量子」「実証」「観測」「五感」「説」「理論」「有効性」「信頼性」「オリジナルとコピー」「本物と偽物」「出来事と出来事の再現」「神話」「思い込み」です。直接書かなかったキーワードは、「ピエール・クロソウスキー」「モーリス・ブランショ」「ロラン・バルト」「宮川淳」「記号論」「記号学」です。

＊「げん・幻 -8-」2009-08-20：前日の記事で「そっくり」状態について、言い足りなかったことを補足しています。「そっくり」を「状態」「状況」「見る側のヒトの知覚・意識・イメージ」「見方」など、どんどん言い換えていく戦略をとり、意味の固定化、概念化を回避しようとしています。その「きりのない言い換え」の運動、あるいは移り行く言葉たちの演技に、「そっくり」が立ちあらわれる「さま」を見てほしいという考え方で書いています。ときには、「現代社会」「市場経済」「グローバル化」といった、抽象度の高い、

いかめしい言葉を用いて説明をしています、あくまでも、重点は「言い換え」という「運動のありよう」に置かれています。なにしろ、「そっくり」とは「そのものにそっくり」なのです。二枚の鏡を合わせたときの、きりのない映像を目にしたさいのめまいに似ています。この日は、つい熱が入って、ブログ記事の文字制限いっぱい長さになってしまいました。いろいろな言葉やフレーズが出てきますが、この記事ではキーワードは、ありません。言葉たちの演じる動きが主役です。

＊「げん・幻-9-」2009-08-21：表象としての広義の言語がテーマです。このシリーズで何度も繰り返されている、「ヒトにおいては、知覚器官と脳のあいだの各所で、情報あるいは信号が伝達および処理されていて、それがヒトにおける知覚および意識である」と、「ヒトは、「何か」の代わりに、「その「何か」ではないもの」を用いている」という2つフレーズが、不毛とも言える議論しか生まないと思われがちなのではないか。そんな思いから、その「不毛感」もしょせん「まぼろし」にすぎないという視点を示すことで、「不毛感」を乗り越える処方もあるのではないかと訴えています。そのために、さまざまな言葉を必死に使って、「不毛感」をやわらげようと努力しているさまが滑稽です。あきれるほど、いろいろな言葉を持ち出してきて説明を試みています。再読してみると、そうした訴えを弁解、あるいは言い訳と解釈するヒトもいると思われます。そこまで気を使わなくてもいいのに、と思えるほど、気を回している印象を受けます。キーワードは、「交換」「代行」「流通」「消費」「利用」「発する」「受け取る」「伝える・伝わる」「あらわす」「読む」「代理」「錯覚」「現実」「幻想」「賭け」「確率」「有意性」「知覚」「種(しゅ)」「再現」「複製」「実用性」「有効性」「観測者」「知恵」「救い」「諦め」「居直り」「希望」「風刺」「ユーモア」「笑い」です。

＊「げん・幻-10-」2009-08-22：「げん・幻」の最終回です。前回の気遣いをまだ引きずっています。ヒトにとって一生付き合うしかない対象である「まぼろし」との付き合い方を提案しているとも言えます。言葉とイメージを相手にたわむれることで、まぼろしのおもしろさを読者に体感してもらおうとしています。共感を得られるかどうかは不明です。この記事を読み返してみて、自分はまぼろしが好きなのだと実感しました。まぼろしと詩は相性がいいです。最後の言葉の遊びめいた部分は、つたない「詩もどき」として読んでください。キーワードは、「幻影」「映像」「想像力」「創造力」「かげ・影・陰・翳」「面影」「像」「象」「形」「うつる」「写像」「かける」「たちあられる」「かたる」「よむ」です。

＊「げん・言-1-」2009-08-23：「げん」を「幻」から「言＝言葉」とずらして論じる第1回目です。まず、言葉を言語学的視点から事務的に5つに分け、次に言葉を比喩として置き換え、さらには言葉と関係のありそうな言葉を羅列する作業を通し、「言」を「分け

る」ことが「ぐちゃぐちゃ」「ごちゃごちゃ」になる様を言葉に演じさせ、その身ぶりを全面的に「肯定する」というスタンスを戦略にするという「宣言」をしています。このシリーズを学問や探究や研究から遠ざけ、あくまでも「遊戯」に徹しようという意思表示とも言えます。キーワードとキーフレーズは、「言葉は何とでも言える」「分ける」「言語」「比喩」「隠喩」「直喩」「類語」「レトリック」「イメージ」です。直接書かなかったキーワードは、「ジャック・デリダ」「ソシュール」「マラルメ」です。

＊「げん・言 -2-」2009-08-24：ヒトが言葉に接する場合に、言葉を単に道具のように使うという日常レベルでの付き合いだけでなく、「言葉そのものにこだわる」、つまり「言葉にのめり込む」という態度があることを指摘し、後者の危険性を訴えています。つまり、言葉にこだわりすぎると「不幸になる」＝「ある種の狂気に陥る」というわけです。半ば冗談、半ば本気で、「不幸にならない」ための方法を、いくつか提案しています。言葉について語るさいに避けられない「代理」という仕組みにも言及し、最後は言語の多様性への言及で締めくくっています。キーワードは、「狂気」「まける・まかせる」「かける」「翻訳」「伝道」「教義」「解釈」「知」「わける」「あう」「はなす」「かく」「情報」「信号」「伝達」「代理」「貨幣」「異形」「絶対的他者」です。直接書かなかったキーワードは、「ヒュー・ケナー」「ジョージ・スタイナー」です。

＊「げん・言 -3-」2009-08-26：「げん」という音（おん）および文字の多義性と多層性を再確認しています。その小道具として、「言界」「現界」「幻界」「原界」「限界」「Gen 界」「滅界」といった文字を交えたおまじないのようなフレーズを唱えています。「言葉は何とでも言える」と繰り返し、駄洒落を頻出させ、言葉が多種多様なつながりを身ぶりとして演じている様を現出させようと努めています。言葉のごちゃごちゃぶりと豊饒さを言葉に演じさせるために、言葉を固定させまいと必死になって文章をつづっています。「論じる＝まとめる」と「戯れる＝拡散する」の両立を目指しているとも言える、絶望的な戦略で書いていますが、当然のことながら、読者がどう取るかは不明だとあきらめている節も感じられます。前回の「言葉そのものにこだわり」、「のめり込んでいる」状況を、自らが実践しているとも言えます。このシリーズでは、最も重要な記事だと思います。キーワードは、「うさんくさい」「わける」「部分・全体」「写像・対応」「無限大・無限小」「まつりごと・政」「政治・宗教・権力」「わかれる・ちる・あう・つながる・かわる・かえる」「part-」「uni-」「光の二面性」「知覚」「脳」「情報」「伝達」「物語・フィクション・定型」「competence」「performance」です。直接書かなかったキーワードは、「ヒュー・ケナー」『The Stoic Comedians: Flaubert, Joyce, and Becket（邦題：『ストイックなコメディアンたち——フローベール、ジョイス、ベケット』）』『ジェームズ・ジョイス』『サミュエル・ベケット』『ギュスターヴ・フローベール』『ジャック・デリダ』『ジャック・ラカン』『ソシュール』『マラルメ』『チョムスキー』『レフ・ヴィゴツキー』『ジャン・ピアジェ』『赤塚不二夫』『吉田戦車』『松鶴家千とせ』『丸山圭三郎』『坂部恵』『高山宏』『高橋康成』です。

＊「げん・言 -4-」2009-08-27：ヒトが言語というものを手にしてしまった「喜劇性」と「悲劇性」がテーマです。その両義的な状態を前提にどうすればよいか。その問いの答えとして、「言葉の物質性」を肯定するというスタンスを提案しています。その帰結として、言葉のフェティシズムという生き方が出てきます。それが、誰もが日常的に経験する行為であることに、読者の注意を喚起しています。キーワードは、「代理」「不毛」「抽象的」「抽象化」「知覚」「読経」「音楽の歌詞」「外国語」「読み聞かせ」「聞こえる・聞く」「具体的」「即物的」「直接的」「書道」「写経」「活字」「文字」「フェティシスト」です。直接書かなかったキーワードは、「音声学」「タイポグラフィー」です。

＊「げん・言 -5-」2009-08-28：「わかる・わかる・わかる・わけ」に漢字を当てる作業を通し、「わかる・わかる・わかる・わけ」を具体的な体験として読者に示そうと努めています。次に、「わかる・わかる」を抽象的な話＝物語に還元して「説明する」という作業をしていますが、同時にそれが「割り切れない」話にしかなり得ないことを言葉の身振りとして示そうとしています。その過程で、言葉を「道具」という比喻に見立て、その「道具」が「ヒトに使われるもの」という暗黙の了解を無化し、「非人称的で匿名的でニュートラル」なものとしてヒトの支配を超えた存在であり、むしろヒトが「道具」に依存している状況にあることを指摘しています。言語に支えられた、ヒトの「知・知性」についての懐疑の念も示しています。キーワードは、「つくる」「備わっている」「主導権」「学問」「まばら」「必然性」「整合性」「機械」「システム」「偶然性」「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ」「すっきり」「狂気」「正気」です。直接書かなかったキーワードは、「ヴィトゲンシュタイン」です。

＊「げん・言 -6-」2009-08-29：ヒトの言語能力と言語運用を可能にしているものとしての、先天的な「回路」「システム」「経路」があるらしいという説に加担しながら、議論を進めています。その考え方と「フィクション」「筋」をからませ、あくまでも自分自身の経験をもとにしながら、その説の有効性を探る方法をとっています。根底にあるのは、ヒトは「紋切り型」に沿って思考し生きているのではないかという疑問です。キーワードは、「決まり文句」「自由意志」「仕掛け」「仕組み」「出来レース』『紋切型事典』『パッチワーク』『オリジナリティ』『引用』『真似る・学ぶ』『物語（or 説話）の構造分析』『ロシア・フォルマリズム』『プリコラージュ』『理論物理学』『インド哲学』です。直接書かなかったキーワードは、「チョムスキー」「ギュスターヴ・フローベール」「構造主義」です。

＊「げん・言 -7-」2009-08-31：ヒトが他者や共同体から「統制されることを恐れる」という心理と、「進んで統制を望む」心理がテーマです。この相反する2つの心理と、アン

ビバレントな心理の3つのからみ合いをさまざまな例を挙げて考察しています。後半で、「異化」という言葉を自分なりに定義し、「統制」への反発力を備えた「武器＝戦略」にできないかと手探りしています。キーワードは、「アメリカ文学」「明治維新・文明開化」「翻訳・翻訳語」「写生文」「学校教育の制度化」「共通語」「つづり方」「文章の書き方」「描写」「比喩」「インターネット」「ケータイ」「難聴(者)」「表情」「文法」「国語の乱れ」です。直接書かなかったキーワードは、『言語の都市——現代アメリカ小説』『トニー・タナー』『村上龍』『村上春樹』『大江健三郎』『多和田葉子』『動機の文法』『ケネス・バーク』です。

＊「げん・言 -8-」2009-09-01：言語に支えられた「知」というものの有効性への懐疑がテーマです。実用書、ハウツー本、マニュアル、入門書、専門書はもとより、自己啓発書、発想法や問題解決の指南書といった書物をやんわりと非難しています。また、言葉が欠陥品でしかないという認識に立ったうえで、言葉で「知」を伝え流通させるという既存のシステムに対し、無駄な抵抗と承知しつつ、ぼやいています。言界は限界であるという駄洒落をむなしく吐いています。「代理」という仕組みに対して悪態もついています。迫力に欠けます。徒労感と疲れがみられます。キーワードは、「代理としての貨幣」「交換性」「置き換える」「価値」「実体経済」「『ないのにある』状態」「『ない』のに『ある』代理」です。直接書かなかったキーワードは、『ブヴァールとペキュシェ』『ギュスターヴ・フローベール』『ヒュー・ケナー』です。

＊「げん・言 -9-」【ブログ不投稿記事】：「げん」シリーズを書くために溜め込んだ走り書きメモを、ほぼそのまま断片的に並べながら、ある程度の「つながり」を持たせるために、つなぎの言葉で間を埋めている形式となっています。残暑の中で体調不良に耐えながら、「言霊」という重いテーマを扱おうとした結果です。いろいろ書いていますが、「言霊＝言葉＝物質≠ いわゆる魂・いわゆる心・いわゆる神々 or いわゆる神・いわゆる霊」という、「いわゆる唯物論」が核となっています。要約不可能な文章です。キーワードは、「神社」「神仏」「霊」「妖精」「文字」「声」「こと・事・言・げん」「たま・たましい・魂・こん・霊・れい」「つたわる」「使う」「代理」「働きかけ」「嘲笑う」です。直接書かなかったキーワードは、「ステファヌ・マラルメ」「賭け」です。直接書かなかったキーワードは、「原点への回帰」「復古主義・復古運動」「朝鮮語・韓国語・古代朝鮮語」「古代日本語・現代日本語」「漢語・漢文・漢字・中国語」「帰化人」「万葉集」「語源」です。

＊「げん・言 -10-」【ブログ不投稿記事】：これも走り書きメモを材料にしたブリコラージュ＝パッチワークです。「仮に・仮(＝かり)」「たとえ・たとえる」をキーワードに、苦手な数学と物理学をイメージとして言葉で紡いでいます。断片の集成ですが、再読してみると、けっこうおもしろいです。他人事のような言い方ですが、日ごろ思っていることを素直に書いているという印象を受けます。愛着のある断片集です。静かな語り口で

書かれていて、こういうのもいいな、と思います。

＊「げん・現 -1-」【ブログ不投稿記事】：10の「げん」について10本ずつ（計100本）の記事を書くという、今考えると無謀とも言える「げん」シリーズを構想して挫折した残骸である「メモたちを継ぎ接ぎしたパッチワーク」という点では、「げん・言-9-」と「げん・言-10-」の不投稿記事と同じです。「幻→言→現」と来たわけですが、「げん・現・現実」という「音読み＝からことば」から、「うつつ・現」と「訓読み＝やまとことば」に「うつる」ことにより、「正しい」「正しくない」という2項対立という「嘘＝虚＝空」を超えた「嘘＝虚＝空」へとイメージが「うつろっていく」さまが、断章をつなぐテーマとなっています。つまり、「うつろい」がテーマと言えないこともないという意味です。「ヒトは、現実を取り損ねている」というフレーズが何度も出てきます。その言葉をめぐって書きたかったのだなあ――。今となっては、他人事のように思うばかりです。「うつろい」の「うつ」に、「抑うつ」の「うつ」が重なっているのは言うまでもありません。残骸には残骸のおもしろさがある――。自己弁護と言われれば、返す言葉はありませんが、そんな印象を持ちました。キーワードは、「ゆめうつつ・夢現」です。

＊「げん・現 -2-」【ブログ不投稿記事】：これまで続けてきた不投稿記事とは対照的に、元気がいいです。勢いが感じられます。テーマは、そもそも伝道的手段として発達をみた「翻訳」という行為です。教義を記した書物における「げん・現・現実」とは、「げん・言」に近づこうというヒトの意思と、「げん・幻」の方向へ引き込もうとする言語のメカニズムの間での葛藤である。その葛藤をつづろうとしていたのではないか。再読して、そう思いました。キーワードは、「聖書・バイブル」「伝道・ミッション」「植民・植民地・植民地政策・植民地主義」「うつす・移す・写す」「写本」「印刷」「ファンダメンタリズム」「法・掟」「支配・体制・絶対」「地政学」「文明の衝突」「TIME誌」です。直接書かなかったキーワードは、「クルアーン（コーラン）」「イスラーム」「神道」「国家神道」です。

＊「げん・現 -3-」【ブログ不投稿記事】：「げん」シリーズを断念する宣言となった断章です。白旗を掲げています。10の「げん」を「＝」でつないだ、シリーズの見取り図がむなしく見えます。やろうとしていたことが、思い出されますが、本当に「アホな＝無謀な」ことを企てたものです。でも、結局は、その夢の残骸を「解体した＝ほどいた」ものの、のちにさらにまた言葉をつむいでいったわけです。因果を感じます。

09.09.04-09.09.26 小品集（１）

※ブログタイトル：「小品集」

※ 2009 年 9 月 4 日から 26 日までに掲載した 22 作の小品を紹介した記事です。

＊「名前」2009-09-04：【解説】押入れから出て来た古い手帳に列挙された名前たち。かつて自分を腹に宿していた母親が、記したものらしい。手帳を見ながら、物心がついた時には父親がいなかった過去を振りかえる。【抜粋】名前を書き付けていたとき母は妊娠していたのだと、今になって気づいた。自分の迂闊さにあきれる。手帳の裏に、母の実家の住所が記されていることから、母のものであることははっきりしている。曖昧にしていた事実を意識し、ようやく認めたということか。もう一つ改めて意識したのは、住所に添えられた氏名に母の旧姓が用いられていることだ。どういう意味なのか。

＊「ねえ、傘、貸して」2009-09-05：【解説】童話。小学校二年生のあいちゃんが、同じクラスの愛（めぐむ）という名の男の子が学校に来なくなったのを心配して、その家を訪ねようと決心した日、道で雨に遭う。どうして？【抜粋】そのときです。先生が言いました。「恵あい（めぐみ・あい）さんと、相田愛（あいだ・めぐむ）さんって、何となく似ていない？」

＊「セレブリティ」2009-09-06：【解説】新幹線のホームで、同じ列車に乗ろうとしている知り合いに呼び止められる。住み慣れた東京を後にし、実家に帰ろうとしている知り合いの語る過去に、じっと耳を傾ける。だが、その知り合いにとって終止符となるはずだった旅が、新たな出発となる。【抜粋】「私って、かわいかったでしょ。お金の心配をしたことはなかったなあ。ある時期まではね」。若くてかわいかった少年時代のその男は、驚くべき数の男性遍歴を経てきたという。

＊「バット・スキン・ディープ」2009-09-07：【解説】翻訳家を志している一人暮らしの女性のところに、同じ中学と高校に通った女性が転がり込んでくる。人間嫌いの傾向が

あった女性は、他人との共同生活によって次第に狂いの中へと落ち込んでいく。【抜粋】歩道橋の上まで来た玲子は、犬を抱きかかえた。喜んだ犬は再び玲子の顔を舐める。玲子は犬を道路に落とした。けたたましい鳴き声がした。トラックが急ブレーキをかける音も聞こえた。

＊「分身」2009-09-08：【解説】幼いころから問題児的傾向のあった男の子のいくつかのエピソードを通じて、一人の人間を過去から照射する。この語り手とは誰なのか？【抜粋】でも、とても涙もろい人です。根はいい人だと信じているので、別れずにいます。長い付き合いをさせていただいております。

＊「アユ」2009-09-09：【解説】童話。段ボールに入れられて川に流された生まれたての九匹の子猫たち。一匹だけが生き残り、年老いた猫を仲立ちに、神様と約束をする。その約束は、使命でもあった。【抜粋】「おまえは、生きたいか？」と年老いた猫が尋ねると、「はい、生きたいです。せいいっぱい、生きたいです」と、子猫は答えました。

＊「九つの命（「アユ」PART2）」2009-09-10：【解説】童話。九匹の子猫の中で一匹だけ生き残ったアユが、神様から与えられた使命を果たそうと奔走する。その使命には、ある条件があった。誰もがいつか経験しなければならない宿命を受け入れる命たちの物語。【抜粋】声によると、九つの命は同時に、この世からあの世へと飛び立つ運命にあるというのです。それは、神様にも、どうしようもない、宇宙の決まりなのだというのです。

＊「リハーサル」2009-09-11：【解説】十七歳のときに産んだ息子と四年振りに再会する日の前日。息子をもてなすために料理の練習をするはめになった母親が、年下の愛人との別れを予感する。息子が帰った当日の母親の揺れる心境。息子のセクシュアリティを理解するのではなく、そのままの形で受け入れる母親。【抜粋】相手のセクシュアリティには関係なく、好きになった人が好きな人という点で、意見が一致しているんだ。達郎はそうした言葉で、その女性と自分自身の生き方を語っていた。

＊「詐欺」2009-09-12：【解説】大学卒業後に、アルバイト生活をしていたころを回想する語り手。文庫本の知識を利用して、生活に苦しんでいる学生を騙し、お金を手にしたときのもようを描写する。そのトリックは、現在でも使えないことはない。悪用厳禁。【抜粋】この文章をお読みになっている方に、唐突な質問をいたしますが、角川文庫と新潮文庫の区別ができますか？

＊「X Y Z」2009-09-13：【解説】西暦二〇八五年。幾たびかの核兵器を用いた戦争によって、人口が激減し、さまざまな異常に見舞われている人類。両親と姉弟から成る、ある家族の日常を通して、殺伐とした世界をミクロとマクロの両面から描く。【抜粋】「そもそも、これだけ薬漬け器械漬けにされていれば、長生きできるわけないよな。われわれ Y ジェネレーションとしては、子どもの X ジェネレーションを行く末を憂い、放射能をこの惑星に撒き散らしたエロ Z ジェネレーションと、その前の歴代のジェネレーションを呪うしかないってわけさ」

＊「P D S G（「X Y Z」PART2）」2009-09-14：【解説】西暦二〇八五年の荒廃した世界で、新たな危機が訪れようとしている。人類は愚行と悲劇を繰り返すのか？ ナカタニ一家も、その危機の真っ只中にいる。いったんは絶望の淵に追い込まれた父親が希望を取りもどし、静かに朝を迎える。【抜粋】「P D S は P D S じゃないか。『パーソナリティ・ディスオーダー・シンドローム』、つまり『人格障害症候群』、立派な医学用語だろ。それにジェネレーションズをつけて、P D S ジェネレーションズってメディアが使い始めたのは、ずいぶん前の話。素人だから不正確な使い方をしているのは認めるけど、その言葉を自粛しろだって？」

＊「反・少女」2009-09-15：【解説】女子高校生がビデオショップで DVD を買う。店を出たところで、男に声を掛けられる。男はなぜか、その DVD の中身を知っている。なぜだろう？ 女子高校生は、男と「対決」しようと決意するが……。【抜粋】「一つ聞いていいかな——」真琴は、無意識のうちにそんな質問を口にしていた。「どうして、女だってわかった？ 店にいるのを見ている時は分からなかったんでしょ」

＊「不思議」2009-09-16：【解説】日ごろ、特に何も考えることなく、道具として使っている言葉。言葉を収めた辞書。ワープロソフトで書くさいに利用する文字変換。言葉を習うときに最初に目にする、五十音表やアルファベット表。そうした当たり前のものに潜んでいる不思議さについて考える。【抜粋】びっくりしました。それまで何度も英和辞典を引いていながら、そんな見て明らかなことに、全然気づかなかったことに気づいたのです。分かるようで分からなくなりました。

＊「トイレ同盟」2009-09-17：【解説】他人がそばにいと緊張しておしっこができない二人の少年。中学に進学した今、新しい環境の中でどうやってトイレ問題を解決するかが緊急の課題だ。諦めかけた友達を励ます少年のちょっとナーバスな気持ちと、付き合いかけた女の子への淡い恋心を描く。【抜粋】始業寸前に二人でトイレにすることが何回か重なって、ぴんと来た。ちょっとうれしかった。涉もぴんと来たと言った。

＊「街の天使」2009-09-18：【解説】ある街の路上や公園で男性の客をとっている少年の一日。いくらのお金が手に入ったが、パンツ一枚が減った。そのいきさつと過去の回想。性についてのダークな面とライトな面の両方を活写する。【抜粋】小学生だった明は、その男がなぜ男子生徒の鞆ばかりを盗んでいたのか、いろいろ想像してみた。その事件について語る町の人びとの口調は、ためらいがちで歯切れが悪かった。変態とか、頭がおかしいとか、変質者とかいう言葉を盛んに聞いた。そうした言葉を耳にするたびに明は、ドキドキした。

＊「聞こえてる？」2009-09-19：【解説】さまざまな「見えない障害」について紹介する一方で、健常と障害という区別への疑問にも触れる。特に、難聴者として生きることの不自由さとちょっと笑える話に焦点が当てられる。健聴者に対し、耳を大切にしたいというメッセージも込められている。【抜粋】もうどうでもよくなってくる。聞いている。聞こえている。聞いている。聞こえている。そのうちに、聞こえてくるのが言葉ではなく、音、音楽、旋律のように感じられてくる。そして意識が薄れる。

＊「輝きの日」2009-09-20：【解説】在日の日系外国人の一家をめぐる物語。日本語が得意で社交的な妹と、日本語ができない内向的な兄。経済的な事情で二人とも小学校に通っていない。兄は、入院した父親の口から、曾じいさんの語ったという生と死にまつわる話を聞く。死が間近に迫った父親は、死への恐れではなく、生き続けるための力を、ある「印」によって息子に贈る。【抜粋】「朝、目を覚ますと、周りのものすべてが黄金色に光り輝く日が来るんだ。まばゆさに目を細めるほどの、光が全身を包む」

＊「ビッグ・ブラザー」2009-09-21：【解説】ある飲屋である男から原稿を手渡された編集者。事実を裏付けるデータが皆無で、単なる妄想の産物として片付けられそうな原稿の内容が紹介される。根も葉もない話だが、昨今の状況を考慮すると、無きにしも非ずとも取れないこともない、超監視国家の実現をめざす「グランドデザイン」の可能性を感じさせる不気味な話。【抜粋】データベース作成にあたっては、玉石混交であって構わない。さらに真偽は問わないことが鉄則らしい。質よりも量。とにかく数多くの情報が集められ、「名寄せ」作業による分類と蓄積が行われる。

＊「夏の制服」2009-09-22：【解説】佐久間一家の息子の無断外泊をテーマにした三部作の第一弾。父親である秀行の視点から、親子関係、性、夫婦関係について、心理と状況の両面から描写される。性に関する父親の感情は、息子だけでなく自分にも向けられている。【抜粋】まず廊下のつき当たりにある男子トイレを調べた。次にその階の店舗を一つ一つ覗いてみたが、啓一はどこにもいない。エスカレーター脇の全館案内図をにらん

だ。館内放送で呼び出してもらおうと思い立ったところで、エスカレーターで降りてくる啓一の姿をみとめた。一瞬、啓一は前に立つ二人連れの女性の後ろに隠れるような動作をした。

＊「煙草のけむり」2009-09-23：【解説】佐久間一家の息子の無断外泊をテーマにした三部作の第二弾。視点は、母親である有佳。従来の男女の役割、性差に対して批判的な考えを持つ女性として描かれている。息子と同じく、男の子から男になりかけている少年たちへの有佳の感情は複雑である。【抜粋】小学二年生のとき、実家近くの公園のトイレで、同じ小学校に通う四年生の男子児童からいたずらをされたときの記憶がよみがえる。額と鼻、首筋、手のひらが汗ばんでくるのを感じる。やっぱり、引き返そう――。

＊「プチプチ」2009-09-24：【解説】佐久間一家の息子の無断外泊をテーマにした三部作の第三弾。息子の啓一を、その妹の茉莉の目からとらえている。兄妹のやりとりを点描することで、一般社会における性に関する通念が揺らいでいるさまが暗示される。【抜粋】「お兄ちゃんのこと、かっこいいって言っている友達がいるんだけど――」。わたしが四年生のときに、そう言ったら、「ぼく、女の子には興味ない」って、お兄ちゃんがはっきり言ったから、「そうだよね」なんて、何となく返事したけど、あれってよく考えると、すごく変なことだった。

＊「文字の顔」2009-09-25：【解説】普段は書かれている内容や情報が優先されるために、見えていながら見えていない存在である文字。その文字の「顔」にまで、時には目を向けてみようと呼びかけている。「普段は見えないものたち」への愛をつづった文章。【抜粋】読めない。でも、あの人の書いたものと分かる。こんな夢のようなことが、他の言語でもあり得るのでしょうか。日本語の豊かさ？ 美しさ？ 言霊？ まさか。そんな抽象的なことではないと断言できます。

＊「小品集リスト（その1）」2009-09-26：【解説】2009年9月4日から25日までに掲載した22作の小品を紹介した記事。【抜粋】いったん書かれた作品は作者の手から離れてしまう、と言われることがあります。作者も、その作品の読者の一人にすぎなくなってしまうという意味でしょうか。作品を読み返してみると、確かにそんな感じがします。【注：本記事です。】

09.09.27-09.10.23 小品集（2）

※ブログタイトル：「小品集」

※ 2009 年 9 月 27 日から 10 月 23 日までに投稿した 28 作の小品を紹介した記事です。小品だけを収めていくという当初の計画から外れ、連載と連作を書いてしまいました。

＊「おばちゃん」2009-09-27：【解説】自分の父親に近い年齢の男性とその老母の家で一緒に暮らしている青年が主人公の、ちょっと変わった家族小説。【抜粋】そんな二人を智樹は似ていると思う。同時に、自分とも似ていると思う。自分にも、友達や親友と呼べる人がいない。他人が頻繁に訪れる家だったら、こんなに長くこの家で二人と一緒に暮らしていなかっただろう。だいいち、あの人も十年以上生活を共にすることもなかったにちがいない。この家に来るまでは、その人とひっそりと慎ましい日々を送っていた。

＊「分からない（「おばちゃん」PART2）」2009-09-28：【解説】年上の男性とその老母の家で一緒に暮らしている青年が、自分の実家について男性に語るたびに、その男性は分からない家庭だと口にする。他人から見ると、青年の実家も不思議な家庭らしい。【抜粋】その人と出会って間もないころ、「ぼく、お父さんと一緒に家でご飯を食べたことが一度もない」と話すと、その人は「嘘だろう」と決めつけた。本当だと言い張ると、「君のお父さんについて、もっと知りたい」と興味を示した。母子家庭で育って、父親についての記憶が一切ないと、その人が自分の生い立ちを語ったのは、そのときが初めてだった。

＊「アクシデント（「奪還 -1-」）」2009-09-29：【解説】農業を基本とする生活共同体であるコミューンから、二人の少年が脱走する。親に伴う形で、自由を奪われた身となっている子どもたちを支援する EX というグループに助けられ、小田真人はコミューンに残った弟のことを気に掛けながらも逃走を決意する。【抜粋】このままじゃ、人間ではなくなってしまう。コミューンに長くいる人たちや子どもは、半分は人間、半分はロボットみたいだ。コミューンを取り仕切っているやつらだけが、ぎらぎらしている。あれも人間じゃない。かといって、ロボットでもない。人食い鬼——。コミューンに来る前に

やっていたゲームに出てきた怪物を、真人は思い出した。

＊「了解（「奪還 -2-」）」2009-09-30：【解説】EXの支援を受けて祖母の住む千葉県にある団地に逃げた真人を追って、コミュニケーションの関係者が団地を訪ねてくる。祖母は110番通報をする。【抜粋】制服姿の警察官二人のうち、一人が祖母とG友の会の男たちの言い分を聞いた。双方の間で、「親権」、「拉致」、「子どもの人権」、「児童虐待」、「ネグレクト」、「誘拐」、「G友の会」、「洗脳」、「優良団体」、「県会議員」といった言葉が飛び交う。

＊「親権（「奪還 -3-」）」2009-10-01：【解説】コミュニケーションに住む両親が直接、祖母の住む団地に向かっているという情報が入る。親権者である両親が訪ねてくれば、真人はコミュニケーションに戻るしかない。真人は団地を離れる意思を祖母に伝える。【抜粋】「おれ、ここを出る。ここにいても、結果は見えているじゃないか」と真人は言って、居間の棚に並んでいる冊子を指さした。「親権だろ？ お父さんとお母さんが来たら、親権があるって言って、おれを連れて帰るんだ。警察も、自治会も、EXも、どうしようもない。ただ、見てるしかない——。そうだなんだろ？」

＊「熱（「奪還 -4-」）」2009-10-02：【解説】団地を出た真人は高熱を出す、EXの協力者の家にかくまわれて看病される。一方、真人を連れ戻すために団地を訪れた両親に対して、祖母は毅然とした態度で臨み対決する。【抜粋】「お黙りなさい」と、祖母が弁護士をにらみつけたという。「ちなみに、わたしはこちらの弁護士さんとは、お話しする意思は全然ありません。あなたが一言でも喋ったら、一一〇番通報します。あなたは不法侵入者ということになりますから。いいですね、本気ですよ。廊下じゃなくて、ここに座っていただけるだけでも感謝しなさい。さあ、ご用件を聞きましょうか」

＊「事実（「奪還 -5-」）」2009-10-03：【解説】コミュニケーションを出て、さらに祖母の家を出た真人は、自分の置かれた立場の意味を理解しようと努める。これから先、EXのメンバーの住むアパートを転々とするしかないのか？【抜粋】「あいつはあいつの置かれた立場を理解したうえで、行動している。おまえは、自分の置かれた立場が分かっていない」「そんなことない。おれだって、考えている」「じゃあ、ここを出ろよ」

＊「考える（「奪還 -6-」）」2009-10-04：【解説】EXの関係者の謎めいた青年中川大地によって、真人はあるアパートに連れられて行く。そこで一人で生活することになるが……。【抜粋】「あの人は、過去に心に傷を受けた経験があって、それがまだ治りきっていないの。だから、初めて接する人には、あの人は頭がおかしいんじゃないかって思われることがとても多いってこと。難しい？」

＊「部屋（「奪還 -7-）」」2009-10-05：【解説】中川大地によって連れて来られた部屋で、一人きりで生活している真人。大地の過去を知ろうとし、恐ろしくも悲しい事実をつかむ。やがて大地が真人を迎えに来る。【抜粋】「おまえ、裸になれ」。ふいに言われた。唐突な言葉だ。大地が口にする则それほど不自然に感じられないのが、不思議だった。

＊「眠る（「奪還 -8-）」」2009-10-06：【解説】大地と共同生活をするようになった真人は、大地の不可解な一面を知ることになる。戸惑う真人は、大地を理解しようとするが、とうてい理解できない部分があると悟る。【抜粋】初めて見る笑顔だった。泣いているようにも見える。今、この人は、無防備な姿をおれの前にさらしている――。真人は幼児か赤ん坊を相手にしているような錯覚に陥った。抱きしめたくなくなるような、いとおしさを覚えた。

＊「逃げる（「奪還 -9-）」」2009-10-07：【解説】真人が理解できないでいる現在の自分が置かれた状況とこれから先の展望を、大地は大地なりの荒っぽいが現実的なやり方で示す。それは恐怖に満ちた体験だった。【抜粋】「おまえ、この国で一番強いボディガードをつけているやつって誰か、分かるか？」また唐突な質問をされた。真人は、毎日のニュースで出て来る政治家の名を三つ挙げた。「違う」。大地は、そのどれに対しても否定した。考えた後、ある公安関係の組織のトップの要職を口にした。「違う」

＊「決行（「奪還 -10- 最終章）」」2009-10-08：【解説】五カ月半ぶりでコミュニケーションのある町に真人は戻る。目的は、弟の雄詞を奪還すること。数日かけてコミュニケーションの動静を探り、計画の決行に踏み切るが……。【抜粋】コミュニケーションから雄詞を連れ出すことにより、うちの家族は完全に破壊される――。雄詞は母親と一体化している。雄詞を奪うことで、おれはこの家族を壊し、父親と母親に復讐しているのではないか。そんな唐突な思いにとらわれ、真人ははっとした。

＊「奪還・ダイジェスト」2009-10-09：【解説】「アクシデント（「奪還 -1-）」」2009-09-29から「決行（「奪還-10- 最終章）」」2009-10-08までの「解説」と「抜粋」と反省文を収録。【抜粋】小田真人と中川大地という個性は、まだ自分の中に生きている気がします。いつか、別の小品として、同名で登場させてやりたい。そう思っています。特に、謎の多い人物として書いた中川大地の視点から、その生き様（＝いきざま）を描いてみたいです。

＊「空前の「純文学」ブーム（前編）」2009-10-10：【解説】エッセイ。現在、かつてない

ほどの大きな規模で「純文学」ブーム、または「純文学」復興運動が起きているという説を展開する。また、ケータイ小説についても持説を述べる。【抜粋】毎日、数えきれないほどの「純文学」の書き手たちが、数えきれないほどの作品を書いているのです。いえ、海外の話ではありません。この国で起きている現象であり、現実なのです。嘘ではありません。さて、純文学とは何でしょう？

＊「空前の「純文学」ブーム（後編）」2009-10-10：【解説】現在、出版界で「純文学」を上梓しにくくなっている状況を述べ、新しい「純文学」の出現に期待を寄せ、その書き手たちにエールを送る。【抜粋】「作為」「演技」「物語性」とは、「かつて純文学の規範とされた私小説と心境小説が排除しようとし排除し切れなかった要素」、つまり「言葉で書かれたものである、あらゆるテキスト＝フィクションにこびりついている属性」です。こうしたややこしい話も、どうでもいいでしょう。

＊「残された携帯電話」（「ディスタンス-1-」）2009-10-11：【解説】不可解な自動車事故で亡くなった弟の持ち物を警察から受け取った姉。弟の住んでいたアパートを引き払い帰郷しようとするが、遺品である携帯電話に登録されたデータが気になる。【抜粋】携帯電話の電源を入れる。世田谷署で受け取った時には、電源は切られていた。メールはない。警察が削除したのか、そもそも弟がメールをあまり使っていなかったのか、読んだメールをこまめに削除していたのか。「電話帳検索」を出し、登録された番号をざっと見ていった。女気がない。アドレス帳と同じ印象を受けた。

＊「オレンジ色の記憶」（「ディスタンス-2-」）2009-10-12：【解説】亡くなったばかりの弟が住んでいたアパートの部屋で、引っ越しのための荷造りをしている姉。年子で仲の良かった弟をしのび、その衣服を身に着けてみる。幼かったころの記憶がよみがえる。【抜粋】屈んで放尿する癖は、姉のわたしやほかの女の子たちばかりと遊んでいたことから身に付いたのかもしれない。注意する年長の者もいたが、光太はしゃがんでするほうが落ち着くらしく、一向にその習慣を変えようとはしなかった。

＊「染まる」（「ディスタンス-3-」）2009-10-13：【解説】弟の自動車での事故死について、担当の刑事から詳しい説明を受けた姉。事故の経緯は分かっても、事故に至るまでの事情は謎のまま。このままでは帰郷する気にはなれない。東京に残ろうと決心する。【抜粋】「あちらさんとしては、大金を払わなければならない立場にありますから必死です。失礼で酷な言い方になりますが、それが商売なんです。病院でH I Vの抗体検査の結果まで調べているんですから――。現在では、あらゆる事故で、あの種の検査をするのが常識になっています」

＊「つながり」（「ディスタンス-4-」）2009-10-14：【解説】初対面の男性同士の同乗する車が事故を起こし、二人とも亡くなった。警察は二人のつながりと身元が判明しない一人について捜査する。犠牲者のうちの一人だった少年の姉は、警察の調べた結果には満足できない。知りたいことはほかにある。【抜粋】「でも、おれ、そいつとは一回会っただけですよ。そいつのケータイにおれの番号があったから、つながりを疑われたとしか思えないんですよ。絶対に、警察はこういうデータを集めています。一度入手したデータは破棄しないと考えるほうが賢明でしょう」

＊「大丈夫」（「ディスタンス-5-」）2009-10-15：【解説】亡くなった弟の利用していた美容室を訪ね、弟と同じ髪型にしてもらう姉。なぜ自分がそこまで弟への同化に執着しているのかを意識していない、危うい精神状態の彼女を気遣う友人。【抜粋】すらすらと嘘が出てくるのが快い。弟と並んでカメラに収まるという考えも楽しい。空想ってわくわくする。鏡の中で美容師もわたしも、声を出して笑っている。楽しそう。自分のことなのだけれど、他人事みたいにも思える――。大丈夫だ。

＊「変わる」（「ディスタンス-6-」）2009-10-16：【解説】美容室で男の子っぽい髪型にし、亡くなった弟の衣服を身に着けて夜の街をさ迷う姉。男の子になりきろうと必死の努力をする姉の、哀しくもあり滑稽でもある行動。【抜粋】すがすがしい。男同士って、何てさっぱりしているのだろう。わたしはこの発見を喜ぶ。周りの男性たちがみんな自分の仲間のような気がする。そんな幸福感に浸っていると、その喜びをぶち壊しにするような不穏な気配が目の前に迫ってくるのを感じた。

＊「視線」（「ディスタンス-7-」）2009-10-17：【解説】男同士が視線を通じて、さまざまなメッセージとサインを交わす街。亡くなった弟の格好をして、その街に出掛ける姉。そこで繰り広げられている視線ゲームに戸惑い魅惑される。【抜粋】この街は違う。男が男を見る目。男が男を装ったわたしを見る目。通りを歩いている男同士が交わす視線。すれ違いざまに送り合う目線。何かが、どこかが違う。この国の文化と風土の中で、公（おおやけ）の路上を舞台にして、こんな濃密な視線のやり取りが当たり前のように行われている場が、ほかにあるだろうか。

＊「踏み出す」（「ディスタンス-8-」）2009-10-18：【解説】男装をして、男ばかりが視線を交わす街に来た二十歳の女性。路上で声を掛けられ、自称大学生とコーヒーショップに入る。男の子に見られようと努めているが……。【抜粋】「しょっちゅう、こんなことをしてるの?」「こんなことって?」男は一瞬見せたむっとした表情を素早く隠した。「いきなり、通りで声を掛けてきてさあ」こういう時に弟が口にしようとした話し方を想像して、

それを真似る。「しょっちゅうしているように見える?」「見えるよ。現にしてるじゃん」

＊「出発点」(「ディスタンス-9-」) 2009-10-19 :【解説】香織は自称大学生の松長に男装を見破られる。動揺してコーヒーショップから外に飛び出したものの、中年の男にからまれる。後を追ってきた松長に助けられ、いったん男ばかりの街を去る。翌日、松長に食事に誘われた香織は、遊び慣れた松長を利用しようとする。【抜粋】「松長さんって、『ワル』なんですか?」「『ワル』の定義にもよりますね——。そんな考え込まないでください。ジョークです。笑ってください」。わたしは無理に笑みを作った。「わたし、男の子に見えるでしょうか」「見えます。これはジョークじゃなくて、マジに」「でも、きのう、あの時にどうしてわたしが女だと分かったんですか」

＊「隔たり」(「ディスタンス-10-」) 2009-10-20 :【解説】自分を女性だと見破った松長という男と一緒に、男たちが視線を交わす夜の街に出掛ける香織。男に見えると松長に言われても、不安が残る。松長に気を許し始めた香織は、男装している理由を打ち明ける。【抜粋】「男の人同士用のケータイの出会い系サイトとか掲示板とかも、あるそうですね」「もちろんあるさ」「松長さんも利用するの?」「たまに覗く程度かな。でも、ぼくは直接、こういう場所で出会うほうが好き」「どうして?」「掘り出し物が見つかる可能性が高いから」

＊「符合」(「ディスタンス -11-」) 2009-10-21 :【解説】香織は松長に伴われて、生前の弟がよく来ていた「ディスタンス」という店に入る。ここでも男同士の視線のゲームが繰り広げられている。そこで弟の仲間だったという三人の少年に会う。死へのドライブに出掛ける直前の弟の様子を聞かされるが……。【抜粋】「君って、本当にヒカルの子の兄弟?」。三人連れの少年たちが寄って来て、そのうちの一人が聞いてきた。とっさの判断ができかねて、わたしは松長の顔を見た。とぼけた表情でそっぽを向いている。いかにも松長らしい。「そうだよ。おれのほうが兄」と、わたしは居直って答える。

＊「幽霊」(「ディスタンス -12-」) 2009-10-22 :【解説】亡くなった弟の住んでいたアパートを引き払い名古屋の実家に戻った姉。香織(かおり)と光太(こうた)という年子だった事実を受け止められず、カオルとヒカルという幻想に侵されつつある日々を送っている。母親の受けた心の傷もまだ癒えてはいない。時折、幻聴となって現れる弟の声が、香織を徐々に癒やし、元の状態へと戻していくのか?【抜粋】やめろ。お姉ちゃんは、か・お・り。ヒカルはもういない。カオルも、もういない。カオルは、ヒカルの代わりにあの街とヒカルの仲間たちにお別れに来た幽霊だったんだ。

＊「ディスタンス（ダイジェスト）」2009-10-23：【解説】「残された携帯電話」（「ディスタンス-1-」）2009-10-11 から「幽霊」（「ディスタンス-12-」）2009-10-22 までの「解説」と「抜粋」と反省文を収録。【抜粋】各小品は一種の風俗小説としても読めるように書きましたが、中にはミステリー、サスペンス、社会派小説、耽美小説、幻想小説、実験小説、心理小説、恋愛小説、家族小説、または哲学小説的な風味に仕上げたつものものもあります（ただし、連作として個々の小品をダブらせて読むのではなく、一編一編を完全に独立した作品として読んでいただいた場合の話ですが――）。

＊「小品集リスト（その2）」2009-10-24：【解説】2009年9月27日から10月23日までに投稿した28作の小品を紹介した記事。【抜粋】今回のリストには、「奪還」という連載と、「ディスタンス」という連作が収録されています。連載はストーリー重視、連作はシチュエーション重視の姿勢で書きました。本来はストーリーよりもシチュエーションに重点を置いて書くスタイルが好きなのですが、何だか訳の分からないスタイルの連載と連作になってしまいました。【注：本記事です。】

09.10.25-09.11.14 小品集（3）

※ブログタイトル：「小品集」

※2009年10月25日から11月14日までに投稿した28作の小品を紹介した記事です。

＊「仮面と人形（仮面編）」2009-10-25：【解説】エッセイ風味の小品。お面や仮面に代表されるさまざまな「ぺらぺらなもの」について、「深読み」という少々ひねった文章。内容は割とマジ。【抜粋】かつら、お面、仮面、お化粧、表情、顔つき——こうしたものは、さきほど書きました「表象の働き」とか「象徴の仕組み」という言葉でひっくりめることができそうです。要するに、Aの代わりに「Aではないもの」を用いることです。ぶっちゃけた話が、何かに「化ける」ことです。もう少しお上品に言うと「装う」ことです。

＊「仮面と人形（人形編）」2009-10-26：【解説】前回の続編。人間が自分に似せたものをやたら作るのは、どうしてなのか？ その不思議な現象について考えた文章。エッチな話も混じっています。【抜粋】お人形さんの起源は、子どものおもちゃだけでは、説明できないことが分かりますね。もっと、深いというか、恐ろしいというか、言葉にしにくい感情が込められているのではないか。そんな気がします。ですから、人は人形（＝にんぎょう・ひとがた・ひとかた）に対して、「ひとかたならぬお世話になっております」と、一言お礼を述べてもいいのではないのでしょうか？

＊「あなたなら、どうしますか？」2009-10-27：【解説】かつてミステリーを書こうとして勉強中に知った、驚くべき事実。誰も逃れることができない恐ろしいものとは？【抜粋】「このバカタレ！」と言うお叱りの声が聞こえるようです。でも、本気です。反抗しちゃ、駄目です。一つ間違うと反抗から犯行へと即座に発展して有罪になってしまうんです。あくまでも、とりあえず、おとなしくしておいて「ハンコ」ポンポンペタペタ＝ペーパーワーク、に身をゆだねるしか、ないんです。

＊「やっぱり、ハンコはえらい（続・「あなたなら、どうしますか？」）」2009-10-28：【解説】ハンコがなぜ偉いのか、に徹底的にこだわったエッセイ的風味の小品。かなりマジ。他人事ではない話。【抜粋】要するに、「伝染るんです（うつるんです、と読みます、念のため）」。恐ろしい言葉が出てしまいました。とうていタミフル（「民振る」とか「民降る」とか「民 full」とか「民 fool」とも書きます）なんかじゃ、太刀打ちできません。吉田さんのお孫さんも、官僚と役人の「伝染るんです」には勝てませんでした（お孫さんでは役不足が過ぎました）。たとえ戦車を繰り出しても、太刀打ちできないでしょう。

＊「な、いいだろう？」2009-10-29：【解説】おとぎ話。尻尾のないおサルさんに何かが起きて、ホモ・サピエンスになってしまった。その出世物語を風刺的に描く。【抜粋】この魔法もどきには、おまじないの文句があります。しるしるちしる、しるかけて、つばつける（広辞苑あたりで「しる・知る・領る」「しる・汁」「マーキング」「しるし・印・標・徴」「唾を付ける」を引いてみてください、ハンコも知も地も血も出てきますよ）。なかなか含蓄のある文句です。こうなると魔法もどきじゃなくて、立派な魔法です。

＊「テラ取り物語（続・「な、いいだろう？」）」2009-10-30：【解説】おとぎ話。ホモ・サピエンス、つまりヒトという種（しゅ）が犯している、地球規模での大ルール違反についての物語。【抜粋】ノー・モア・ノーズ（No more 'no's）。脳はもう結構ざんす（＝脳に悪いことばかりしようぜ）。でも、ワナ・ノー・モア（Wanna know more）。もっともっ

と知りたいのだ。これは、ヒトに仕掛けられた「欲望という名のワナ（やっぱり、ここでも名が付いて回るんですよー、どうあがいても無理なんです）」かも知れない。ワナは電車のようにとはまらないのでしょうか。滅亡へのワナ。

＊「宇宙法廷審理中（１）」2009-10-31：【解説】尻尾のないサルの一種の脳内で異変が起きた。宇宙法廷が、この異変の危険性を察知した。実害に至る前にコンピューターを使用したシミュレーションによって、脳内異変事件が審理にかけられている最中であるという珍説。【抜粋】原理はきわめて単純です。何かの代わりに「その何か以外のもの」を用いる。つまり、代用する。これだけです。その最たるものが言葉です。たとえば、「花というもの」を「花という言葉」で代用する。または、「〇〇という言葉」を「CECEという言葉」で代用する。そんな仕組みです。

＊「宇宙法廷審理中（２）」2009-11-01：【解説】脳内異変によって人類が獲得した仕組みのうち、仮定と比喻に焦点を絞る。【抜粋】個人的な意見なのですが、仮定と比喻の二つは、人間にとって究極の武器だとかねてから思っております。簡単に申しますと、「もしも〇〇だったら」と「△△みたい」の二つがそろると、人間は最強の武器を手にしたのも同然だということです。

＊「宇宙法廷審理中（３）」2009-11-02：【解説】シミュレーションは継続している。肥大した脳を持ってしまった人類は、地球上の生き物たちに共通する、ささやかな縄張り行動を、地球の存続を脅かしかねない途方もないレベルにまで引き上げてしまった。【抜粋】以上のことをまとめてみましょう。「地（ち）」⇒「知（ち）」⇒「血（ち）」。こんな具合にシンプルな図式になります。

＊「宇宙法廷審理中（４）」2009-11-03：【解説】目下シミュレーションの只中にある人類が、宇宙法廷の審理の成り行きを知る方法はある。胸に手を当てれば分かるはずだ、と説く最終章。【抜粋】その錯覚の根底にあるのは、名付ける⇒言葉を作る⇒言葉を「事・物・現象＝森羅万象」に与える⇒言葉で森羅万象を詳細に分ける＝分類する⇒森羅万象が分かった＝理解したという錯覚に陥る⇒森羅万象を支配＝征服したと思いたがる、あるいは思い込むという、図式ではないかと思います。

＊「コロニー（前編）」2009-11-04：【解説】拠点病院を取り巻くように住んでいる男性たちに、週２回、ボランティアでお弁当を配っている女性が主人公。彼女が運転し、配達は知的障害のある中年の男性。女性は過去に受けた性的虐待により、重度の男性恐怖症に陥っている。カウンセラーの勧めを承諾し、あえて男性たちを相手にした作業に取り組

んでいる。【抜粋】だいたいこんなやりとりで終わる。お弁当の届け先である相手のほとんどが、女性に興味がないという。だから、わたしはこの仕事を引き受けた。それでも、男性と向かい合うと心の奥で大きな抵抗を感じる。今のわたしの敵は、その抵抗感だ。

＊「コロニー（後編）」2009-11-05：【解説】自分と同じような悩みをかかえる女性たちとの集会に参加している主人公は、ちょっとした偶然から、自分がお弁当を配っている男性たちの同様の集会を傍聴することになる。社会復帰を目指す主人公の心の緩やかな移り変わりを描く。【抜粋】「わたしはわたしなのに、セックスがからむと、わたしじゃなくて、一人の女だという意識が前面に出て来んです。で、セックスの間は、自分ではなくて女の代表選手という感じで振る舞ってしまう」

＊「女装文学登場」2009-11-06：【解説】文学史における、ちょっと気になるお話を思い出しながらつづったエッセイ。【抜粋】女装が女性運動に火をつけちゃった。つまり、女装が女性運動のさきがけとなった。そんな話なのです。やっぱり、ややこしいし、屈折していますよね。

＊「女心を男が歌う国」2009-11-07：【解説】大学生時代に、ある米国人から指摘されたことを思い出し、もしもそれが本当ならば日本はよほど「特殊な」国ではないか、と戸惑っているエッセイ。【抜粋】以上は昔の話ですので、最近、米国生まれの方に確かめてみると、やはり「あり得ない」とおっしゃりました。本当なんですか？ それこそ、「あり得ない」という感じがして、アンビリーバボー状態なんです。

＊「複数形のわたし」2009-11-08：【解説】前々回と前回のエッセイの連作。性差だけでなく、ヒトがTPOに応じてさまざまな役割を果たしている状態を常態とみなすのがテーマ。【抜粋】人をメスとオス、男性と女性、子どもと大人と二つに分けるのは、やっぱり窮屈です。なぜなら実際には、人間はもっと多面的な存在として、日々の生活をいとなみ、人生を送っているはずだからです。

＊「小説と性」2009-11-11：【解説】結果的に4回の連作となったエッセイの最終回。この連作が、翌日から書く予定の小説の助走＝序奏であったと説明している。【抜粋】以上の小説たちにおける書き手は、複数性をそなえたヒトです。一方、小説の登場人物は、複数性をそなえたヒトをモデルに書かれています。ヒトである書き手がどのようなキャラクターを書いても、それはしょせんヒトの変種でしかないようです。

＊「アセクシュアリティ（１）」2009-11-12：【解説】小説。一酸化炭素中毒による心中を図った男女。亡くなった青年の心理カウンセラーだった語り手が、やりきれない思いから過去を回想し始める。【抜粋】「そう、人間がかなり嫌いみたいです。度が過ぎていませんか？ 自分が人間だということも許せないような感じ。個人にそなわっている人格とか人間性とかいうレベルだけじゃなくて、生き物としての人間が嫌いみたい。匂いとか、汗とか、肌に触れるとか、容貌や体つきというレベルです」

＊「アセクシュアリティ（２）」2009-11-13：【解説】臨床心理家としての仕事を辞して、後進の指導に当たっている語り手。パートタイムで働いている塾で、若い心理学者及川と出会う。【抜粋】未成年者である時期に受けた性的虐待が、その人のセクシュアリティにどのような影響を及ぼすか。セクシュアリティとは先天的であったり自発的なものであるだけではなく、後天的であったり他者による働きかけによって左右される場合も多いのではないかと。セクシュアリティの選択が、外的な要因の結果であって、内的な要素の発露ではないケースも少なくないのではなかろうか。

＊「アセクシュアリティ（３）」2009-11-14：【解説】語り手は、女性と心中した内山の少年時代と、10年後に再会したさいの変貌ぶりを描く。【抜粋】「あころも、よくそんな気がしていたんですけど、人間は心と体が一緒の時と、離れている時があると思うんです。ぼくは、個人的には、離れている時のほうが好きです。できれば、体は要らない。別に無くてもいいんです」

＊「アセクシュアリティ（４）」2009-11-14：【解説】語り手は、女性と心中した内山の少年時代と、10年後に再会したさいの変貌ぶりを描く。【抜粋】「あころも、よくそんな気がしていたんですけど、人間は心と体が一緒の時と、離れている時があると思うんです。ぼくは、個人的には、離れている時のほうが好きです。できれば、体は要らない。別に無くてもいいんです」

＊「アセクシュアリティ（５）」2009-11-14：【解説】語り手は若い心理学者の及川と対話する。かつてのクライアントだった内山と自分自身とを重ね合わせながら、語り手はセクシュアリティについての思いを語る。【抜粋】「その種の考え方は、分からないわけではありません。ただ、性的虐待者に口実を与えかねない危険性もはらんでいます」

＊「小品集リスト（その３）」：2009年10月25日から11月14日に書かれた21の小品の解説と抜粋です。【注：本記事です。】

『うつせみのあなたに 第9巻』の内容

09.09.04～09.12.11

＊「お墓参り」2009-09-04：「恵」というハンドルネームを使って、小説とエッセイを中心にした「小品集」2009-09-04～2009-11-14 を開設したのと同じ日に、性懲りもなく、またもや新規に開設した「うつせみのあなたに」2009-09-04～2009-11-19 というタイトルのブログの第一弾です。これより前に作って潰した「うつせみのあなたに・・・」2009-08-11～2009-09-01 の続編みたいな感じです。「げん・現-3-」【ブログ不投稿】と同じ内容です。「不投稿（＝不登校）記事」を、無理やり「投稿＝登校」させたことが見え見えの元氣のない内容です。

＊「言葉とうんちと人間（言葉編）」2009-11-11：「小品集」2009-09-04～2009-11-14 を削除・閉鎖する3日前に書いています。かつて書いた記事を寄せ集めて加筆したものです。バラバラだったものをテーマ別に編集したと言えなくもないですが、要するに二番煎じのパッチワークです。なぜ、「言葉とうんちと人間」なのかに対しては、次のように要約できます。人間とはごちゃごちゃぐちゃぐちゃの「主体」、言葉とは人間から出た抽象的な「こと・事・言・客体」であるごちゃごちゃぐちゃぐちゃ、うんちとは人間から出た具体的な「もの・物・物質・客体」としてのごちゃごちゃぐちゃぐちゃである。キーワードは、「阿吽・あーん・aum・om」「生死」「あくび」「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」「出る」「何か」「音（おん）」「自分」「他者・世界」です。直接書かなかったキーワードは、「ジャン・ピアジェ」「レフ・ヴィゴツキー」「ジャック・ラカン」です。

＊「言葉とうんちと人間（うんち編）」2009-11-12：言葉とうんちが、それぞれ口と肛門という穴から出てくるものであるという単純な話から、論を展開していきます。言葉とうんちが「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」である以外に、どんな似た点があるかをめちゃくちゃこじつけています。めちゃくちゃながらも、本気で論じています。本気で「与太話」を語るという「戦略＝企み」に意識的になっています。間接・直接的に、発達心理学の諸説やモデルに対して批判をしています。キーワードは、「出る」「あらわれる」「ぶかぶか・浮遊・運動」「宙ぶらりん・偶然性」「いきむ・いき・息・生き」「赤ちゃん」「うんちへの偏愛」「いないいないばあ」「自他未分化」「他者・世界」「離れる・隔たる」です。直接書かなかったキーワードは、「フロイト」「ジャン・ピアジェ」「レフ・ヴィゴツ

キー」「ジャック・ラカン」です。

＊「言葉とうんちと人間（人間編）」2009-11-12：同日に掲載したシリーズの最終回です。「出た」と「出した」と「あらわれた」と「起こった」と「出合った」の違いにこだわり、ヒトにおけるフィクション創出という大きな問題に迫ろうと努めています。そのさいに「演じる」と「見る」という動作・仕草・行為が重要なカギとなっていると指摘しています。最後は、話をまとめるような振りをしながら、まとめてしまわないように気を配っています。「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」が、まとまるわけがありません。せいぜい、かきまわすくらいしかできません。キーワードは、「離れる」「距離感の演出」「知覚」「作る・捏造する」「分かる・分ける・てなづける・知る・名付ける」「いないいいないばあ」「疑似体験」「生死」「快・不快」「膾（陰門）」「出合う・出合い」「愛」「息・呼吸」「フロイト」。キーフレーズは、「あるものの代わりに『あるもの以外のもの』を用いる」です。

＊「代理だけの世界（1）」2009-11-13：「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる。つまり、代用する、という「代理の仕組み」に徹底的にこだわろうとするシリーズの初回です。まず、知覚、情報、信号、データ処理という言葉を用いながら、「代理の仕組み」を説明しようと努めています。その説明が、あくまでも「説」であり、フィクションでしかあり得ないことを読者に訴えています。こうしたスタンスが不毛やペシミズムに至るしかない点にも触れています。一方で、ヒトとして生きる限り、そうした事態を避ける方便を身に付ける必要がある点にも触れています。権威主義的ないわゆる「科学」やいわゆる「理論」に対する不信感と嫌悪感を、やんわりと述べています。キーワードは「脳」です。直接書かなかったキーワードは、「脳科学」「情報理論」「科学哲学」「ソーカル事件」「アラン・ソーカル」です。

＊「代理だけの世界（2）」2009-11-14：「代理の仕組み」を「記述」という面から説明しようと努めています。「代理ごっこ」という語を用いて、ヒトが言葉に主導権を取られて、うろろうとさ迷うしかない絶望的な状況をつづっています。同時に、その絶望を希望として受けとめるしかないヒトという生き物の習性について、やけっぱち気味に言及しています。いや、悪態と罵倒というべきでしょうか。キーワードは、「言い換え・代理の入れ替え」「愚鈍」「正しい」「真実」「与太話」「ガセ」「でたらめ」「出まかせ」です。キーフレーズは、「あらゆる広義の言葉つまり代理はでたらめである」です。

＊「代理だけの世界（3）」2009-11-15：「代理の仕組み」があくまでもヒトの生み出した体系である一方で、ヒトの手から離れて作動する体系でもあることについて、さまざまな例や比喻やレトリックを用いて論じています。キーワードとキーフレーズは、「代理の独立・代理の自立・代理のひとり歩き」「代理があつてヒトがいる」「代理は、匿名的＝

中性的＝非人称的＝ニュートラル＝のっぺらぼう＝タブラ・ラサである」「代理に責任はない」「ヒトが代理に『依存しきっている＝頼りきっている＝いわば中毒になっている＝なしではいなくなっている＝主導権を握られている＝使われている＝もてあそばれている』」です。直接書かなかったキーワードは、「ソーシャル」「ステファヌ・マラルメ」「宮川淳」です。

＊「代理だけの世界（4）」2009-11-19：「代理の仕組み」について、これまでさまざまなブログで述べたことの集大成です。自己輸血＝自己引用しながら、「言葉＝語」の「織物＝テキスト」をつくりながら、そこにつづられた言葉たちに言葉の「でたらめ・でまかせ」ぶりを再演させようという、以前にも試みた言葉の饗宴を繰り広げようと努めています。まさに饗宴＝狂演＝狂宴状態です。読者が、深く考えることなく、あきれ顔で読み飛ばしてくれることを前提に書いたようなあっけらかんとした「あきらめ」が感じられます。直接書かなかったキーワードは、「ステファヌ・マラルメ」「ジャック・ラカン」「蓮實重彦」「高山宏」です。

＊ブログタイトル：「うつせみのあなたに」2009-11-27～2009-11-29

【※ 初めて書いたブログ記事「今日は誕生日」（2008-12-19 19:52:24 | Weblog）から順を追って再録しながら、それに現在の心境と視点からコメントを加える。そんなコンセプトと計画で始めたブログでしたが、まさに三日坊主で挫折してしまいました。たった三日間でしたが、ほぼ1年前を振り返ってコメントを書いているうちに、悲しさと空しさが募ってきました。こんなにしんどいものとは思いませんでした。なしくずしの死という事態を直視し、言葉にすることはつらくてできません。自業自得。いい勉強になりました。】

＊「1年前の記事を読んで」2009-11-27：初めてブログを書いた日の心境の回想と、その日に書いた「今日は誕生日」2008-12-19というタイトルの記事を再読した感想を述べています。キーワードは、「ネガティブに生きる」「ポジティブとネガティブ」「反意語」「人気ブログランキング」「にほんブログ村」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」「高山宏」です。

＊「今、考えていること」2009-11-28：「地図は現地ではない」2008-12-20の読後感を述べたあと、ブログの「初心者」だったころの文体を引用し、その後の文体の変遷について触れています。次に、今、考えていることについて語っています。また、抑うつ状態を緩和するために服用している薬による副作用が、文章を書きにくくするという点について、読者に理解を求めています。キーワードは、「絵文字」「（1回の投稿記事の）文字数制限」「（ブログの）文体」「レイアウト」「改行」「（文章上の）実験」「ルプレゼンタシオ

ン・表象（表象作用）・象徴・代理・再現前（再現前化）・再演」「表象文化論」です。

＊「社会復帰はあきらめました」2009-11-29：「消えてしまいたい指数」2008-12-21 を再読し、生活面での危機的な事態が変わっていないことを再認識し、落ち込んでいます。現状を打開するために社会復帰を目指そう、という気持ちを失っていると告白しています。泣き言です。また、自分が同じテーマをえんえんと繰り返しながら変奏し、あるいは二番煎じを行い、頻繁にブログをつくり潰し、また新しくつくるという馬鹿げた行為をしていることに嫌気がさしている心境をつづっています。キーワードとキーフレーズは、「親の年金」「預金の取り崩し」「野垂れ死に」「孤独死・孤立死」「地図は現地ではない」「何か」の代わりに「何かではないもの」を用いる」「パーソナルワンパターンギャグ」「進歩がない」「金太郎飴」「うつせみのうつお」「自己啓発書」です。

＊「代理だけ」【2009-11-30 に書いたブログ不投稿記事】：「言葉に振りまわされる毎日」2008-12-22 を再読し、現在の心境を述べたこの記事は、結局、投稿せずに終わりました。ブログも、つぶしました。つまり、削除・閉鎖しました。文体と目線について語っています。この記事を書いた数日前にニュースで報道されていた、事業仕分けに関する不愉快な出来事にも言及しています。「いずれにせよ、お金、欲しいですね。」という一文が切実に感じられます。「代理の仕組み」にこだわり続けている自分を評して、「こんなことを書いては、社会復帰は絶対に無理ですよ。」と嘆いています。キーワードとキーフレーズは、「だ・た・である調」「です・ます調」「ノーベル賞受賞者」「スパコン」「独立行政法人理化学研究所所長」「野依良治」「オリンピック・メダリスト」「記者会見」「虎の威＝としての賞とメダルという代理」「整合性対矛盾」「複雑対単純」「真偽」「正誤」「ヒトが判断できない仕組みになっていること」「ヒトにとって知覚＝感知＝認識＝意識できるのは、代理だけ」です。直接書かなかったキーワードは、「縄張り行動」「マーキング行動」「エソロジー」です。

＊「でまかせ・いず・む」2009-12-02：冒頭では、言葉と自分との関係について身辺雑記をまじえてつづっています。これから先どう生きていけばいいのか、と自問してもいます。書きながら考えるという自分流の書き方を実践しながら話を進めています。話は、「どのような言葉を選んで文章をつづるか」と「言葉の主導権を潔くみとめつつ書く」へと移っていきます。かねてから実行している「でまかせ」という言葉への姿勢を提唱しています。「でまかせ」という語にこびりついているネガティブな（※ポジティブ対ネガティブという対立はフィクション＝作り話にすぎないのですが）イメージを全面的に肯定し、あえて「でまかせしゅぎ」を選択する、と宣言しています。キーワードとキーフレーズは、「抑うつ」「頑張る」「死ぬ間際」「大和言葉」「漢語と和語の二重構造」「翻訳」「根強い『言葉＝言語』への不信感」「広い意味での表象」「ヒトと表象との関係性」「圧倒的な偶然性に身をゆだねる」です。直接書かなかったキーワードは、「フェルディナン・

ド・ソシュール」「ステファヌ・マラルメ」「ジャック・デリダ」「ジェームズ・ジョイス」「サミュエル・ベケット」「福沢諭吉」「西周」「二葉亭四迷」「夏目漱石」「森鷗外」「柳父章」「山岡洋一」「パイリンガリズム」です。

＊「もてあそばれるしかない」2009-12-03：「翻訳」をかなり広い意味で論じています。大きなテーマを扱う自分が、あくまでも自己流で「でまかせ」を実行していることを断っています。誰々が何と言ったか、あるいは書いたかには興味はないと述べています。当然のことながら、既存の学問や学術研究とは無縁の素人の馬鹿話でしかないと断っています。そうした弁明は居直りではなく、そういう言葉との付き合い方があっていいのではないかという提案のつもりで書いています。キーワードとキーフレーズは、「広義の表象」「絶対的他者との遭遇」「ヒトの言うこと為すことのすべては、『でたらめ＝世迷言＝でまかせ』である、という『考え方＝説＝お話＝作り話＝フィクション＝でたらめ＝でまかせ』から出発します」「ある『でたらめ』を他の『でたらめ』に『翻訳』するさいに生じる『ズレ』について考える」「フェルディナン・ド・ソシュール」です。直接書かなかったキーワードは、「ヒュー・ケナー」「ジェームズ・ジョイス」「サミュエル・ベケット」「ギュスターヴ・フローベール」「ジョージ・スタイナー」「ジャック・デリダ」「ミシェル・フーコー」「ジル・ドゥルーズ」です。

＊「わかるはわかるか」2009-12-04：前日に書いた記事を分けて掲載した後編です。テーマは前回と同じで、「翻訳」をかなり広い意味で論じています。大きなテーマを扱う自分が、あくまでも自己流で「でまかせ」を実行していることを断っています。キーワードとキーフレーズは、「正確さ」「わかりやすさ」「分かり合う」「手話」「ブリコラージュ」「楽しいのは、結果でなくてプロセス」「このブログでは、そもそも正解のある問題に取り組んでいるわけではありません。なにしろ、「わかる」は「でたらめ」だ、から出発しているのです」、です。直接書かなかったキーワードも前回と同じで、「ヒュー・ケナー」「ジェームズ・ジョイス」「サミュエル・ベケット」「ギュスターヴ・フローベール」「ジョージ・スタイナー」「ジャック・デリダ」「ミシェル・フーコー」「ジル・ドゥルーズ」です。

＊「翻訳の可能性と不可能性」2009-12-05：以前は、過去の記事にリンクを貼りまくり、過剰な自己輸入＝自己引用をしていたのを反省し、意識的にそうした作業を控えていましたが、この日は久しぶりに過去のブログ記事に触れています。ただし、1カ所だけです。「翻訳」を論じるさいに用いなければならない「わかる」という語を考察した連載に言及せざるを得なかったからです。この日の記事では、数日前から意味を広げて論じていた翻訳を、異言語間の翻訳に限定する方法をとっています。キーワードは、「膠着語」「屈折語」「孤立語」「日本語」「英語」「中国語」「うみ・海（・濃）」「sea（・see）」「mer（・mère）」「語義・意味・イメージ・ニュアンス・コノテーション」「聖書の翻訳」「クルアーン（コーラン）」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」「吉本隆明」

「ジョージ・スタイナー」です。

＊「わかるという枠」2009-12-06：前日の続きです。ヒトが、言語レベルでも、行動のレベルでも「枠＝制約＝限界」というものにとらわれている状況について、思うところをつづっています。「わかる」という大和言葉を漢字をまじえて「分光」する作業を行い、さらにその作業で用いた漢字の意味とイメージを分析しています。断ってありませんが、この作業の部分は、かつてのブログ記事からの自己引用です。「枠」「ずらす」「ズレ」という言葉とイメージと運動にこだわっています。そうすることで、誰もが通常意識しない「わかる」という枠に揺さぶりをかけようとしています。キーワードは、「国語辞典」「漢和辞典」「類語辞典」です。直接書かなかったキーワードは、「コア・イメージ」「中上健次」『紀州木の国・根の国物語』です。

＊「わかるはわからない」2009-12-07：「わかる」に相当する語を、日本語と英語と手話と漢字から拾い出して分析していますが、これも過去の記事からの自己引用です。キーワードは、「ヒトはわかることしかわからない」「ヒトには「わかる」ように「なっている＝できている」ことと、「わからない」ように「なっている＝できている」ことがある」です。直接書かなかったキーワードは、「ジャック・デリダ」「ミシェル・フーコー」です。

＊「わかるはプロセス」2009-12-08：「わかる」を「わかる」という「枠」に収めないように注意しつつ、読者に「わかる」が「わかる」ではないことをほのめかそうと、いろいろな細工と比喩とレトリックを用いています。再読すると、かなりとちくるった、あやうい展開の仕方になっています。テーマがテーマだけに、致し方ないと思いますが。この記事では、書かれた言葉の身ぶり・めくばせ・演技をご覧くださいというプロセスに重点を置いたつもりです。どうか、「でたらめを並べているなあ」という感じで、お目を通してください。それが本望です。

＊「3つの枠」2009-12-09：今回は「わく・枠」そのものを「分光」したり、「ずらし」てみたのちに、「枠」と不可分＝表裏一体で働く「わかる」に再度こだわっています。その「枠」と「わかる」が言語（母語）という表象をまとう限り、「言語＝表象＝枠＝限界」の中でヒトはもてあそばれるしかない事態が常態化している、と指摘しています。「枠」がテリトリーとも深く結びついていることにも触れています。さまざまな話を次々とつなげながら、そうした話たちがあくまでも「説＝フィクション＝作り事」であることを読者に喚起しようと、異常なほどの気遣いをしています。テーマに忠実であろうとすれば、そうならざるを得ないからです。キーワードは、「わかる」「枠」「テリトリー」「内部・外部・辺境」「うさんくさい」「いかがわしい」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮

實重彦」「ロラン・バルト」です。

＊「ちょっとないんですけど」2009-12-10：大学生時代に知り合いだったドイツ人が、「ちょっとないんですけど」という日本語のフレーズを例にとって、日本語は非論理的な言語だと主張していた思い出話から、言語の論理性というテーマを軸に話を展開しています。軽いエッセイとしても読める記事だと思います。キーワードは、「ミヒャエル・ミュンツァー」「NHKドイツ語講座」「ジャン・コクトー」「ニコラ・バタイユ」「膠着語」「屈折語」「孤立語」「日本語における省略」「内部・外部・辺境」です。直接書かなかったキーワードは、「中島悠爾」です。

＊「あなたとは違うんです」【2009-12-11 に書いたブログ不投稿（＝不登校）記事】：「わかる」「粹」「内部・外部・辺境」というフィクションとそれが喚起するイメージを、「ヒトとヒトは分かり合えるか」という、単純で深遠な問いに置き換えて論じています。「自分」と「他者」という語を用いて話を展開するうちに、「自分」ではなく、『自分というもの』に対する違和感を問題にし始めます。そこから、「○○というもの」および「もの」という言い回しにこだわり出します。このように、話を「進める＝ずらす」という「操作＝作業＝過程」を通じて、ヒトが言葉に主導権を握られている状況を浮き彫りにしようと努めています。同時に、そうした状況は、ヒトが「自己（自分）というもの」をコントロールできない事態であるとも言えます。キーワードとキーフレーズは、「内部・外部・辺境」「話が通じない」「わけが分からない」「ヒトとヒトは分かり合えない」「（わたしは）あなたとは違うんです！」「『自分』と『自分というもの』との間にある『ズレ』」です。直接書かなかったキーワードは、「フロイト」「ジャック・ラカン」「ジャン・ピアジェ」「レフ・ヴィゴツキー」です。

『うつせみのあなたに 第10巻』の内容

09.12.06-10.01.20

＊「ヒトいろいろ」2009-12-06：かつての「でまかせしゅぎじっこうちゅう」2009-03-10～2009-03-15 & 2009-04-06～2009-04-08 & 2009-04-23 ほど過激かつお馬鹿丸出しではなく、世相や社会の諸現象をテーマにヒトを観察するというスタンスで風刺的につつつてみよう、と考えたシリーズの第1回です。「表象」「メッセージ」「脳ブーム」「所有欲」「縄張り行動」「マーキング行動」「性差」「発情期」「闘争本能」をキーワードにして、ごたごた書いています。具体的なキーワードとキーフレーズは、「筋弛緩剤」「カブトガニみたいな髪型」「石川遼君の帽子」「テレビを見ちゃダメだ」「脳科学」「4億円の申告漏れ」「かつよちゃんとリカちゃんのバトル」「ノーベル賞という虎の威＝表象」「五輪のメダリストたちによる会見」「フィギュアスケートにおける男女差別」「世界代理戦争の五輪」です。

＊「信号としての石川君」2009-12-07：石川遼君特集です。キーワードは、「信号」「メッセージ」「視線」「まなざし」「ブリオ」「コーチング」「自己啓発」「イチロー」です。かつて何度か書いた記事の「焼き直し＝二番煎じ」と「継ぎはぎ＝パッチワーク」と「リサイクル＝リユース」です。今読むと恥ずかしいです。

＊「コトバとチカラ」2009-12-08：ヒトの言語行動という広いテーマのうち、「言語による攻撃」に的を絞り、「もっともらしい悪態のつきかた」を考察しています。もっともらしく言えば、そうなりますが、結局のところは、事業仕分けに反撃しているヒトたちや集団への悪態です。キーワードとキーフレーズは、「ノーベル賞受賞者による恫喝」「マスコミの及び腰的態度」「ノーベル財団による賞金の減額」「五輪のメダリストによる金屏風会見」「金くれ」「事業仕分けというショー」「れんほう氏はきついかな？」「男の嫉妬」「政権交代は政権後退かな？」です。

＊「ごめんなさい」2009-12-09：どうしてテレビに出ているのか、よく分からない、と日ごろ思っているヒトたちについての偏見＝私見＝愚見を述べています。「ファンの方々ごめんなさいデー」です。キーワードは、固有名詞になりますので、記事自体をご覧ください。

さい。

＊「政治とは「分ける」こと」2009-12-10：政治というきな臭い話がテーマです。やっぱり、きな臭い話は苦手だと痛感しました。抑うつ状態が悪化し、厭世観が高まるのです。キーワードは、「群れ」「ボス」「上下関係」「代わり」「わける」「切る」です。

＊「きな臭い話」【2009-12-11 に書いたブログ不投稿（＝不登校）記事】：前日に火がついたテーマを蒸し返しています。かつて、この国で検閲が行われていた時期に「伏せ字」として用いられた「＝」をつかって、書かれている言葉たちに「恐怖」を演じてもらっています。とはいうものの、この記事を投稿することなく、「ヒト観察記」というブログを削除・閉鎖してしまいました。再読しましたが、また「消えてしまいたい指数」が高くなりそうなので、解説は書かないでおきます。ごめんなさい。

＊「ブログ廃人と呼ばれて」2009-12-08：短いです。キーワードとキーフレーズだけ書かせていただきます。「ツイッター兼ノート」「ブログ廃人」になっているのではないですか？」「うつせみ＝空蟬＝現人＝うつを背負う身」。「うつせみ」であるブログが憑いた「ブログ廃人」の口から漏れ出た「音」をつづったブログなので、ここに書かれている言葉たちは、「うつせみついたうつせみのおと」なのです」です。

＊「社会復帰はあきらめました」2009-12-09：この日と同じタイトルの「社会復帰はあきらめました」2009-11-29 をそのまま引用し、次の記事と2本立てで掲載しています。

＊「続・社会復帰はあきらめました」2009-12-09：上の記事を再録した理由の言い訳をしています。「社会復帰をあきらめた」と自分に言い聞かせています。自己確認のための儀式と言えそうです。この日が「漱石忌」だったため、漱石についても述べています。

＊「ブログと心中？」2009-12-10：思えば、この時期に3本のブログを並行して書いていました。まったくもって学習しない、性懲りもない、自己破滅的なアホです。つぶやきを並べているだけなので、どうかざっと目を通して、嘲笑ってやってくださいませ。

＊「よくないなあ」2009-12-11：再読しているうちに、情けなくなって涙が出てきました。愚痴とばやきです。

＊「素面でいたい」2009-12-12：抑うつ状態がままならない、処方されたお薬を飲むと頭がぼーっとする。すると書けない。でも、書きたい。いろいろなことを考えたい。そのためには、お薬は飲みたくない。そうしたお話です。心機一転しようと、もがいています。過去1年間ほとんど本を読まなかった状況を打開するために、以前から気になっていた、あるノンフィクション・ライターの本を読み始めた、今も読んでいる、これから先も読み続けよう、と述べています。

＊「儀式」2009-12-13：ブログをつくり、つぶし、またつくってつぶすということを繰り返してきた自分の行動を反省しています。そうした行為が死の代わり＝代償の役目をしていたのではないかと述べています。そうかもしれません。きっとそうです。かわいそうなブログたち――。

＊「爪を切る」2009-12-14：心境小説というか私小説というか身辺雑記的小品です。母と自分の関係を思いつくままにつづっています。

＊「わかる（1）」2009-12-15：珍しく文体を変えて書いています。続けて読んでいる書き手の文章に影響されていたのかもしれません。キーワードは、「わかる」「わかる」「わかる」「政治」「経済」「実物・鏡像」「事業仕分け」「パイを分ける」です。直接書かなかったキーワードは、「坂部恵」「宮川淳」「豊崎光一」です。

＊「わかる（2）」【09.12.16 不投稿（＝不登校）記事】：「わかる・わかる」のうち、「わかる」についてはさんざん書いてきたので、「わかる」について考えて書いてみたいと希望を述べています。体調と抑うつ状態が悪化しているなかで書いていたため、さらに悪化させないように、自制して中断しています。「わかる」は、「うつせみのあなたに」で再挑戦してみたいテーマです。キーワードは、「わかる」「わかる」「テリトリー」「しる」「かく」「かける」です。直接書かなかったキーワードは「坂部恵」「大和言葉」「クロード・レヴィ＝ストロース」「ブリコラージュ」です。

＊「二句」2009-12-16：抑うつ状態が極度に悪化していた時に書いたものです。「過去に開設したブログの記録」、つまりブログを開設してや削除・閉鎖するということを繰り返していた「痕跡」をコピペし、ため息をついています。書きたい。でも、書けない。そんな焦りと嘆きをぼやいているトホホな記事です。この日の時点では、もう書けないという気持ちが強く、ベソをかいているだけです。

＊「ずらす」2009-12-19：数日間、もぬけの殻状態でしたが、この日にようやく書く元気が出ました。「うつせみのうつお」を再ブログ化しようという計画を実行し始めたのを契機に、記事を書いてみようかと奮起してしたためたものです。文体が変わっているのは、やまとことばを意識的に多用して書いているためです。いつも書いているようなことを、できるかぎりからことばを使わずに書いたらどうなるか。そんな実験をしています。やまとことばという「枠」を設けることで、「言葉をつくりながら書いている」ような錯覚に陥りました。官能的な体験でした。キーワードは、「ずらす」「わく・枠」「すじ・筋」「なわ・縄」「いと・糸」です。直接書かなかったキーワードは、「ヒトによる言語の獲得」「脳科学ブーム」「バイオテクノロジー」「ゲノム解読」「量子」「坂部恵」「『仮面の解釈学』」「宮川淳」「『引用の織物』」「紙片と眼差のあいだに」「ヒュー・ケナー」「ジェームズ・ジョイス」「サミュエル・ベケット」です。

＊「かえるのではなくてかえる」2009-12-20：前日の実験の「種明かし」をしています。やまとことばを、あえて使っている理由を誤解されたくないために、「原点」や「本来の姿」に「かえる」という考え方への批判を、つづる言葉の身ぶりで示す、という「遊び」「たわむれ」をしています。こういう込み入ったことをする癖はなおりそうもありません。また、一般にはネガティブなものとして取られている「でまかせ」という言葉とイメージが、「言葉」と「書くこと」のありようと深く結びついていると主張しています。キーワードは、「変える・替える・代える・換える」「帰る・返る・還る」「孵る」です。直接書かなかったキーワードは、「坂部恵」「ステファヌ・マラルメ」「ジャック・デリダ」「豊崎光一」「『余白とその余白または幹のない接木』」「砂の顔」「渡部直己」「『泉鏡花論—幻影の杼機』」「谷崎潤一郎—擬態の誘惑」です。

＊「とりとめもなく」2009-12-21：前回の記事の内容をできるだけやさしく解説してみたり、かつてブログをつぶした罪滅ぼしとして「うつせみのくら」（※過去のブログ記事を再ブログ化したもの）をつくっているという言い訳をしたり、幼かったころの回想や現在の身辺雑記的なことを書いたりしています。キーワードは、「とりとめがない」「母」「運命」「物語」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」「批評あるいは仮死の祭典」「安岡章太郎」です。

＊「パラレル」2009-12-22：過去に潰した記事の再ブログ化である「うつせみのくら」をつくっている作業について報告しています。1日に10本ほどの過去の記事を再投稿する（※コピペをするだけの機械的な単純作業ではなく、どうしても読み直しと加筆が伴います）という、かなり無茶なことをしているさまがつづられています。この「うつせみのあなたに」というブログと並行して、つまりパラレルに作業をしているという点を指摘し、パラレルという言葉のイメージを膨らませています。ちょっとおふざけが過ぎたようで

す。キーワードとキーフレーズは、「同義語」「対義語」「同列に在る」「類語辞典」「ズレ」「間・あいだ・あわい」「境・さかい」「際・きわ」「差異」「違い」「関係性」です。直接書かなかったキーワードは、「ジル・ドゥルーズ」『意味の論理学』「リゾーム」です。

＊「日本語にないものは日本にない？（１）」2009-12-23：かつて読んだ本の記憶が部分的によみがえり、その記憶を頼りに「日本語にないものは日本にない？」という問いをめぐって、あれこれ書いています。この時点では、その本の著者やタイトルや内容が思い出せなかったので、記憶の断片をもとに議論を始めるという横着なことをやっています。まさに、でまかせ主義です。「ずらす」2009-12-19 で書いた大和言葉づくりの文章を、からことばをまじえた文章に「置き換える＝翻訳する」という、妙な試みをやっています。文体についても考えています。連載の始まりだという意識はあるものの、方向はまだ定まっていません。手探りの状態です。キーワードは、「社会・society」「書く」「考える」「です・ます調」「だ・である調」「書き方と書く内容」です。直接書けなかったキーワードは、「柳父章」『翻訳語成立事情』です。直接書かなかったキーワードは、「ジョージ・スタイナー」『After Babel（邦訳：バベルの後に）』「聖書の翻訳」です。

＊「日本語にないものは日本にない？（２）」2009-12-24：「日本語にないものは日本にないのか」というフレーズを、「言い換える」「置き換える」という広い意味でとるという方針が決まったようです。とはいえ、まだ右往左往しています。言葉を学問の対象とするさいのいかわしき、事務的な作業、官僚的なスタンスについて批判しています。ヒトが言葉を制御できる、あるいは「観測」できるという神話に疑問をいただいています。キーワードとキーフレーズは、「検証」「屁理屈」「理屈」「ことわり・事割り・理・断り」「五感」「抽象語」「言葉と物の対応」「関係性」「論理的に展開する」「筋道を立てる」「言葉に身を任せる」「分かった」「分かったと思い込んだ」です。直接書かなかったキーワードは、「ミシェル・フーコー」『言葉と物』『狂気の歴史』『蓮實重彦』『批評あるいは仮死の祭典』です。

＊「日本語にないものは日本にない？（３）」2009-12-25：読者の方から、前回の記事の内容が分からないとのメッセージをいただき、うろたえています。正確に書こうとすると「分からない」文章になる、などと言い訳めいたことを書いていますが、今でも、そう思っています。文章力という曖昧なイメージや、言葉を使えば分かるという暗黙の了解には、未だに納得がいきません。この記事では、そうした思いを何とか伝えようと努力しています。前回の抽象語に引き続き、今回は具体語・具象語と呼ばれているもののいかわしきを指摘しています。「言葉の発生」という神話にもかみついています。キーフレーズは、＜ヒトは、言葉を使って何かが分かるのだと「決めている＝思い込んでいる＝ヒトびとの間でそういう暗黙の了解が成立している。＞と、＜「知覚（ちかく）」というのは、「遠く」にあるものを「近く（ちかく）」にあると「錯覚する＝自分に言い聞か

せる＝無意識にあるいは意識的に思い込む」ことです。＞です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」『批評あるいは仮死の祭典』『文化人類学』です。

＊「日本語にないものは日本にない？（４）」2009-12-26：言葉・言語をアカデミックな場で研究の対象とすることの限界と、避けることのできない「いかがわしさ」を指摘しています。検証作業や結論を出すという使命が、かえって言葉・言語を五感でとらえる妨げになっている点に触れています。ある言語になかった言葉＝語が登場することによって、社会が変化する現象を引き合いに出して、言葉の効用という側面を支持しています。言葉をラベルという比喻でとらえて、言葉によって他者を思いやることができる点も支持しています。また、パラレルという考え方を発展させて論じています。最後は、センチメンタルになっています。キーワードは、「検証不可能」「セクハラ」「DV」「ドクハラ」「パワハラ」「ゲイ、ホモ、ホモセクシュアル、ホモセクシャル、レズビアン、おかま、同性愛、へんたい、変態、変態性欲（者）、男色（家）」「抽象度」「思いやる」「想像力」「animation」「animate」「いきる・息る・生きる・活きる」です。直接書かなかったキーワードは、「サミュエル・I・ハヤカワ」「一般意味論』『思考と行動における言語』」です。

＊「日本語にないものは日本にない？（５）」2009-12-27：「読みにくい」「分からない」という読者のメッセージを受け、読みやすく、分かりやすく書こうと努力しています。学校などでよく教わる「言葉は文化と密接にかかわっている」という話を、例を挙げて説明しています。読者からのフィードバックを素直に受け止め、「うつせみのくら」造りに専念すると「追記」で述べています。確かに、この時期にはブログの記事を書くのと、かつての記事を1日に10～20本も投稿して再ブログ化する作業とを並行して進めていたため、極度に疲れていました。キーワードは、「コメとその類語」「rice」「ウシ」「cowとその類語」「アラビア語」「イヌイット諸語」「社会」「society」です。直接書かなかったキーワードは、「文化人類学」「言語人類学」です。

＊「かえるはかえる」2010-01-12：「うつせみのくら」がほぼ完成した日の記事です。「懐かしい」「（過去に）もどりたい・かえりたい」という言葉とイメージと心理がテーマです。そうした心理が「悔しい」という思いと結びついていることを指摘しています。その「悔しい」が個人レベルだけでなく、共同体や国家のレベルに至るとき、事態がきな臭く、場合によっては生臭い様相を帯びる点に言及しています。「かえる」を「変える・換える・代える・替える」と「返る・帰る・還る」に分け、後者は不可能ではないかと問題提起をしています。それと関連して「再現する」の不可能性にも触れています。その「代わり」にヒトがするのが「つくる・でっちあげる」だと述べています。キーワードは、「加齢」「回帰」「郷愁」「パレスチナ」「地・知・血」「histoire」「history」「story」「His story」「アルマゲドン」「かたり・語り・騙り・カタリ」「警察・検察・裁判所での記録」

です。直接書かなかったキーワードは、「ジョージ・スタイナー」『言語と沈黙』『青ひげの城にて――文化の再定義への覚書』『供述調書』『検察官面前調書』『取り調べの録画・録音』『取り調べ過程の可視化』『テレビ番組の再現ビデオ』『史書』『歴史学』です。

＊「かえるにかえる」2010-01-13：ヒトが空間および時間を知覚するさいに、前後をどのように処理しているかを考察しています。心理学・精神医学・物理学の知識がない素人として、自分の母語と、自分にとっての異言語である英語での「前後」に関する語句を並べて考える方法をとっていますが、途方に促されています。身の程をわきまえ、出まかせと駄洒落を用いて言葉に身を任せるといふ、お決まりの遊びをしています。キーフレーズは、＜「何かの代わりに何かではないものを用いる」という「代理の仕組み」の大御所である言葉（音声や文字）と視覚的イメージ（映像）を用いる「限り（＝限界）」、「想起・再現・復元」は無理・不可能ではないか。＞です。この種の議論が、司法における「再現」の可能性や、歴史の検証という、大きな問題に触れる点についても言及しています。さらに、その問題がファシズム＝全体主義にも親和性があることを指摘し危惧しています。過度に被害妄想的になっています。「原点」や「本来の姿」や「真の自分たち」へ「帰ろう」という運動を「幻想・錯覚」を利用した「策略」である、と暗に批判しています。キーワードは、「ジーニアス和英辞典」「比喩」「知覚」「変える・換える・代える・替える」「返る・帰る・還る」「孵る」「アレゴリー」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」『表層批評宣言』です。

＊「もどるにもどれない」2010-01-14：一度手にしたものを手放すことができない、というヒトの習性がテーマです。日常生活から、法律・政治・経済に至る、多岐にわたる例を挙げています。途中から唐突に無重力状態の話へと変わります。ヒトが当然だと思っているものに揺さぶりをかけるための「比喩」として、無重力状態を持ち出し、それをきっかけに言葉たちにアナーキーな動きと表情を演じてもらっています。こうした企みと戦略は、単なる支離滅裂と取られる可能性が高いです（たぶん、読者は混乱するだけだと、再読して反省しました）。この記事で訴えたかったのは、言葉とイメージに備わっている「いかがわしさ」つまり、欠陥と限界性です。それを意識しようと呼びかけています。同時に、「もどるにもどれない」という事態を認識しつつ、少しでも「もどる」＝「かわる」努力をしようと呼びかけています。キーワードとキーフレーズは、「既得権」「伝統」「習慣」「掟」「利害関係」「当然」「テリトリー」「野口聡一」「圧倒的な偶然性」「自由さ・不自由さ」「フィクション」「いかがわしく頼りない観測者であるヒト」「何かの代わりに何かではないものを用いる」「イメージは、基本的にヒトが個人レベルでいだきわめて『テキトリーな』もの」です。

＊「け＝く」2010-01-15：警察・検察・検閲・検索がテーマであり、キーワードです。それを「＝」や「○」という伏せ字を用いて、言葉自体に演じさせるという、お決まりの

方法をとっています。再読し、自分の芸のなさに恥じ入るばかりです。ネットの検索エンジンを使って「検索」という操作をすることが、「検閲」とも重なる部分の多い作業となり得ることを指摘しています。よく考えると恐ろしいテーマです。

＊「まことにまこと」2010-01-16：普段は漢語系の言葉を使用して語る「硬い」テーマを、やまとことば系の言葉で語る、という試みをしています。やまとことば系の言葉たちと、からことば系の言葉たちを対比し、なぜか、後者が空疎であるという感想を述べ、その理由を自己分析しています。「真実・真理・真言・事実・現実」といったもってもらしい、偉そうで厳しい言葉とそのイメージを痛烈に批判しています。その批判を支えているのは、言葉への愛です。それが読者に通じたかどうかは、分かりません。個人的には、とても愛着のある記事です。自分の言語観、言語に対する倫理観がストレートに出ています。キーワードは、「分光する」「中上健次」「ずらす」「パラレル」です。直接書けなかったキーワードは『紀州木の国・根の国物語』です。直接書かなかったキーワードは、「由良君美』『言語文化のフロンティア』『四方田犬彦』『先生とわたし』『エルンスト・カッシーラー』『高山宏』『表象文化論』『坂部恵』『ニーチェ』『善悪の彼岸』『ヴィトゲンシュタイン』『フェルディナン・ド・ソシュール』『ステファヌ・マラルメ』です。

＊「まことはまことか（前半）」2010-01-17：簡略化すると、「思考」と「言葉」に関しての考察です。「まこと」の「ま」について、言葉の具体性＝表層性と、抽象性＝概念性の両面から取り組んでいます。言葉を言葉で論じることがいかに奇妙で不可能であるか、しかし、そうした行為からヒトは逃れることができないという点に徹底的にこだわっています。その困難な試みを「とちくるう」という言葉とイメージで読者に伝えようとしています。誤解を招きやすい言い回しですが、ほかに適切な言葉が思いつきません。また、「言語で思考する」という考え方に対し、図式を用いて反論を試みています。キーワードは、「ま・ma」「あむ・あん・あーむ・あーん・あうん・阿咩・aum・om」「オカルト」「宗教」「呼吸法」「考える」「思う」「思考する」「思想する」「ことわり・事割り・言割り・理」です。直接書かなかったキーワードは、「フェルディナン・ド・ソシュール」「ステファヌ・マラルメ」「ジャック・デリダ」「蓮實重彦」です。

＊「まことはまことか（後半）」2010-01-17：「まこと」の「ま」が、どのような「機能＝働き＝役割」を演じているかを詳細に論じています。読者にとってかなり読みにくい記事となることを意識し、「口癖」という比喻で、「ま・まこと」、つまり、「わかる」「わかった」「理解した」「認識した」「さとした」「解脱した」や、「まこと・真実・真理・真言・事実・現実」という一連の言葉や言い回しの「からくり」を説明しようと努力しています。読者に体感してもらおうと努めています。簡単に言うと、「本当・真実」なんてない。単なるヒトの「口癖」だ。そんな感じです。分かっていただけでしょうか。キーフレーズは、＜「ま+こと」「真+事」「真+言」「真+断」とも読めます＝分光できます。さらに、

「ずらす」なら、「事」とは「事象・物」、「言」とは「言葉・語・言語・代理・表象」、「断」とは「断る・事割る・判る・分かる・認める・認識する・理解する」と読めそうです。＞と、＜ここで言っている「口癖」とは、「何か」から「はずれ・ずれ・すれ」たあげく、擦り切れてしまっている言葉のことです。まさに、「ま」がそうなのです。＞です。前半と後半に分けたこの記事は、かなり力を入れて書きました。ややこしい内容ですが、1度読もうとしてあきれ返った方に、ぜひ、再度読んでいただきたいと思う記事です。キーワードは、「ギュスターヴ・フローベール」『紋切型事典（紋切型辞典）』です。

＊「本物の偽物（前半）」2010-01-18：内容的には、前回の記事とつながっていますが、別個のテーマへとずれていきます。前回より、読者になじみやすい書き方をしたつもりですが、どうでしょうか。「本当・真実」と呼ばれているものが、いかにうさん臭いものであるかを訴えています。「偽物・うそ」と「本当・真実」が対立するものだという考え方にも、疑問を投げかけています。キーワードは、＜このように「パラレル」な状態は、観測者＝見るヒトの位置によって、いろいろな色づけがなされ、いろいろな意味合いを帯びます。たとえば、「まがい vs. まこと」や「にせもの vs. ほんもの」を対義語と見るヒトには、視座や立場や思惑や利害関係があります。そのどれもが、ヒトの「勝手＝都合＝たくらみ」です。＞です。キーワードは、「ジル・ドゥルーズ」「ニーチェ」です。

＊「本物の偽物（後半）」2010-01-18：「にせもの・似せたもの」を「代理・何かの代わりなもの」と重ねて論じています。読者に身近な例を挙げて、「偽物・うそ」と「本当・真実」が対立するものだという考え方の「いかがわしさ」を体感してもらおうと努めています。おふざけもしています。再読すると恥ずかしくて、赤面してしまいました。キーワードは、＜みなさん、身のまわりを見わたしてください。テレビやPCの映像と音声、本や雑誌や新聞に文字として記された話や記事、人形・フィギュア・玩具・写真・絵――これらは、みんな「何かに似せたもの」＝「にせもの」なんです。世の中、「そっくり」「似せたもの」「にせもの」だらけじゃありませんか。＞と、＜すごく簡略化すれば、「間・あわい」とは、森羅万象に相反するものなんてない、という感じのお話＝たわごと＝作り話です。＞です。直接書かなかったキーワードは、「ジャン・ボードリヤール」「ピエール・クロソウスキー」「シミュラクル／シミュラークル」「宮川淳」「豊崎光一」「ミシェル・フーコー」『外の思考』『ギュスターヴ・フローベール』『ブヴァールとペキュシェ』です。

＊「からから」2010-01-19：「日本語にないものは日本にない？（1）」2009-12-23 から「日本語にないものは日本にない？（5）」2009-12-27 が、「うつせみのくら」つくりと並行して執筆していた記事だったため、落ち着いたところで、あらためて異文化・異言語間の「まじりあい」をテーマにしての文章を書きました。「からことば」の「から」が、中国、朝鮮半島だけでなく、さらに遠くの地域も指していることを広辞苑で知り、「から」

という言葉とイメージにもてあそばれてみる方法をとっています。こじつけと駄洒落を多用しています。こういう書き方をするから、読者による好き嫌いがはっきりと分かれるのでしょう。それは分かっているのですが、やめられません。テーマがテーマだけに、ブログを書き始めて、初めての試みをしています。山岡洋一氏の運営するウェブサイトにつながるリンクを貼らせていただきました。自己輸血＝自己引用ばかりしているブログが、初めて他のサイトから輸血を受けたのです。キーワードは、「外部・内部・辺境」「そと・うち・ふち」「伝わる・流れ込む・入り込む」「翻訳通信ネット版」「仁平和夫」『翻訳のコツ（PDF版）』『DictJuggler.net』『翻訳訳語辞典』『翻訳とは何か』です。

＊「2010年1月20日にギャグる」2010-01-20：抑うつ状態がひどかったので、久しぶりでこの形式の記事を書きました。お恥ずかしい限りです。どうか、斜め読みなさって、嘲笑ってやってくださいませ。再読すると、書いた後にお薬を飲むという前提に立っているためか、半分やけになり、けっこう熱を入れて馬鹿をやっております。テーマは、「善 vs. 悪」「真 vs. 偽」という短絡的な2項対立のいかがわしさです。

『うつせみのあなたに 第11巻』の内容

10.01.22～10.03.11

＊「夢の素 (1)」2010-01-22：他人の見た夢を聞かされる時の退屈さから話を起し、夢と思考と空想の3つが自分にとっては近い行為だと述べています。大和言葉系の「おもう・おもい」という語の多義性と多層性に触れ、どれだけの厚みのある言葉であるかを、例を挙げて示しています。言葉を使って思考する、という俗説を批判しています。言葉を話し言葉と書き言葉だけではなく、広義で取れば、言葉を使って「おもう」ことはあり得るのではないかと主張しています。「夢の素」という言葉とイメージについて語り、それが「おもう・おもい」を誘発し始動させる「粒」だと比喩的に説明しています。「こんなことを書きました」というタイトルで定期的に行っている記事に出てくる、「直接書かなかったキーワード」が、まさに「夢の素」であると書いています。キーワードは、「夏目漱石」「内田百閒」「ブレンストーミング」「ゆめうつつ・夢現」「夢（＝広い意味での想像界）」「現実（＝知覚されている現在）」「思考（＝広義の言葉を用いて動いている心）」「味の素」「固有名詞」です。余白に書かれたキーワード、つまり「夢の素」は、「ステファヌ・マラルメ」「蓮實重彦」「ギュスターヴ・フローベール」「ブヴァールとペキュシェ」です。

＊「夢の素 (2)」2010-01-23：言葉が「ずれる・言い換わる・たとえられる・こじつけられる・わかる・混乱する」という動きが、「夢の素」が「かわる・変容する・うつる・うつりかわる・わかる・ゆがむ・くずれる」という動きと似ているという意味のことを述べています。記事を書くさいの癖として、つづられる言葉たちに、つづられるテーマを身ぶり・動きとして演じさせる。そんな込み入った遊び＝戦略が好きだ、と言っています。そうした言葉によるテーマの擬態の方法は、渡部直己氏の著作から学んだと書いています。しかし、それはあくまでも個人的なひとりよがりの解釈にすぎないと断っています。「意識・思考・無意識・夢想・妄想」といった言葉とイメージを含む、「思い」という語とそのイメージを分析しています。イメージと「夢の素」は「いづく」ものであると主張し、「いづく」を「だく」へとずらし、「だくことはだかれることである」というテーマへと移行しています。そこから「意識する」と「意識される」とが、ヒトの意識の中ではほぼ同じことである、という話になります。また、ヒトは「分かっている」としてか「分からない」という、かつて書いたテーマにも触れています。キーワードとキーワードは、「accent」「隠喩」「『言う・言葉』の直前にあるものとしての『夢の素』」「意識

のグラデーション」「ヒトは『似ている』と『知っている・分かっている』を混同している」「出来レース」「経路」「ヒトにとって、森羅万象は、みんな『似ているもの』という意味での『偽物』だ」です。余白に書かれたキーワード、つまり「夢の素」は、「ジャック・ラカン」「レフ・ヴィゴツキー」「ニーチェ」「ピエール・クロソウスキー」です。

＊「夢の素 (3)」2010-01-24：ヒトの夢や意識、ヒトがつくった話＝フィクションにおける「視点・視座・位置・主客・主述」がテーマです。前回の「抱く＝抱かれる」に引き続き、「する＝される」に徹底的にこだわっています。例を挙げながら詳細に考察したのちに、「見ている＝見られている」というイメージで総括しています。そうした動作・行為・身ぶりが、視点や主語や主体を欠いた匿名的でニュートラルなものである点が重要であると主張しています。キーワードとキーフレーズは、「レトリック・トリック」「言葉の綾・ありやりや」「『＝』という記号」「意識・認識・思考・混乱」「『事実と意見を分ける』のいかかわしさ」「走る＝走られる」「パッチワーク・ブリコラージュ・織物・テクスト」です。余白に書かれたキーワードは、「ジル・ドゥルーズ」「フェリックス・ガタリ」「機械状無意識」「モーリス・ブランショ」「文学空間」「来るべき書物」「宮川淳」「引用の織物」「紙片と眼差のあいだに」「鏡・空間・イメージ」「豊崎光一」「余白とその余白または幹のない接木」「ミシェル・フーコー」「外の思考」「クロード・レヴィ＝ストロース」「野生の思考」です。

＊「夢の素 (4)」2010-01-24：作家に書かせる契機と動機を起させる「夢の素」について語り、スティーヴン・キングと宮部みゆきを例にとっています。キングに触れて、性的虐待のサバイバーである自分について、おそらく初めて直接的に言及しています（※「サバイバー」という語とイメージは「恵」というハンドルネームでブログに投稿した小説たちを書かせた「夢の素」と言えそうです。そうしたことにまで触れたのは、この記事を書いた時が、かなり精神的にしんどかったからでしょう。抑うつとは違った意味で苦しかったのです）。大学の卒論で、ロラン・バルトがバルザックの『サラジヌ』を批評した『S/Z』を批評したことを回想しています。作家の「癖」＝「夢の素」に注目する批評の方法について述べています。そこから話が飛んで、薬物による幻覚を求めた作家たちとその作品を紹介しています。記事を書いているうちに、だんだんあやうい方向に行く自分にあえて、書かせています。悲しい日でした。キーワードおよび余白に書かれたキーワードは、「ガストン・バシュラール」「ジャン・リカルドー」「トマス・ド・クインシー」「阿片服用者の告白」「オルダス・ハクスリー」「知覚の扉」「ウィリアム・バロウズ」「裸のランチ」「アーヴィン・ウェルシュ」「トレインスポッティング」「由良君美」「椿説泰西浪漫派文学談義」「澁澤龍彦」「都心ノ病院ニテ幻覚ヲ見タルコト」「高山宏」「ステファヌ・マラルメ」「Brise marine」です。

＊「うつせみのたわごと-1-」2010-02-02：1週間以上、心身ともに疲れていましたが、よ

うやく記事を書く気力が出来たので、つづったものです。短いですが、できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。ふだん書いている文章とは違った書き方で、「言葉」、「書くということ」、「読むということ」をテーマに書くという、ややこしい実験をしています。アホなうえに偏屈者らしい企てというべきでしょう。また、「追記」というかたちで、グーグルの検索エンジンを使って、こちらが選んだキーワードを読者に検索してもらうという小細工もしています。ひとりよがりな戯れなのですが、キーワード検索という作業と、言葉というサイコロを振る「マラルメ的」身ぶりを重ね合わせたつもりです。読者に参加してもらう、または、読者に「動き」を促すように働きかけるための、本気で試みた仕掛けだったのですが、読み返すと恥ずかしいです。標準的な表記に直したキーワードは、「何かの代わりに何かを用いる」「ことわり・事割り・言割り・断り・理」です。直接書かなかったキーワードは、「坂部恵」「あわい」「かわる」です。このシリーズ全体を通じての、直接書かなかったキーワードは、「ジェイムズ・ジョイス」「サミュエル・ベケット」「フランツ・カフカ」「ジル・ドゥルーズ」「柳瀬尚紀」「レーモン・ルーセル」「VOA の special English」「basic English」「聖書の翻訳」「ジョージ・スタイナー」『After Babel（邦訳：バベルの後に）』「ビジン言語」「クレオール言語」「ブリコラージュ」です。

＊「うつせみのたわごと -2-」2010-02-02：テーマは、言葉でものごとを語ること、および、ヒトが真実・現実・事実をとらえることの不可能性です。標準的な表記に直したキーワードは、「まこと」「かたこと」「かたる・語る・騙る」です。直接書かなかったキーワードは、「蓮實重彦」です。

＊「うつせみのたわごと -3-」2010-02-03：テーマは、ヒトが言語を獲得したことでテリトリーと知との絡み合いです。これまで何度か論じてきたことを、大和言葉系の語だけで語ろうとすることのおもしろさを感じました。スリリングな体験でした。標準的な表記に直したキーワードは、「謎」「なぞる」「かく・描く・搔く・書く」「思い」「掟」「しる・知る・領る・汁」「名づける」「手なずける」「なわばり・縄張り」「ち・地・知・血」「懐かしい所」「帰る」「戻る」「源」です。直接書かなかったキーワードは、「動物行動学」「縄張り行動」「マーキング行動」「闘争本能」です。

＊「うつせみのたわごと -4-」2010-02-04：「外部・内部・辺境」という分類がテーマです。「よそおう」という言葉をつかって、そうした分類＝分ける作業が、ありもしない物事を捏造することだと指摘しています。ヒトという生き物の性（さが）を嘆いています。この回で、ようやく、「追記」の意味を「種明かし＝解説」しています。再読すると、ひとり相撲のわびしさを感じます。標準的な表記に直したキーワードは、「よそ」「装う」「そと」「うち」「ふち」「代わり」「偽物」「ずれる」「はずれる」「語る・騙る」「仮」「化ける」「誤る・謝る」「賢しい」「悪賢い」です。直接書かなかったキーワードは、「エルンスト・

カッシーラー」「クロード・レヴィ＝ストロース」です。

＊「うつせみのたわごと -5-」2010-02-06：テーマは、「まぼろし・げん・幻」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「幻界」です。この回から、10の「げん」について連載していく形になります。きっかけは、このブログの熱心な読者であるHさんから届いたメールです。以前、10の「げん」をめぐる各10本、計100本の記事を書くと言言しておきながら、頓挫したことがありました。そのことを非難したとも取れる記述が、gooの評判分析で検出できると、Hさんに教えてもらったのです。評判分析の意図については未だに不明ですが、善意として理解し、素直に再度10の「げん」についてつづてみることにしました。ただし、各「げん」についてそれぞれ1本の記事しか書けないと断っています。また、10の「げん」の見取り図を紹介し、全体として何をやろうとしているのかを説明しようとしています。標準的な表記に直したキーワードは、「間を滅ぼす」「真を滅ぼす」「魔を滅ぼす」「イメージ・image」「信じる」です。直接書かなかったキーワードは、「知覚（する）」「想像（する）」「空想（する）」「夢想（する）」「魔法」「まじない・呪い」「だく・だかれる・いだく」「ジャック・ラカン」です。

＊「うつせみのたわごと -6-」2010-02-07：テーマは、「言葉・げん・言」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「言界」です。言葉が代理でしかないこと、ヒトには言語を習得する先天的な能力が備わっているらしいこと、言葉はヒトの思いや感情の表出や伝達を担っていること、言葉がヒトの知の体系をつくり上げる支えとなってきたこと、について論じています。こうしたことがらを、大和言葉を多用しながら平仮名だけで記述する場合と、そうした語の使い方によらない書き方をした場合とを比較すると、つづる形態がつづられる内容に大きな影響を及ぼすことがよく分かる。そんな気がしました。簡単に言うと、書き方が書く内容を左右するということです。標準的な表記に直したキーワードは、「のっぺらぼう」「事の端・言の端・言の葉」「言霊」「思いは重い」「ひとり言」「すじ」「ずれ」「うつす・写す・移す・映す」「息・生きる・息る」「出る」です。直接書かなかったキーワードは、「表象」「代理」「ニュートラル・匿名性」「ノーム・チョムスキー」「言語能力・competence」「経路」「ミメシス」「コミュニケーション」「ヒトの言語獲得」です。

＊「うつせみのたわごと -7-」2010-02-08：テーマは、「現実・げん・現」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「現界」です。目覚めている状態、つまり意識が働いている状態と、夢を見ていたり、空想をしていたり、無意識でいる状態とを対比するのではなく、連続した帯＝濃淡＝階調として論じようとしています。幻界、言界、現界が重なるものであるとも訴えています。また、瞑想などによって悟りを得て自分だけが救われようする態度や、現実を生きるさいに、現在多くの人たちが指針としがちな自己啓発書を批判しています。標準的な表記に直したキーワードは、「うつつ・現」「ゆめうつつ・

夢現」「悟る」「救い」「あうん」「あくび」「歌う」「眠る」「仮の死」です。直接書かなかったキーワードは、「om」「うつ病」「出版界」「マーケティング」「実用書」「処世術」「脳科学」『ブヴァールとベキュシェ』です。自己啓発書に関して直接書けなかった3つの固有名詞＝人名は、どうか読み解いてください。難しくありませんので。今では「決まり文句」と化した名です。

＊「うつせみのたわごと -8-」2010-02-09：テーマは、「かぎり・へり・げん・限」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「限界」です。ヒトをはじめ、あらゆる生き物は、それぞれに備わった枠の中で生きている。その枠組みを意識できるのは、おそらくヒトだけである。だが、ヒトを縛る枠は多種多様であり、それらの枠を意識することは難しい。枠はヒトを縛るが、枠をずらすことで、その縛りから一時的にでも逃れることが可能なのではないか。外・内・へりという分け方は、うさん臭いものであるが、あえてその分類を受け入れるとすれば、ヒトはへりにいると言える。以上のように要約できると思います。また、「後記」の中で、ある読者への回答として、「小品集」で試みたような小説を書く余裕が、今はないと断っています。いつか書きたいとの希望も述べています。標準的な表記に直したキーワードは、「線を引く」「縄を張る」「土地を名づける」「分ける」「名づける」「名が足りなくなる」「あわい・間」「境目」「言葉という枠」「体という枠」「種（しゅ）という枠」「書くという枠」「分かるという枠」「生死という枠」です。直接書かなかったキーワードは、「近親憎悪」「狂気」「フリードリヒ・ニーチェ」「アントナン・アルトー」「ジェラルド・ド・ネルヴァル」「フリードリヒ・ヘルダーリン」「フランツ・カフカ」「ジャック・デリダ」「ジル・ドゥルーズ」「ヒュー・ケナー」「ジャック・デリダ」です。

＊「うつせみのたわごと -9-」2010-02-10：テーマは、「もと・はら・げん・原」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「原界」です。ヒトは何ごとについても、その始原を求めようとする傾向がある。それは、「戻る」「帰る」という運動へとヒトを誘う。源に帰ろうとするという動きは、枝分かれしている形態の存在と、「出た」という過去の出来事を前提とする。「出る」「出た」は、流れる、移る、渡る、回るという運動の源である。動きと動くものが、「出る」と「もと・はら」という場と重なる。もの、こと、さま、うごきが、重なる。それが「原界」である。以上のようにも、要約できると思います。個人的には、苦手な物語です。どうしても馴染めません。不謹慎かもしれませんが、笑ってしまいます。きっと、この種の話とは、相性が悪いのでしょうか。標準的な表記に直したキーワードは、「群れ・群れる」「分かれる・別れる」「親」「母」「子」「旅」「つながり」「はらむ・孕む」「産む」「生まれる」「海」「死」「生まれ変わる」「輪」「めまい」です。直接書かなかったキーワードは、「うんち」「神話」「叙事詩」「経典」「聖典」「カール・グスタフ・ユング」「エミール・パンヴェニスト」「フェルディナン・ド・ソシュール」「インド・ヨーロッパ祖語」です。

*「うつせみのたわごと -10-」2010-02-11：長い記事になってしまいました。テーマは、「ふえる・げん・Gen（※ドイツ語で「遺伝子」）」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「Gen 界」です。小さな命の単位が転写という仕組みでどんどん増えていく。転写しそこなう場合もある。死滅する単位もある。単位の集合体である生体は、単位を生殖や増殖という仕組みで、新たな生体を生み出していく。そうやって、写す、移る、増える、伝わる、渡す、という一連の動きが生起する。ヒトは、その生起を出来事としてではなく、物語としてとらえるしかない。その物語を生成するために必要なのは、分けるという作業だ。分けるのは、ヒトが小さいからにほかならない。自分より小さく分けて分かったとする。Gen 界における、もうひとつの運動は、「交わす」ことである。「ものを交わす」から、「価値を交わす」へとヒトは「交わす」を変化させた。価値という分からないものに、ヒトはもてあそばれ、振り回されている。それが経済である。「増える・増やす」「交わす」の根底には、ヒトの欲望、とりわけ物欲がある。決して逃れることができない、根源的な欲がある。以上のような話です。なお、「後記」の中で「母語という枠の中で『外国語』で語る＝騙る」と「書き方によって書けることと書けないことがある」という意味のことを述べています。このシリーズの基本的なスタンスを言葉にしたものです。標準的な表記に直したキーワードは、「おもい・思い・想い・重い」「重み」「値」「値打ち」「かね・金」「はかる・量る・測る・計る・諮る・謀る」「サブプライム」「いちば・市場」です。直接書かなかったキーワードは、「ゲノム解読」「遺伝子工学」「遺伝子組み換え」「バイオテクノロジー」「クローン」「E S細胞＝胚性幹細胞研究」「ノーベル経済学賞」「金融工学」「CDO」「大不況」「資本主義」「市場経済」「造幣」「財政投融资」「投資」「投機」「博打」「株式」「ジョン・メイナード・ケインズ」「交換」「貨幣」「カール・マルクス」です。

*「うつせみのたわごと -11-」2010-02-12：前回を含め、記事が長くなるのが常態になっていきます。この回のテーマは、「め・げん・眼」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる眼界です。冒頭で「まじる・混じる」「もじ・文字」「まな・真名（漢字）」「まなこ・目」「みる・見る」と発音すると m で始まる言葉を頻出させて、ずらずという遊びをしています。次に、「めでみる」という行為を「見る・視る・観る・診る・看る・回る・廻る」と、さらにずらしています。このシリーズでは、こうした、つづられるテーマとつづる言葉たちの擬態＝媚態＝舞踏を試みたかったのです。そうした言葉たちの舞いを読者に読むというより、「見て」もらうことにより、眼界を体感してほしい、できれば「めまい＝目舞い」を体験してほしい、という願いが形を取っている珍しいケースです。平仮名尽くしで書く必然性が「見える」という意味でも、稀有な例です。内容的には、「見る」を「知覚する」という広い意味で取り、「見える＝見る＝見分ける＝分かる＝意識する＝認識する」へとつながっていくさまを語っています。「まだら・まばら」という言葉で、ヒトが「見間違う」「無視する」「見て見ぬ振りをする」こと、つまり、知覚と認識の限界性といかがわしさについても触れています。それまでに扱った各界と、眼界とがそれぞれ独立しているわけではなく絡み合っていることにも触れています。言葉の遊び

を多用しているので、要約をしても、あまり意味がありません。実際に、記事を「見て」いただきたいと思っています。標準的な表記に直したキーワードは、「みわける・見分ける・身分ける」「ことわる・事割る・言割る・断る・判る」「あわいはあわい・間は淡い」です。直接書けなかったキーワードは、「ミシェル・フーコー」「豊崎光一」『砂の顔』「視線」「空間的広がり」「時間的経過」「再現の不可能性」「可視化というまやかし」「記憶の限界性」「信号・情報・データ」「手話」「指点字」です。

*「うつせみのたわごと -12-」2010-02-13：テーマは、「つる・つるされてゆらぐ・げん・弦」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる弦界です。ヒトが天から垂れた「つる・弦」または糸につかまって吊るされて、ぶらぶらゆらゆらしている。すべてを何ものかに任せている。この記事では、「任せる・負ける」という身ぶりが大きな役割を演じています。ヒトの力を超えた「何物か・何者か」の存在が前提になっているにもかかわらず、ヒトはそれを知り得ないという立場で話を進めています。ヒトの力を超えた「何物か・何者か」の威を借りる人たちを批判しています。言葉遊びから、ヒトが「やりすぎていること」を列挙していますが、それもまた、人知を超えた現象として描いています。つまり、最終的な善悪さえ断じる力はヒトの側にはない、まして裁く力などないという意味です。「任せる」から「賭ける」へと話に移り、「出あう・出あい・あい」という圧倒的な偶然性（※もちろん、やらせです、偶然性を装っている＝演じているだけです）の中で、「愛」を出すという、めちゃくちゃなこじつけで終わっています。標準的な表記に直したキーワードは、「ぶらさがる」「揺れる」「身を任せる」「祈る・念じる」「驕りたかぶる」「代わりの者」「偽者」「生贄」「身の程を心得る」「サイコロを振る」です。直接書けなかったキーワードは、「代理（人）」「シャマニズム（シャーマニズム）」「シャーマン」「まつりごと・政・祭事・奉事」「予言（者）・預言（者）」「託宣・神託」「官僚主義」「議会制民主主義＝代表民主制＝間接民主制」「ジェームズ・フレイザー」『金枝篇』「文化人類学」「ステファヌ・マラルメ」「花＝生殖器＝性器」です。

*「うつせみのたわごと -13-」2010-02-14：テーマは、「減る・足りない・げん・減」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる減界です。言葉の遊びを多用しながら、「減る・足りない・欠ける」と「増える・足りる」とが言葉では矛盾しても、言葉の枠外では矛盾しないことを、言葉たちに演じてもらっています。再読すると、反意語や反対語と呼ばれている2項対立のからくりに対する懐疑と嫌悪感が表れているのを感じます。結果として、「減る」をめぐる言葉が「増える」こととなり、長い記事になりました。原理は単純です。ヒトは分ける。分けたものに名前を付ける＝分かったことにする。名前が増える、つまり、名前が足りなくなっていく。「事＝言足りる」が「事＝言足りない」となる。そうすると、訳＝分けが分からなくなってくる。「分けた＝分かった＝知が増えた」とならず、「分けた＝分かっていない＝知が欠けている」ことの確認にしかならないという「わけ」です。さらに、ヒトの知覚・認識・意識における集中力および持続力、データの保存容量、データの再現力・再構築力には限りがある。知が増えたはずが、常に減った・

足りない感じがする。要するに、減界は限界でもある。そんな話なのです。ヒトは自分で意識しているよりは、はるかにぼーっとしている。すかすかの意識とまだらの認識の中にいる。と要約することもできます。ただし、ヒトが考え出した、すかすかの2進法でも、疲れを知らない機械ならば、そこそこの働きをすることが可能です。標準的な表記に直したキーワードは、「足りない」「間が抜けている」「たわける・戯ける」「ぼんやり」「26文字」「重なる」「またがる」「絡み合う」「だぶる」「厚み」「重み」「多い」「多すぎる」「忘れる」です。直接書けなかったキーワードは、「対応」「写像」「関係性」「語彙」「分類」「命名」「ラベル・レーベル」「博物学」「言と事の同一視」「語の多義性・多層性」「アルファベット」「辞書・百科事典の編さん」「デジタル」「コンピューター」「ゼロサム」「ナノテクノロジー」です。

＊「うつせみのたわごと -14-」2010-02-15：テーマは、「糸・伝わる・伝える・げん・絃」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる絃界です。「伝わる・伝える」という動き、「伝わる・伝える」を仲介する媒体、「伝わる・伝える」の対象をめぐる、さまざまな言葉たちを次々と「ずらす」ことにより、その言葉たちの表情・身ぶり・目くばせを読者に体感してもらおうとしています。糸とその縦横の運動から成る織物と、紙と記された言葉たちの縦横の運動から成るテキスト＝テキストのつながりにも触れています。さらには、網とクモの巣、ひいてはインターネットへと話をつなげていきます。網における「引っ掛ける・仕掛ける」という動作の重要性を訴えています。検閲・検索の基本的仕組みだからです。「伝わる・伝える」の究極的な対象となる「揺れ・揺らぎ」について考察していますが、尻切れトンボに終わっています。再度、考えてみたいテーマです。不可解なテーマです。標準的な表記に直したキーワードは、「目まい」です。直接書けなかったキーワードは、「宮川淳」『引用の織物』『紙片と眼差のあいだに』『豊崎光一』『余白と余白または幹のない接木』『ロラン・バルト』『テキストの快楽』『Stephen Heath』『Vertige du déplacement』『ジル・ドゥルーズ』『プルーストとシーニュ』です。このシリーズは、タイトルを模倣し、まさに、たわごとで終わりました。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen界、眼界、弦界、減界、絃界。なお、各記事の中で、断っているように、10の「げん」をめぐる各界は、別個のものではなく、パラレルな関係にあり、同調し、共振しているとイメージしています。各界も、各界についてのイメージも、戯言であることは言うまでもありません。読者に、目まいまでは行かなくとも、笑いという揺らぎを促すことができたなら、そんな嬉しいことはありません。

＊「「外国語」で書くこと」2010-02-16：「うつせみのたわごと」シリーズを書き終えた感想文です。これまでに自分の書いてきたブログ記事を、「うつせみのうつお」で、スクロールしながら、時系列に巻物のように眺めていくと、いつも同じことばかり書いているなあと思い、金太郎飴を連想します。ただ、目立つところがあるとすれば、ときどき文体＝つづり方を微妙に変えることです。自分が書いたとされる文章に対する、ひとりよがりな感想＝印象にすぎませんが、いろいろな小細工や仕掛けをしているつもりだと

いう意味です。今回は、わりと目立つ文体上の細工をしました。漢語系の言葉の代わりに大和言葉系の語をもちいる。あるいは、前者を後者に置き換えるという作業をしました。そのさいに、どんなことを心がけたかについて述べています。キーワードとキーフレーズは、「くずす」「まげる」「杵をずらして書く」「違和感」「basic English」「VOA の special English」「言葉をつくりながら書く」「そとに近い場に身を置くことは、自分を揺さぶること」「柳瀬尚紀」「ジェイムズ・ジョイス」「フィネガンズ・ウェイク』『『翻訳不可能』を目ざして仕組む』『つづられる言葉たちに、つづられる内容を演じさせる』『渡部直己』『検索エンジン』『被害妄想』です。直接書かなかったキーワードは、「ジル・ドゥルーズ』『カフカー—マイナー文学のために』」です。

＊「揺さぶり、ずらし、考える」2010-02-17：「日本語の乱れ」や「最近の日本語は乱れている」という決まり文句を批判しています。言語が移り変わるという現象を、抽象的な紋切型の言葉に置き換えることに強い嫌悪感をいだいているからです。ありもしないもの、あるいは知覚し得ないものを、あたかも、あるかのように想定する思考停止状態に我慢ができないからです。「言語」、「国語」という言葉の抽象性にも、噛みついていきます。個人は常に移り変わりつつある多面的な存在として揺らいでいる。そう信じています。その個人が発する言葉が、ひとくくりできるわけがありません。そうした思いを前提に、いとおしく健気な言葉たちの、生き生きとしたありようを擁護しようとした記事とさえそうです。キーフレーズは、「どの時代においても、言葉は変わる。言葉は、特定の人たちの占有物ではない。天は言葉の上に言葉を造らず、言葉の下に言葉を造らず」「あやしげではない日本語 or きちんとした日本語 or 標準的な日本語 or 正しい日本語 or 美しい日本語 or 乱れていない日本語なんて、あるのでしょうか。ない、と思います」「『考える』を、簡単に済ませる方法はないのか。あります。『決まり文句』を使えばいいのです」「たとえ、思考停止に等しい決まり文句であっても、その言葉を『揺さぶる』ことにより、『ずらす』ことができます。そうした『行為』を『思考する・考える』と呼んでもいいのではないのでしょうか」です。直接書かなかったキーワードは、「高山宏」「グスタフ・ルネ・ホッケ」「迷宮としての世界』『文学におけるマニエリスム』『種村季弘』『ナンセンス詩人の肖像』」です。

＊「動詞という名の名詞」2010-02-19：言葉を話したり書いたりすることは、未だにヒトに備わっている、ヒトを除く生き物というレベルでのありようから見れば、きわめて不自然である。そんな思いをいただいています。日常生活において、ヒトが言葉に振り回されているのは、それが生き物というレベルから逸脱しているからです。とはいえ、ヒトである限り、言葉と無縁で生きることはできません。致し方ないことです。まして、言語そのものについて思いをめぐらしたり、話したり書いたりすることは、不可能性に挑むことです。言葉そのものを思考の対象にすれば、頭の中も、出てくる言葉も、ごちゃごちゃになります。ならないとすれば、手加減をしているか、無難な決まり文句を借りているだけです。「ごちゃごちゃぐちゃぐちゃ＝言語」を獲得してしまったヒトは、「ご

ちやごちやぐちやぐちや＝意識＝思考＝言動」を回避するすべを身につけているのが普通です。不自然さを自然さとして錯覚するすべです。その不自然な言語というものの不自然さのひとつとして、動作を名づけて動詞という名の名詞とする、からくりがあります。そのからくりをめぐる悪態。この記事、そのように要約することも可能かと思われま。ややこしい要約で、ごめんなさい。キーフレーズは、「森羅万象の動きや揺らぎを、名詞としてしかとらえられないヒトという生き物——」「万物を『名付ける・なづける・てなづける』という、ヒトに備わった習性、つまり名詞至上主義とでも呼びたくなる性癖に対する、ささやかな抵抗。その抵抗として、たとえば、音楽や映像に期待を寄せています。でも、いちばん、気になるものを挙げるとすれば、日本語や中国語や英語などと同じく言語である、手話です」です。直接書かなかったキーワードは、「ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン」「モーリス・ブランショ」『ヴィトゲンシュタインの問題』(in『フローベール全集別巻』)です。

＊「名詞という名の動詞（前半）」2010-02-21：前回に引き続き、言語活動というヒト特有の行動が、生物としてのヒトの日常生活に、ひいては種としての存続に、必ずしもプラスとして働いていないのではないかという問題提起をしています。森羅万象の動きや揺らぎを、名詞としてしかとらえられないヒトという生き物が、ヒト以外の生物がクリアできる障害物を、言語というフィルターを通してとらえているために、クリアできない。そんな事態も起きているのではないか。そんな危惧について触れています。もっとも、神経症的内容なので、危惧すべきなのは、自分の頭ではないかとも、思っているのですが……。キーフレーズは、「言葉というものは、ヒトを錯覚させます。『見る・見える』という言葉があり、その『見る・見える』をつかうことによって、ヒトは『見た・見えた』気持ちになってしまう。『見る・見える』と『見た・見えた気持ちになる』とでは、大違いです」「ヒトは、名づけることにより、手抜きをする方法を習得したのではないのでしょうか。言い換えると、視野に入るすべてのものを注視しなくてもいい仕組みを手にしたということです。自分の周辺を、まだら状に見ていても大丈夫になったのです」です。直接書かなかったキーワードは、「ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン」「モーリス・ブランショ」『ヴィトゲンシュタインの問題』(in『フローベール全集別巻』)です。

＊「名詞という名の動詞（後半）」2010-02-21：横着なやり方で恐縮ですが、以下にこの記事のいわば「サビ」に当たるキーフレーズだけを挙げて、パッチワークをしてみます。「固有名詞は、強く、また多様なイメージを各人に喚起させる言葉です。あるテーマを論じる場合に、ある固有名詞を登場させると、たとえば、その固有名詞を名に持つ人に対する読者の多様なイメージが次々と呼び覚まされます。それがいわば『ノイズ＝ラベル』となって、そのテーマを演じている言葉たちの『表情・身ぶり・目くばせ・働き』などに、読者の目が行かなくなる。つまり、つづられている言葉たちへの注視の妨げになる。それほど、固有名詞のイメージの喚起力は強いのです」／「個人差はあるでしょうが、名詞の中では（固有名詞が）いちばん人の心や意識を揺さぶります。品詞の中では、

特に名詞と動詞が激しい『揺らぎ＝動き』を人に『送ってくる＝発してくる』気がします。そのほかの品詞も、人を揺さぶります」／「品詞などという言葉を持ちいて、『ことわり＝言割り＝事割り＝断り』をする必要はない。品詞ではなく、言葉＝言の葉でいい。言葉は、人に働きかけ、『揺らぎ＝動き』を人に『送ってくる＝発してくる』。その『揺らぎ＝動き』と同調し共振した人は、『考える・思考する』にいたる」です。直接書かなかったキーワードは、「フリードリヒ・ニーチェ」「ジル・ドゥルーズ」「アンタンシテ・intensité・強度」です。

*「はかる -1-」2010-02-27：キーフレーズは、「おもいはおもい・思いは重い」「おもいおもい・重い思い」なんて、最近、よく記事に書いています。こういうのは、おふざけではなく、自分がつづっているさまざまな言葉たちの「重み・思い・意味・忌・イメージ」＝「多義性・多重性・多層性」を、受けとめて楽しんでいるのです。はかっている、とも言えそうです。「はからずに・測らずに・量らずに・図らずに」、文章はつづれない気がします。」／「一方の「わかる」については、これまでさんざん、ああでもないこうでもない、ああでもあるこうでもある、ああでもないこうでもある、ああでもあるこうでもない、をしてきましたが、殺伐とした印象が常につきまとっているように思えてなりません。何しろ「わかる」には、「分ける・切る・割る」という動作が基本にあります。血生臭いです。ばらばら殺人とか、腑分けとか、マグロの解体という言葉の思い起こします。痛々しいのです。」です。

*「はかる -2- (前半)」&「はかる -2- (後半)」2010-02-28：キーフレーズは、「はかる」はヒトという枠内でのいわば「確信犯的」かつ「テキトーな」行為であるのに対し、「わかる」はヒトという枠外へと、身の程もわきまえず侵犯しようといういわば「無鉄砲で」かつ「賭けに等しい」行為だと言えそうです。「はかる」では、ダメモトに近い軽い気持ちで秤に「かける・掛ける・翔る・賭ける」。「わかる」では、マジで白黒のどちらかに「かける・掛ける・駆ける・懸ける・賭ける」。そんなイメージでしょうか。」／「「わかる」という行為は、ヒトが不可能性に挑戦することです。客観性・真実・事実・現実といった、ヒトという枠の外への志向が前提となっています。ヒトは「わかる」という言葉を発し使用することはできても、「わかる」という言葉が指し示している行為を、ヒトが「期待する」ほどまでには実現できません。」／「「はかる」という行為は、ヒトが自らの可能性らしきものに挑むことです。なぜ、「可能性らしき」なのかは、上述の「何かの代わりに何かではないものを持ちいる」という仕組みが働いているからです。数、長さ、重さ、量といった一連の「もののありよう」を、感覚器官を通して、つまり、あくまでも「何かではないもの＝何かの代わり」として「とらえる」ことが基本です。」／「ふつう、ヒトは目的になしに、はかることはありません。何らかの「思い・思う」があって、それを満たしたり、実現するために、「重み・重い」をはかります。その目的は、確固としたものであたり、気ままであったりします。」／「数字・数値自体は、言葉・語と同様に、ニュートラルなものです。比喩的に言えば、「もの」です。ただ、「もの」はヒトが、ある

目的・意図をもって、ある視点・立場から、恣意的に・自分の都合に合わせて、捏造する・でっち上げることが可能です。「はかる」ための「基準」としてよくもちいられる数字・数値、あるいはデータ・情報と呼ばれる「もの」は、「わかる」ための「根拠」と同様に、「すっぴん」では、かなり「ぐちゃぐちゃごちゃごちゃ」としたものであるにもかかわらず、「厚化粧」をほどこした「すっきり」「くっきり」「はっきり」「すばっつ」に、「化けている」というか「化けさせられている」と言えそうです。粗雑な言葉をもちいて単純化するなら、「もの」に「解釈」が行われるということです。」です。

＊「はかる -3-」【不投稿記事】：キーフレーズは、「ヒトに限った話かもしれませんが、空間的な遠近という意味合いだけでなく、「はるか・遥か」つまり「とおくへだたった・遠く隔たった」存在を「おもう・思う・想う」行為が、「はかる・おしはかる」または「おもいやる」です。「はかる・はるか」をめちゃくちゃにこじつけてしまいました。このように、「正しい」とされる意味に逆らった言葉の運動のありようや、ノイズとしてみなされがちなイメージを「いみ・忌」と、このブログでは呼んでいます。」／「「はかる」とは、ヒトという枠内において、さまざまな「思い・思う・想い・想う」の「おもい・重い」重みと「あつい・厚い・熱い・篤い」厚みと重なり合って生じる擦れる音、つまり「おとずれ・音擦れ」として、ヒトにのみ「訪れる」ものなのではないでしょうか。だから、たぶん、はかないのです。その「はかる」の「はかなさ」について、次回は書きたいと思います。」／「「はかる」は「はかない・とりとめがない・たよりにならない・おもいがかならずしもかなわない」。「はかない」に似た語で「はかなくなる」という古い言い方があります。「なくなる・しぬ」という意味です。「はかる」にネガティブなイメージを、ヒトはふつう覚えないと思います。言葉に対しても覚えることは、まずないでしょう。でも、ヒトは日々、言葉と「はかる」に裏切られ、がっかりさせられています。それなのに、めげない。たくましい生き物です。これはある種の鈍感さに支えられた、たくましさです。」です。

＊「はかる -4-」【不投稿記事】：キーフレーズは、「「はかる」を、漢字、つまり中国語に当てはめて、意味をずらす。「はかる・計る・測る・量る・図る・謀る・諮る・別る」／「「はかる」を、発音の似た大和言葉にずらす。「はかる・わかる」」。／「はかる」を、その音節を並べかえて忌（※「いみ」と読んでください）をずらす。「はかる・はるか」／「母語である日本語と戯れながら、ずらす。」です。

◆以下の記事には、解説がありません。

＊「代理としての世界 -1- 」 2010.03.04

＊「代理としての世界 -2-」 20 10.03.05

* 「代理としての世界 -3-」 2010.03.06

* 「代理としての世界 -4-」 2010.03.07

* 「代理としての世界 -5-」 2010.03.09

* 「代理としての世界 -6-」 2010.03.11

* 代理としての世界（改訂版）（1）

* 代理としての世界（改訂版）（2）

* 代理としての世界（改訂版）（3）

* 代理としての世界（改訂版）（4）

奥付

奥付

うつせみのあなたに ダイジェスト

<https://puboo.jp/book/18295>

著者：星野廉

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/renhoshino77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/18295>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/18295>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社 paperboy&co.

{{-
-}}

うつせみのあなたに ダイジェスト

版番号の予定

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
